

白滝遺跡群 XIV

第1分冊（本文Ⅰ.Ⅱ.Ⅳ.Ⅴ章・一覧表編）

遠軽町 旧白滝3遺跡

旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査業務報告書

- I 緒言
- II 遺跡の位置と周辺の環境
- IV 自然科学的手法による分析
- V まとめ
- 引用参考文献
- 掲載遺物等一覧

平成26年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

白滝遺跡群 XIV

第1分冊
本文Ⅰ.Ⅱ.Ⅳ.Ⅴ章
一覧表編

旧白滝3遺跡

（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書

第311集

平成26年度

白滝遺跡群 XIV

第1分冊（本文 I. II. IV. V 章・一覧表編）

遠軽町 旧白滝3遺跡

旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査業務報告書

I 緒言

II 遺跡の位置と周辺的环境

IV 自然科学的手法による分析

V まとめ

引用参考文献

掲載遺物等一覧

平成26年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

- 1 この報告書は、旭川紋別自動車道建設工事に伴い、平成20年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した遠軽町(旧白滝村)旧白滝3遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。この他、平成7～19年度に調査を行った各遺跡の調査概要も簡略に報告している。
- 2 平成7年度より行われている白滝遺跡群の調査の概要については、これまでいくつかの機会に紹介しているが、旧白滝3遺跡に関しては、本書の記載をもって調査所見とする。
- 3 本書の執筆(IV章の一部を除く)は坂本尚史と直江康雄が行い、全体の編集は坂本尚史が担当した。但し、I・II章に関してはこれまで刊行してきた「白滝遺跡群I～XII」の記述を基にした。
- 4 現地の写真撮影は、坂本尚史・直江康雄・熊谷仁志・吉田裕吏洋が行い、航空写真・遺物は、後述の会社が行った。
- 5 写真図版は現地調査については直江康雄が、遺物については各区域担当が作成した。
- 6 遺物の整理作業は一次整理を坂本、接合までの二次整理はA地区を坂本、B地区を直江が担当し、実測以降の業務は各区域の担当が行った。区域担当は、坂本がC4-14区、BC15-17区、BD24-26区、BC27-29区、BH30-34区、CH35-39区、CH40-43区、CH44-45区、CH46-48区、直江がBD18-23区、EH22-25区、EH26区、DH27-29区、DF77-78区とC・D地区区受け持った。執筆担当も同様である。
- 7 下記作業および分析の一部は併記した機関に委託した。
現地測量・航空写真撮影およびデータ入力、図版(地形図・模式図など)作成：(株)シン技術コンサル
遺物実測・トレース：(株)トラスト技研
遺物写真撮影：(株)写真事務所クーク(佐藤雅彦)
接合資料他実測用写真撮影：小川忠博
黒曜石産地推定：(株)遺物材料研究所
放射性炭素年代測定：(株)加速器分析研究所
赤色礫の岩石鉱物鑑定：北海道立総合研究機構 地質研究所
- 8 出土遺物は遠軽町教育委員会が、写真・データなどの記録類は公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが保管する。
- 9 分布図の縮尺は、原則以下の通りである。但し、一部スペースに応じた任意の縮尺がある。いずれの場合もスケールを示した。
調査区全体の分布図 1:1,200
各石器ブロック別の分布図 1:150 もしくは1:200
母岩別接合資料の分布図 1:200
- 10 遺物の縮尺は実測図・写真とも原則以下の通りである。
単体の石器類 1:2
接合資料 1:3
- 11 実測図を掲載した石器・接合資料は全て写真図版に掲載し、単体で掲載した石器で接合資料に含まれるものについては、接合資料の縮尺に合わせて再度掲載した。また、写真図版にのみ掲載した単体石器・母岩別接合資料もある。
- 12 実測図は基本的に正面の右下に掲載番号を付け、正面の右に右側面・裏面、左に左側面、上に上面、下に下面を配置した。但し、紙面の関係上一部配置が変更されたものもある。

- 13 遺物掲載番号は、挿図と写真図版で同一の番号を付している。
- 14 遺物掲載番号は区域単位で1からの連番を付し、番号は、①単体石器、②写真のみ掲載単体石器、③接合資料、④写真のみ掲載接合資料の順序で連続させている。また、単体石器で掲載した石器を接合資料として再度掲載する場合は同一の掲載番号を使用している。
- 15 接合資料と共に掲載した個々の石器（接合する剥片・石刃・製品など）は原則剥離順に並べている。
- 16 細石刃核と舟底形石器は計測部の位置と呼称を図I-13の通りとし、これらを本文中では長さ×幅×高さの順に、掲載一覧表では左から高さ×長さ×幅の順に記載している。
- 17 掲載一覧表の「長さ」・「幅」・「厚さ」・「重量」で示した数値で、括弧付きのものは、欠損部位の計測値を表している。
- 18 掲載一覧表の「層位」で無記載のものは、地点計測取り上げを行ったⅡ層出土の点取り遺物を意味する。対して「Ⅰ」、「Ⅱ」の記載があるものは一括遺物である。
- 19 単体の掲載資料で折れ面接合をしているものは、各遺物番号を輪郭図に記入し添付した。また、現代の破損によるものは輪郭図の接合線を破線で示した。
- 20 単体資料の実測図には以下の情報を添付している。
- Ⅱ層との接合関係を持たない表土出土遺物：「表土」
 - 剥離面接合関係を有する資料：「母岩・接合番号」
 - 母岩別資料が掲載されている場合：「掲載母岩」もしくは「写真掲載母岩」
 - 黒曜石産地分析資料：「試料番号」および「判定結果」
 - 黒曜石以外の使用石材（略称）
- 21 母岩別資料は母岩中に複数個体の接合資料を掲載したものがあり、「母岩別資料○○、接合資料△△・□□」と接合資料が「・」で結ばれるものと、「母岩別資料○○、接合資料△△+□□」と「+」で結合されるものがある。前者は各接合資料を個別に図化しており、剥離工程も分けて模式化し記述している。後者は両接合資料を復元組立てにより一個体の資料として図化したもので、剥離工程もまとめて説明した。
- 22 調査と報告書作成にあたっては、下記の機関および人びとの指導ならびに協力を得た。（順不同、敬称略）
- 文化庁、北海道教育委員会、遠軽町教育委員会、今金町教育委員会、帯広市埋蔵文化財センター、北網走北見文化センター、釧路手塚文化振興事業団埋蔵文化財センター、北海道大学、札幌国際大学、札幌学院大学、國學院大学、明治大学、北海道立総合研究機構地質研究所、鶴丸俊明、横山英介、越田賢一郎、長崎潤一、坂梨夏代、北沢 実、山原敏朗、熊林佑允、寺崎康史、宮本雅通、高倉 純、鈴木健治、中沢祐一、長沼正樹、太田敏量、山田 哲、松村諭文、瀬下直人、熊谷 誠、八重柏 誠、齊藤謙一、菊川博幸、木村英明、中村有吾、垣原康之、大場正善、大塚宣明、飯田茂雄、鹿又喜隆、田口 慎、芝 康次郎、佐藤宏之、国武貞克、役重みゆき、尾田謙好、夏木大悟、阿部朝衛、村木 敬、北村忠昭、北田 勲、山田和史、植松曉彦、渋谷孝雄、澤田純明、光石鳴巳、出穂雅実、林 和広、島田和高、野口 淳、藪下詩乃、赤井文人、小原俊行、傳田惠隆、馬場隆介

記号等の説明

- 1 接合資料の中で、剥片石器や石核の素材である剥片もしくは原石を分割したのについては「個体A」「個体B」・・・と呼称した。
- 2 接合資料は、剥離工程を理解し易くするために模式図を作成し、実測図と共に掲載した。模式図は同一段階の剥離群毎にトーンを変え、剥離の流れを番号で示した。但し、切り合い関係がなく、前後関係が明らかでないものにおいても便宜上番号を付けたので、詳細は個々の説明を参照願いたい。
- 3 一部の接合資料実測図においては、視覚的に図を理解し易くするために接合剥片の腹面側をトーンで示した。また、接合資料内に剥片素材の個体が存在する場合、全体の剥離の腹面と区別するために、個体の調整剥片腹面を目の粗いトーンで示した。
- 4 剥離模式図の縮尺は原則1:5である。模式図中の矢印(→)は接合剥片の剥離方向を示すが、接合剥片の打点側が欠損している場合は切れた矢印(→)、重なって見えない部分は破線の矢印(---→)で示した。また、折れの場合は加圧部分に▲を付けている。
- 5 尖頭器・舟底形石器などの製作石器が欠落した接合資料で、その形状が復元可能な場合は剥離工程模式図に太実線で輪郭線を復元している。
- 6 調査区域図および遺物分布図などの方位記号は平面直角座標の北を、数値は標高(単位はm)を示す。
- 7 遺構や石器ブロックについては以下の略号を使用した場合がある。

Sb: 石器ブロック F: 焼土 Cb: 炭化木片ブロック Fc: フレイク集中

- 8 遺物分布図では以下の記号を用いた。また、母岩別資料の挿図に掲載した母岩情報表と模式図には、括弧内に示した器種略称を用いている。

●: 剥片 (FK)	●: 石刃 (BL)	●: 縦長剥片 (LF)	+ : 削片 (SP)
■: 細石刃 (MB)	■: 細石刃核 (MC)	◆: 舟底形石器 (BT)	▲: 尖頭器 (PT)
◆: 両面調整石器 (BF)	▲: 彫器 (BU)	■: 搔器 (ES)	◆: 錐形石器 (DR)
▼: 二次加工ある剥片 (RF)	▼: 削器 (SS)	■: 石核 (CO)	■: 石刃核 (BC)
*: 楔形石器 (PE)	▲: 石鏃 (AH)	×: 赤色顔料原材	□: 台石・石皿
□: 原石・礫			

- 9 遺物分布図の記号横の数字は遺物番号を示している。また、分布図中に示した遺物実測図横の数字は掲載番号である。
- 10 石器ブロック別分布図、母岩別接合資料分布図では、全体の遺物を網かけで示している。
- 11 接合資料の接合分布図では、折れ面接合を実線で示した。
- 12 石質は掲載遺物の一覧表に示したが、黒曜石については、以下の五種類に分けて示した(口絵16)。
黒曜石 1: 黒色 黒曜石 2: 梨肌 黒曜石 3: 黒色に茶色が混じる(黒>茶)
黒曜石 4: 茶色に黒色が混じる(茶>黒)
黒曜石 5: 黒色に紫色もしくは紫色がかった茶色が混じる(黒>紫・茶)
接合資料の一覧表ではスペースの関係上、上記の黒曜石 1 ~ 5 についてそれぞれを 1 ~ 5 の数字のみで示した。
- 13 黒曜石以外の石質については、実測図番号の下に以下の略号で示した。
安山岩: An めのう: Ag 珪質頁岩: Si-Sh 珪岩: Qu

写真図版の説明

- 1 掲載順は、空中写真、調査状況、土層、炭化木片ブロック、遺物出土状況、出土遺物である。
- 2 掲載遺物の番号は挿図中の番号と一致している。接合資料は基本的に挿図の掲載順としたが、割り付けの関係で前後することや、写真のみの掲載資料が組み合わされている場合がある。検索にはⅢ章末尾（第4分冊）に掲載の「母岩番号順挿図・図版一覧表」を参照願いたい。
- 3 写真の縮尺は、単体石器は1：2、接合資料は、1：3とした。
- 4 接合資料の写真は、実測図作成用として90度展開の台に固定し、破片の輪郭や剥離面が明確になるようなライティングでストロボ撮影したものである。したがって、各面の誤差はないが、単体石器や接合破片とは若干異なった写真となっている。また、撮影時の固定具などが写り込んでいる場合がある。
- 5 単体石器は通常の俯瞰撮影なので、正面と裏面では若干の誤差を生じていることがある。また、接合資料の写真とも若干異なっていることがある。

分冊項目

第1分冊 本文Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ章・一覧表編

口絵

例言・記号等の説明・写真図版の説明

分冊項目・目次

Ⅰ章 緒言

Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

Ⅳ章 自然科学的手法による分析

Ⅴ章 まとめ

引用・参考文献

掲載遺物等一覧

第2分冊 本文Ⅲ章・石器実測図・分布図編

記号等の説明

目次

Ⅲ章 遺構と遺物

1 遺構

2 遺物 (1) ~ (5)

第3分冊 本文Ⅲ章・石器実測図・分布図編

記号等の説明

目次

Ⅲ章 遺構と遺物

2 遺物 (6)

第4分冊 本文Ⅲ章・石器実測図・分布図編

記号等の説明

目次

Ⅲ章 遺構と遺物

2 遺物 (7) ~ (16)

第5分冊 写真図版編

写真図版の説明

目次

写真図版

第1分冊(本文I. II. IV. V章・一覧表編)目次

口絵(カラー図版)

例言・記号等の説明・写真図版の説明

分冊項目

目次

I	緒言	1
1	調査要項	1
2	調査体制	2
3	調査に至る経緯	3
4	調査概要	7
(1)	発掘区の設定	7
(2)	調査の方法	7
(3)	整理の方法	12
(4)	報告書の作成	15
(5)	遺構・遺物の分類	16
(6)	土層	29
(7)	調査結果の概要	31
II	遺跡の位置と周辺の環境	45
1	遺跡の位置と周辺の遺跡	45
2	遺跡周辺の地形と地質	48
3	黒曜石の原石山・赤石山とその周辺	50
IV	自然科学的手法による分析	55
1	旧白滝3遺跡から出土した赤色礫(6点)の鑑定報告	55
(1)	はじめに	55
(2)	分析方法	55
(3)	分析結果	55
(4)	考察	56
2	赤色礫のEPMA分析	65
3	旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原材産地分析	67
(1)	はじめに	67
(2)	産地分析の方法	67
(3)	黒曜石原石の分析	69
(4)	結果と考察	78
4	旧白滝3遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	97
(1)	測定対象試料	97
(2)	測定の意義	97
(3)	化学処理工程	97
(4)	測定方法	97
(5)	算出方法	97
(6)	測定結果	98
5	旧白滝3遺跡の堆積物粒度分析及び土壌化学性分析結果報告	106
(1)	はじめに	106
(2)	試料採取地点の地形と堆積コンテキスト	106
(3)	試料と方法	107
(4)	結果	108
(5)	議論と結論	114
6	旧白滝3遺跡における地形・地質環境	116
(1)	はじめに	116
(2)	地質断面の記載	116
(3)	旧白滝3遺跡付近の地史	118
(4)	堆積時期について	119
(5)	遺物および遺構層位の逆転現象について	119

V	まとめ	121
1	調査結果の概要	121
2	白滝1群	124
(1)	出土区域と出土状況	124
(2)	組成石器	124
(3)	石器製作技術	124
(4)	石材消費形態	124
(5)	年代	126
3	蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群	126
(1)	出土区域と出土状況	126
(2)	組成石器	126
(3)	石器製作技術	128
(4)	石材消費形態	128
(5)	年代	128
4	広郷型細石刃核石器群	128
(1)	出土区域と出土状況	128
(2)	組成石器	129
(3)	石器製作技術	135
(4)	石材消費形態	145
(5)	年代	152
5	服部台型石刃・峠下型細石刃核石器群	153
(1)	出土区域と出土状況	153
(2)	組成石器	154
(3)	石器製作技術	157
(4)	石材消費形態	158
(5)	年代	159
6	有舌尖頭器石器群	159
(1)	出土区域と出土状況	159
(2)	組成石器	160
(3)	石器製作技術	162
(4)	石材消費形態	163
(5)	年代	167
7	小型舟底形石器石器群	168
(1)	出土区域と出土状況	168
(2)	組成石器	168
(3)	石器製作技術	169
(4)	石材消費形態	173
(5)	年代	174
8	その他の石器群について	174
(1)	石器群と概要	174
(2)	川西型石刃石器群	174
(3)	ホロカ型影器石器群	175
9	土層堆積と石器群の重層的出土状況	176
	引用・参考文献	179
	掲載遺物等一覧	183
	報告書抄録	291

第1分冊(本文I、II、IV、V章・一覧表編)挿図目次

I章 緒言

図I-1	白滝遺跡群調査遺跡図	4
図I-2	調査範囲・発掘区設定図	8
図I-3	発掘区設定図・区域設定図	10
図I-4	調査区域地形図	11
図I-5	白滝遺跡群出土石器(1)	18
図I-6	白滝遺跡群出土石器(2)	19
図I-7	白滝遺跡群出土石器(3)	20
図I-8	白滝遺跡群出土石器(4)	21
図I-9	白滝遺跡群出土石器(5)	22
図I-10	白滝遺跡群出土石器(6)	23
図I-11	白滝遺跡群出土石器(7)	24
図I-12	白滝遺跡群出土石器(8)	25
図I-13	二次加工ある剥片の類型、計測の基準・面の呼称	28
図I-14	基本土層図	30
図I-15	土層断面(1)	32
図I-16	土層断面(2)	33
図I-17	土層断面(3)	34

II章 遺跡の位置と周辺の環境

図II-1	遠軽町白滝地区の位置と地区内の遺跡	46
図II-2	旧白滝3遺跡の位置と周辺の遺跡	47
図II-3	段丘面分布図	49
図II-4	赤石山と周辺の主な旧石器時代の遺跡	51
図II-5	調査遺跡・黒曜石露頭位置・溶岩分布図	53

IV章 自然科学的手法による分析

図IV-1	赤色礫の偏光顕微鏡写真(1)	58
図IV-2	赤色礫の偏光顕微鏡写真(2)	59
図IV-3	赤色礫の偏光顕微鏡写真(3)	60
図IV-4	赤色礫の偏光顕微鏡写真(4)	61
図IV-5	赤色礫のXRD分析結果(1)	62
図IV-6	赤色礫のXRD分析結果(2)	63
図IV-7	赤色礫のXRD分析結果(3)	64
図IV-8	分析試料	65
図IV-9	赤色礫のEPMA分析結果	66
図IV-10	日本・朝鮮半島・極東ロシア・アラスカ州における表IV-1~5の使用の石器原料伝播図	67
図IV-11	黒曜石原産地	70
図IV-12	産地分析試料出土位置図	88
図IV-13	産地分析試料(1)	89
図IV-14	産地分析試料(2)	90
図IV-15	産地分析試料(3)	91
図IV-16	産地分析試料(4)	92
図IV-17	産地分析試料(5)	93
図IV-18	産地分析試料(6)	94
図IV-19	産地分析試料(7)	95
図IV-20	産地分析試料(8)	96
図IV-21	暦年較正年代グラフ(1)	101

図IV-22	暦年較正年代グラフ(2)	102
図IV-23	暦年較正年代グラフ(3)	103
図IV-24	暦年較正年代グラフ(4)	104
図IV-25	暦年較正年代グラフ(5)	105
図IV-26	岩相層序ユニット区分図	107
図IV-27	粒度分析結果	110
図IV-28	土壌化学性分析結果(1)	112
図IV-29	土壌化学性分析結果(2)	113
図IV-30	旧白滝地域の地形分類図	117
図IV-31	旧白滝3遺跡における地質断面スケッチ(B25~B30区)	117
図IV-32	ソリフラクションによって古い石器が新しい石器を覆うイメージ(模式図)	119

V章 まとめ

図V-1	各石器群の分布状況	122
図V-2	遺構と遺物の分布状況	123
図V-3	白滝1群の石器	125
図V-4	蘭越・美利河型細石刃核石器群の石器	127
図V-5	広郷型細石刃核石器群の石器(1)	130
図V-6	広郷型細石刃核石器群の石器(2)	132
図V-7	広郷型細石刃核石器群の石器(3)	133
図V-8	広郷型細石刃核石器群の石器(4)	135
図V-9	広郷型細石刃核石器群の石器(5)	136
図V-10	広郷型細石刃核石器群の石器(6)	137
図V-11	広郷型細石刃核石器群の石器(7)	138
図V-12	広郷型細石刃核石器群の石器(8)	139
図V-13	広郷型細石刃核石器群の石器(9)	140
図V-14	母型形状の類型	142
図V-15	打面調整と再生の工程(縦断面)	142
図V-16	作業面の整形技術	142
図V-17	厚手検付石刃剥離による石核整形	142
図V-18	作業面の90度転移	142
図V-19	広郷型石器群石刃技法母岩の石材消費形態	147
図V-20	BD24-26区の石材消費量	148
図V-21	BD24-26区 母岩別接合資料の分布パターン	151
図V-22	Sb-17・18の形成過程	152
図V-23	A-D類母岩の作業推移	152
図V-24	腹部台型石刃石器群の石器	155
図V-25	峠下型細石刃核石器群と腹部台型石刃石器群の石器	156
図V-26	有舌尖頭器石器群の石器(1)	161
図V-27	有舌尖頭器石器群の石器(2)	164
図V-28	有舌尖頭器石器群の石器(3)	165
図V-29	有舌尖頭器石器群の石器(4)	166
図V-30	小型舟底形石器群の石器(1)	170
図V-31	小型舟底形石器群の石器(2)	171
図V-32	川西型石刃石器群の石器	175
図V-33	ホロカ型器石器群の石器	176
図V-34	石器群・遺構の層位的位置と年代値	178

第1分冊(本文I. II. IV. V章・一覧表編)表目次

I章 緒言

表I-1 白滝遺跡群遺跡別・調査年別調査面積一覧	3
表I-2 白滝遺跡群調査結果概要一覧	5
表I-3 調査遺跡の石器ブロック群一覧	6
表I-4 図I-5～12の石器ブロック群対応表	26
表I-5 区域別・層位別点数・重量集計	43
表I-6 出土遺物点数・重量一覧	44

II章 遺跡の位置と周辺の環境

表II-1 遠軽町白滝地域の遺跡一覧	47
--------------------	----

IV章 自然科学的手法による分析

表IV-1 各黒曜石原産地における原石群の 元素比の平均値と標準偏差値(1)	71
表IV-2 各黒曜石原産地における原石群の 元素比の平均値と標準偏差値(2)	72
表IV-3 各黒曜石原産地における原石群の 元素比の平均値と標準偏差値(3)	73
表IV-4 黒曜石製遺物群の元素比の平均値と 標準偏差値(1)	74
表IV-5 黒曜石製遺物群の元素比の平均値と 標準偏差値(2)	75
表IV-6 湧別川河口域の河床から採取した 247個の黒曜石円礫の分類結果	77
表IV-7 常呂川(中ノ島～北見大橋)から 採取した661個の黒曜石円礫の分類結果	77
表IV-8 サナブチ川から採取した80個の 黒曜石円礫の分類結果	77
表IV-9 金華地区から採取した20個の 黒曜石円礫の分類結果	77
表IV-10 生田原川支流支線川から採取した 19個の黒曜石円礫の分類結果	77

表IV-11 生田原川支流大黒沢川から採取した 5個の黒曜石円礫の分類結果	77
表IV-12 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の 元素比分析結果(1)	80
表IV-13 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の 元素比分析結果(2)	81
表IV-14 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の 元素比分析結果(3)	82
表IV-15 遠軽町旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の 産地分析結果(1)	84
表IV-16 遠軽町旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の 産地分析結果(2)	85
表IV-17 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の 新元素比による産地分析結果	86
表IV-18 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の 産地別使用頻度	86
表IV-19 放射性炭素年代測定結果(δ13C補正值)	99
表IV-20 放射性炭素年代測定結果 (δ13C未補正值、暦年較正用14C年代、 較正年代)	100
表IV-21 粒度分析結果	109
表IV-22 土壌化学性分析結果	111

V章 まとめ

表V-1 広郷型石器群黒曜石製石刃技法母岩の 区域別搬入・搬出状況	142
表V-2 BD24-26区 広郷型細石刃核石器群 母岩別接合資料の分布パターン	150
表V-3 BD24-26区 広郷型細石刃核石器群 母岩別接合資料のSb分布状況	150

掲載遺物等一覧

表1 旧白滝3遺跡掲載石器一覧	183
表2 旧白滝3遺跡掲載接合資料一覧	200

IV 自然科学的手法による分析

1 旧白滝3遺跡から出土した赤色礫（6点）の鑑定報告

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 地質研究所
資源環境部 資源環境グループ

(1) はじめに

(財)北海道埋蔵文化財センターより、「旧白滝3遺跡から出土した赤色礫（6点）」についての岩石鉱物鑑定依頼（北埋第445号 平成22年12月17日）があった。これを受け、遺物試料6点について「偏光顕微鏡による岩石鉱物鑑定」および「X線回折装置（XRD）による鉱物鑑定」を実施した。これらの鑑定結果を取りまとめたので、ここに報告する。

(2) 分析方法

旧白滝3遺跡から出土した赤色試料（6点）について、偏光顕微鏡による岩石鑑定とXRD（X線回折装置）鑑定を実施した。偏光顕微鏡用の鑑定試料は、(財)北海道埋蔵文化財センターの担当者直江康雄氏の立ち会いのもと、試料を岩石カッターで切断した。これを樹脂（ベトロボキシ）で固定後、鑑定用の薄片を作成した。XRDは粉末法により測定した。但し測定試料が少量であるため、試料を無反射シリコン板にエチルアルコールで付着させる方法を採用した。XRDは地質研究所に設置されているRIGAKU社製のガイガーフレックス（30kV-16mA）を使用した。

(3) 分析結果

- ・試料No.1 (B38-2、18.0g)

【偏光顕微鏡】(図IV-1上)

オープンおよびクロスニコルともに赤褐色を呈する微細な赤鉄鉱粒子の集合体から構成されている。また微細鉱物の薄膜が同心球状に積層したコロフォーム構造が顕著に発達している。他の粒子はほとんど認められない。

【XRD】(図IV-5上)

強い赤鉄鉱のピークと相対的に弱いゲーサイトのピークが認められた。

- ・試料No.2 (C27-1200、16.1g)

【偏光顕微鏡】(図IV-1下)

オープンおよびクロスニコルともに赤褐色を呈する微細な赤鉄鉱粒子の集合体から構成されている。但しゲーサイトの集合体と思われる茶褐色のパッチ状の領域が点在している。これらのパッチは試料の空隙部に接することなく、赤鉄鉱に取り囲まれている。

【XRD】(図IV-5下)

XRDによる鑑定では赤鉄鉱とゲーサイトのピークが認められた。

- ・試料No.3 (C38-771、16.9g)

1 旧白滝3遺跡から出土した赤色礫（6点）の鑑定報告

【偏光顕微鏡】（図Ⅳ-2上）

多孔質ガラス質デイサイトである。斑晶鉱物は長石を主体とし、少量の輝石と石英を伴う。基質部は火山ガラス質と思われるが、微細な不透明鉱物が濃集している。気泡の壁面には所々粘土鉱物が成長している。また少量の安山岩質包有物を含むことがある。

【XRD】（図Ⅳ-6上）

長石とクリストバライトの強いピークが認められる。加えて $2\theta = 20\sim 30^\circ$ の背景値が高く非晶質物質（火山ガラスなど）の存在を示唆する。この他、ゲーサイトと粘土鉱物の弱いピークが認められた。

・ 試料No.4 (C38-427, 46.3g)

【偏光顕微鏡】（図Ⅳ-2下、図Ⅳ-3上）

オープンおよびクロスニコルともに赤褐色の微細な赤鉄鉱粒子の集合体からなる。但しこれらの間隙を埋めるように多数の他形石英結晶が認められた。

【XRD】（図Ⅳ-6下）

XRDによる鑑定では石英と赤鉄鉱のピークが認められた。

・ 試料No.5 (C38-763, 9.1g)

【偏光顕微鏡】（図Ⅳ-3下、図Ⅳ-4上）

オープンおよびクロスニコルともに赤褐色の微細な赤鉄鉱粒子の集合体からなる。試料No.4と同様に、間隙を埋めるように他形を呈する石英結晶が成長している。また赤鉄鉱の集合体を貫く石英脈が認められる。

【XRD】（図Ⅳ-7上）

XRDによる鑑定では石英と赤鉄鉱のピークが認められた。

・ 試料No.6 (C38-765, 26.1g)

【偏光顕微鏡】（図Ⅳ-4下）

オープンおよびクロスニコルともに赤褐色の微細な赤鉄鉱粒子の集合体からなる。試料No.4と同様に、他形を呈する石英結晶が成長している。また試料No.5と同様に赤鉄鉱の集合体を貫く石英脈が認められる。

【XRD】（図Ⅳ-7下）

XRDによる鑑定では石英と赤鉄鉱のピークが認められた。

（4）考察

鑑定した試料は3つのタイプに分類される。各タイプの特徴を示し、それぞれのタイプの成因について若干の考察を行う。

【Aタイプ】 試料No.1・試料No.2

鏡下観察によると、両試料はほとんどが微細な赤鉄鉱粒子から構成され、かつ「コロフォーム構造」の発達が目立つ（図Ⅳ-1上）。これに加えてパッチ状に孤立したゲーサイトの集合体が残存することがある（図Ⅳ-1下）。XRD分析でも、赤鉄鉱とゲーサイトのピークが認められる。この産状から試料全体の鉄含有量が高いと思われる。

一般にFeを多く溶解している酸性水や温泉水の湧出口ではゲーサイトが沈殿し、ゲーサイトを主体とする褐鉄鉱床を形成することがある。これらの沈殿堆積物中には、しばしばゲーサイトのコロフォーム構造が観察される。このような内部構造をもった褐鉄鉱が加熱されることで、試料のようなコロフォーム構造が残存する赤鉄鉱からなる岩石が生成される可能性がある（北海道埋蔵文化財センター 1999、推川 1961）。またパッチ状に残存したゲーサイトは、十分に熱が届かなかった部分であるかもしれない。

【Bタイプ】 試料No.3

赤褐灰白色多孔質の長石デイサイトである。なお石基部には火山ガラスおよびクリストバライトが認められる。なお試料No.3の切断面を観察すると、縁辺部から内部まで均質な赤褐灰白色を呈している。またXRDの結果、弱いながらゲーサイトのピークが認められる。火山ガラスが残存するような未変質・未風化な岩石においてゲーサイトの生成は考えにくいことから、褐鉄鉱鉱床中に堆積・埋没していた礫である可能性、また人為的にゲーサイトが付着した可能性なども考えられる。

【Cタイプ】 試料No.4・試料No.5・試料No.6

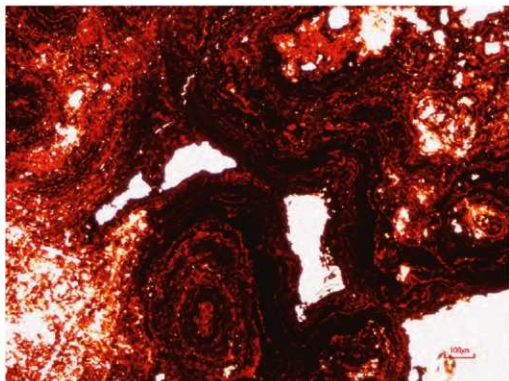
これらの試料は赤鉄鉱の集合体である。但し上述のAタイプとは異なり、間隙を充填するように他形の石英が成長していることが特徴である。また赤鉄鉱の集合体や他形石英を切るように石英脈が認められる。これらの石英の産状は赤鉄鉱の集合体が珪化作用を受けたことを示唆する。

試料が小さいため判断が難しいが、Cタイプの試料はほとんどが石英と赤鉄鉱から構成されること、また赤鉄鉱を切る石英脈が見られるなど、ある程度の続成作用もしくは変質作用を受けている可能性が高いことなどから、「含マンガン赤鉄鉱床」を起源とする岩石ではないかと推定される。「含マンガン赤鉄鉱床」は、旧国力鉱山・旧仁倉鉱山など、北見・佐呂間地区に分布が知られている（番場ほか 1962など）。

引用文献

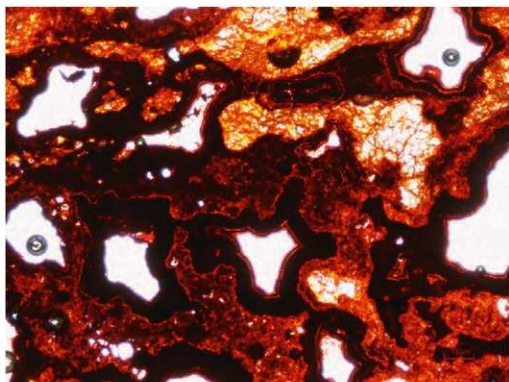
- 番場 猛夫・松村 明・成田 英吉・清水 道也・村瀬 正・市川 賢一（1962）北見国サロマ湖周辺および常呂川流域の含マンガン赤鉄鉱床調査報告。北海道地下資源調査資料（北海道開発庁），no. 72，1-27。
- （財）北海道埋蔵文化財センター（1999）千歳市柏台1遺跡：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書。（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書，138，311p。
- 推川 誠（1961）本邦の沈澱性褐鉄鉱々床の研究とくに成因と微量成分について。鉱山地質，11，65-84。

1 旧白滝3遺跡から出土した赤色礫（6点）の鑑定報告



試料No.1（オープンニコル）

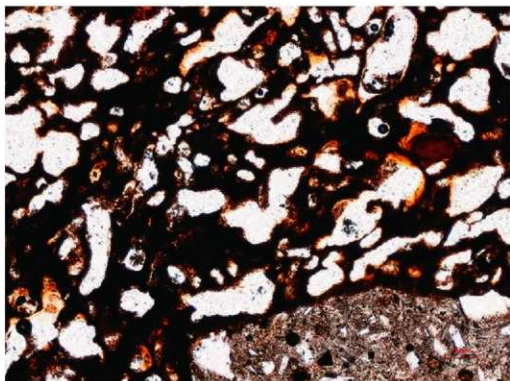
赤褐色部が赤鉄鉱。顕著なコロフォーム構造が観察される。写真の横幅：約1.7mm。



試料No.2（オープンニコル）

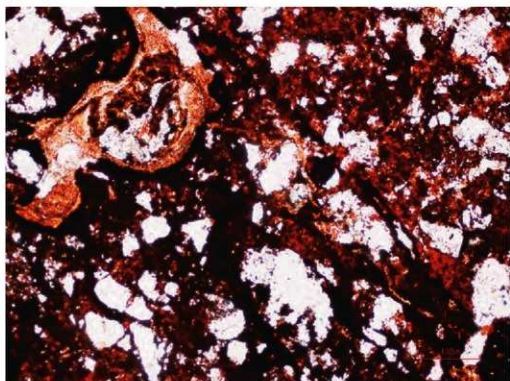
赤褐色部は赤鉄鉱。黄色部はゲーサイトと思われる。赤鉄鉱部にはコロフォーム様の構造が観察される。ゲーサイトは赤鉄鉱に囲まれたパッチ状の産状を呈する。写真の横幅：約1.7mm。

図Ⅳ-1 赤色礫の偏光顕微鏡写真(1)



試料No.3 (オープンニコル)

濃色部は微細な粒子(鉱物名は不明)で充填された火山ガラス。白色部は気泡。右下には安山岩質包有物がみられる。
写真の横幅：約1.7mm。

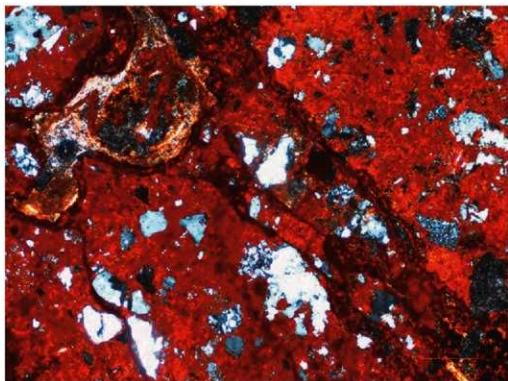


試料No.4 (オープンニコル)

赤褐色を呈する赤鉄鉱部の間隙を充填するように石英(白色部)が成長している。写真の横幅：約0.85mm。

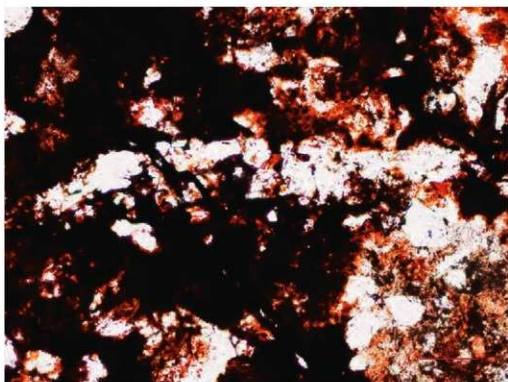
図IV-2 赤色燧の偏光顕微鏡写真(2)

1 旧白滝3遺跡から出土した赤色礫（6点）の鑑定報告



試料No.4 (クロスニコル)

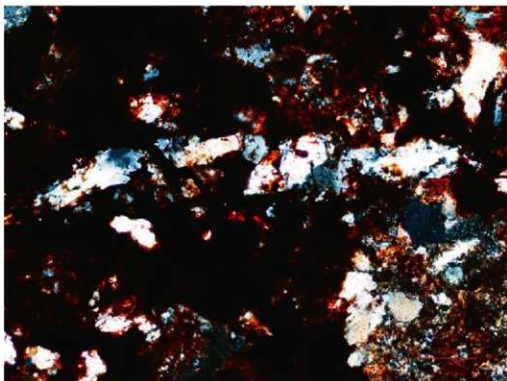
図IV-2と同視野。写真の横幅：約0.85mm。



試料No.5 (オープンニコル)

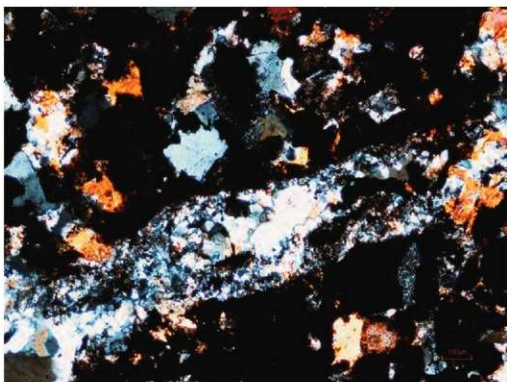
黒色～褐色部は微細な赤鉄鉱の集合体。写真中央部を横方向に伸びる石英脈。写真の横幅：約0.85mm。

図IV-3 赤色礫の偏光顕微鏡写真(3)



試料No.5 (クロスニコル)

写真中央部を横方向に伸びる石英脈。黒色部は微細な赤鉄鉱の集合体。写真の横幅：約0.85mm。

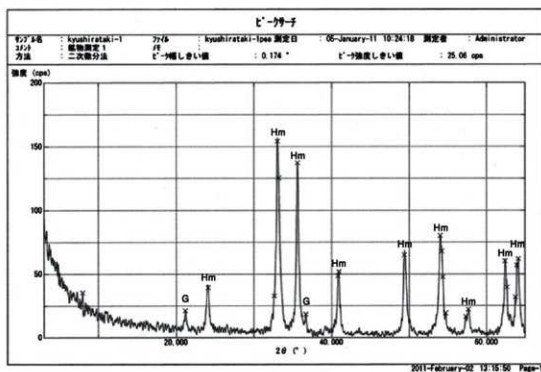


試料No.6 (クロスニコル)

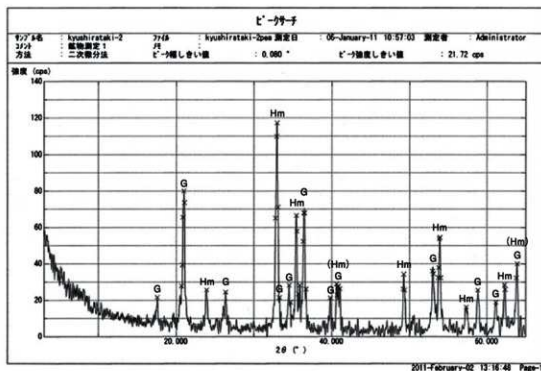
写真中央部を横方向に伸びる石英脈。明色部(灰色～黄色)は石英。黒色部は微細な赤鉄鉱の集合体と思われる。
写真の横幅：約1.7mm。

図IV-4 赤色燐の偏光顕微鏡写真(4)

1 旧白滝3遺跡から出土した赤色礫（6点）の鑑定報告

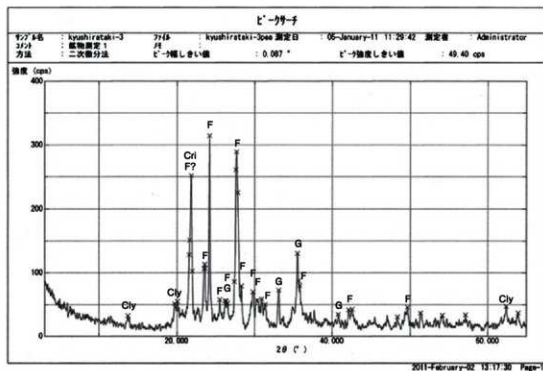


試料No.1のXRD結果。Hm：赤鉄鉱（Hematite）、G：ゲーサイト（Goethite）。

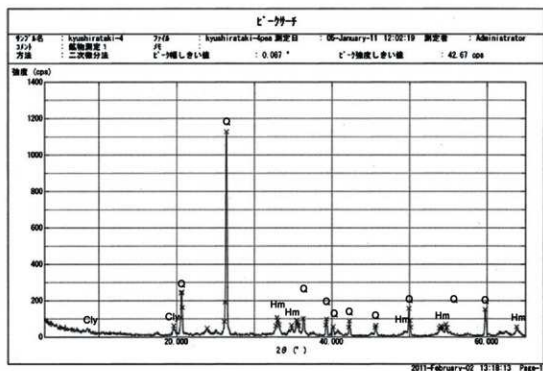


試料No.2のXRD結果。Hm：赤鉄鉱（Hematite）、G：ゲーサイト（Goethite）。

図N-5 赤色礫のXRD分析結果(1)



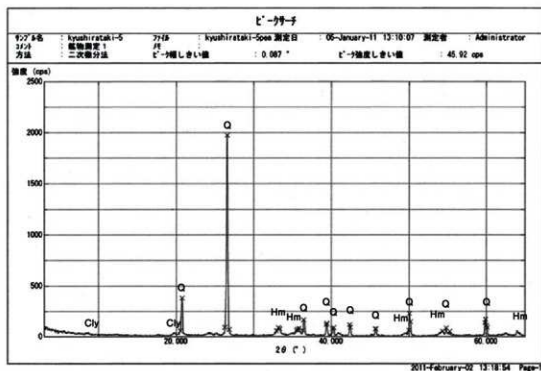
試料No.3のXRD結果。F：長石 (Feldspar)、G：ゲーサイト (Goethite)、Cly：粘土鉱物、Cri：クリストバライト。



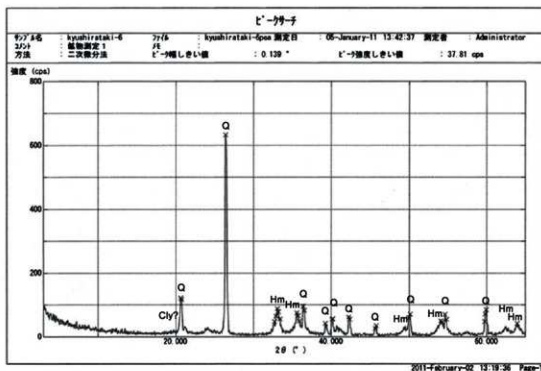
試料No.4のXRD結果。Q：石英、Hm：赤鉄鉱 (Hematite)、Cly：粘土鉱物。

図IV-6 赤色礫のXRD分析結果(2)

1 旧白濁3遺跡から出土した赤色礫（6点）の鑑定報告



試料No.5のXRD結果。Q：石英、Hm：赤鉄鉱（Hematite）、Cly：粘土鉱物。



試料No.6のXRD結果。Q：石英、Hm：赤鉄鉱（Hematite）、Cly：粘土鉱物。

図IV-7 赤色礫のXRD分析結果（3）

2 赤色礫のEPMA分析

今回の調査で出土した赤色礫6点について、成分元素および構成比率を把握するため、当センター所有の蛍光X線分析装置を用いて以下の方法で分析を行った。分析試料は前節で記載した赤色礫と同様で、試料番号も共通に付している。

(試料)

分析試料は図IV-8に示した。内容は下記の通りである。

試料番号	調査区	遺物番号	層位	重量(g)	区域	Sb	掲載番号
1	B38	2	II層	18.0	CH35-39	51	100
2	C27	1200	II層	16.1	BC27-29	27	144
3	C38	771	II層	16.9	CH35-39	51	99
4	C38	427	II層	46.3	CH35-39	51	102
5	C38	763	II層	9.1	CH35-39	51	101
6	C38	765	II層	26.1	CH35-39	51	103

(処理)

遺物は地点計測して取り上げた後、現地で水洗・乾燥させ、ポリ袋に入れて持ち帰った。分析の前処理として、第1調査部第1調査課花岡正光指導のもと、試料を前日から湿度を一定化させた防湿庫に保管して安定させた。

(分析方法)

分析方法は、日本電子製蛍光X線分析装置JSX-3220を使用し、バルクFP法により定量測定を行った。測定条件はいずれも管電圧：30kV、管電流：自動、測定時間：600秒（ライブタイム）とし、測定部位はできるだけ平坦な部位の約1mm四方の範囲で行った。機器の操作は花岡が行った。

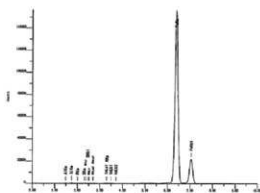
(測定結果)

測定結果は図IV-9の通りである。主成分は大きく3つのパターンに分かれる。酸化鉄 (Fe_2O_3) が8割以上を占める試料番号1・2、酸化ケイ素 (SiO_2) が5割近くを占め、残りが酸化鉄と酸化アルミニウム (Al_2O_3) となる試料番号3・4、酸化ケイ素が7割以上を占める試料番号5・6である。



図IV-8 分析試料

2 赤色礫のEPMA分析



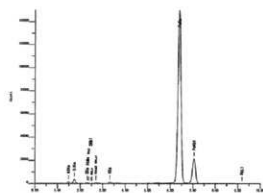
測定条件: 電圧: 20.0kV 電流: 0.020mA 5kV/10µm 600.00mm x1.0k Vac

測定時間: 1.00min

検出器: 日立 Sx-Fu, Si, Fe, Na, Sr

峰名	化学式	wt%	wt%±1σ	検出率	検出率±1σ
1	Al ₂ O ₃	1.22	0.03	0.0001	0.0001
2	SiO ₂	64.99	0.26	0.0003	0.0003
3	K ₂ O	0.31	0.01	0.0001	0.0001
4	CaO	0.15	0.00	0.0001	0.0001
5	TiO ₂	0.08	0.00	0.0001	0.0001
6	FeO	0.08	0.00	0.0001	0.0001
7	MnO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
8	MgO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
9	Na ₂ O	0.05	0.00	0.0001	0.0001
10	SiO ₂	0.05	0.00	0.0001	0.0001

試料番号 No. 1



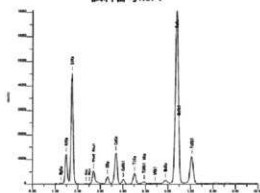
測定条件: 電圧: 20.0kV 電流: 0.020mA 5kV/10µm 600.00mm x1.0k Vac

測定時間: 1.00min

検出器: 日立 Sx-Fu, Si, Fe, Na, Sr

峰名	化学式	wt%	wt%±1σ	検出率	検出率±1σ
1	Al ₂ O ₃	1.22	0.03	0.0001	0.0001
2	SiO ₂	64.99	0.26	0.0003	0.0003
3	K ₂ O	0.31	0.01	0.0001	0.0001
4	CaO	0.15	0.00	0.0001	0.0001
5	TiO ₂	0.08	0.00	0.0001	0.0001
6	FeO	0.08	0.00	0.0001	0.0001
7	MnO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
8	MgO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
9	Na ₂ O	0.05	0.00	0.0001	0.0001
10	SiO ₂	0.05	0.00	0.0001	0.0001

試料番号 No. 2



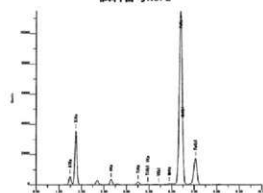
測定条件: 電圧: 20.0kV 電流: 0.020mA 5kV/10µm 600.00mm x1.0k Vac

測定時間: 1.00min

検出器: 日立 Sx-Fu, Si, Fe, Na, Sr

峰名	化学式	wt%	wt%±1σ	検出率	検出率±1σ
1	Al ₂ O ₃	1.22	0.03	0.0001	0.0001
2	SiO ₂	64.99	0.26	0.0003	0.0003
3	K ₂ O	0.31	0.01	0.0001	0.0001
4	CaO	0.15	0.00	0.0001	0.0001
5	TiO ₂	0.08	0.00	0.0001	0.0001
6	FeO	0.08	0.00	0.0001	0.0001
7	MnO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
8	MgO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
9	Na ₂ O	0.05	0.00	0.0001	0.0001
10	SiO ₂	0.05	0.00	0.0001	0.0001

試料番号 No. 3



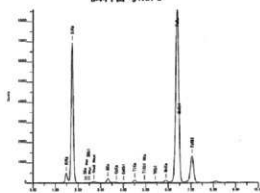
測定条件: 電圧: 20.0kV 電流: 0.020mA 5kV/10µm 600.00mm x1.0k Vac

測定時間: 1.00min

検出器: 日立 Sx-Fu, Si, Fe, Na, Sr

峰名	化学式	wt%	wt%±1σ	検出率	検出率±1σ
1	Al ₂ O ₃	1.22	0.03	0.0001	0.0001
2	SiO ₂	64.99	0.26	0.0003	0.0003
3	K ₂ O	0.31	0.01	0.0001	0.0001
4	CaO	0.15	0.00	0.0001	0.0001
5	TiO ₂	0.08	0.00	0.0001	0.0001
6	FeO	0.08	0.00	0.0001	0.0001
7	MnO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
8	MgO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
9	Na ₂ O	0.05	0.00	0.0001	0.0001
10	SiO ₂	0.05	0.00	0.0001	0.0001

試料番号 No. 4



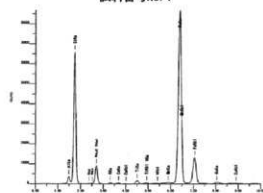
測定条件: 電圧: 20.0kV 電流: 0.020mA 5kV/10µm 600.00mm x1.0k Vac

測定時間: 1.00min

検出器: 日立 Sx-Fu, Si, Fe, Na, Sr

峰名	化学式	wt%	wt%±1σ	検出率	検出率±1σ
1	Al ₂ O ₃	1.22	0.03	0.0001	0.0001
2	SiO ₂	64.99	0.26	0.0003	0.0003
3	K ₂ O	0.31	0.01	0.0001	0.0001
4	CaO	0.15	0.00	0.0001	0.0001
5	TiO ₂	0.08	0.00	0.0001	0.0001
6	FeO	0.08	0.00	0.0001	0.0001
7	MnO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
8	MgO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
9	Na ₂ O	0.05	0.00	0.0001	0.0001
10	SiO ₂	0.05	0.00	0.0001	0.0001

試料番号 No. 5



測定条件: 電圧: 20.0kV 電流: 0.020mA 5kV/10µm 600.00mm x1.0k Vac

測定時間: 1.00min

検出器: 日立 Sx-Fu, Si, Fe, Na, Sr

峰名	化学式	wt%	wt%±1σ	検出率	検出率±1σ
1	Al ₂ O ₃	1.22	0.03	0.0001	0.0001
2	SiO ₂	64.99	0.26	0.0003	0.0003
3	K ₂ O	0.31	0.01	0.0001	0.0001
4	CaO	0.15	0.00	0.0001	0.0001
5	TiO ₂	0.08	0.00	0.0001	0.0001
6	FeO	0.08	0.00	0.0001	0.0001
7	MnO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
8	MgO	0.05	0.00	0.0001	0.0001
9	Na ₂ O	0.05	0.00	0.0001	0.0001
10	SiO ₂	0.05	0.00	0.0001	0.0001

試料番号 No. 6

図Ⅳ-9 赤色礫のEPMA分析結果

3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原材産地分析

遺物材料研究所 藪科哲男

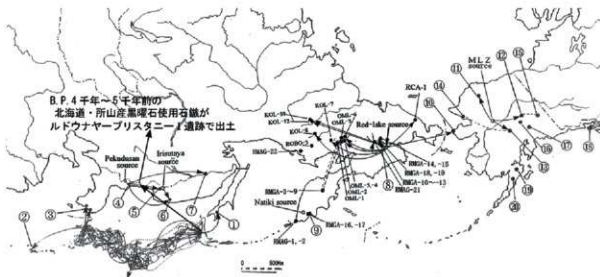
(1) はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサマサイトおよび黒曜石製遺物の石材産地推定を行っている^{1,2,3)}。黒曜石の伝播に関する研究では、千数百キロメートルの伝播距離は一般的で(図IV-10)、文系考古学(様式学)では更に広い範囲の様式伝搬が推測されてきた。様式伝搬に石材が伴ったかは、理系考古学(自然科学)の結果を取り入れ、真の考古学研究で先史を明らかにする必要がある。6千キロメートルを推測する学者もでてきている。

このような研究結果が出てきている現在、正確に産地を判定すると言うことは、原理原則に従って同定を行うことである。原理原則は、同じ元素組成の黒曜石が異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にいる石器の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。ノーベル賞を受賞された益川敏英博士の言を借りれば、科学とは、仮説をたて正しいか否かあらゆる可能性を否定することにある。即ち十分条件の証明が非常に重要であると言ひ換えられると思われる。遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されているとはじめて言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。

(2) 産地分析の方法

先ず原石採取であるが、本来、先史・古代人が各産地の何処の地点で原石を採取したか?不明であるために、一か所の産地から産出する全ての原石を採取し分析する必要があるが不可能である。そこ



図IV-10 日本・朝鮮半島・極東ロシア・アラスカ州における表IV-1～5使用の石器原材伝播図

で、産地から抽出した数十個の原石でも、産地全ての原石を分析して比較した結果と同じ結果が推測される方法として、理論的に証明されている方法で、マハラノビスの距離を求めて行う、ホテリングのT2乗検定がある。ホテリングのT2乗検定法の同定とクラスター判定法（同定ではなく分類）、元素散布図法（散布図範囲に入るか否かで判定）を以下に比較する。

クラスター判定法は判定基準が曖昧である。クラスターを作る産地の組み合わせを変えることにより、クラスターが変動する。例えば、A原石製の遺物とA、B、C産地の原石でクラスターを作ったとき遺物はA原石とクラスターを作るが、A原石を抜いて、D、E産地の原石を加えてクラスターを作ると、遺物がE産地とクラスターを作ると、A産地が調査されていないと、遺物はE原石製遺物と判定される可能性があり結果の信頼性に疑問が生じる。A原石製遺物と分かっていたら、E原石とクラスターを作らないように作為的にクラスターを操作できる。

元素散布図法は内観で原石群元素散布の中に遺物の結果が入るか図示した方法で、原石の含有元素の違いを絶対定量値を求めて地球科学的に議論するには、地質学では最も適した方法であるが、産地分析からみると、クラスター法より、さらに後退した方法で、何個の原石を分析すればその産地を正確に表現されているのか不明で、分析する原石の数で、原石数の少ないときには、A産地とB産地が区別できていたのに、原石数を増やすと、A産地、B産地の区別ができなくなる可能性があり（クラスター法でも同じ危険性がある）判定結果に疑問が残る。産地分析としては、地質学の常識的な知識（高校生）さえあればよく、火山学、堆積学など専門知識は必要なく、分析では非破壊で遺物の形態の違いによる相対定量値の影響を評価しながら、同定を行うことが必要で、地球科学的なことは関係なく、如何に原理原則に従って正確な判定を行うかである。

クラスター法、元素散布図法の欠点を解決するために考え出された方法が、理論的に証明された判定法でホテリングのT2乗検定法である。仮に調査した331個の原石・遺物群について散布図を書くと、各群40個の元素分析結果を元素散布図にプロットすると、331群×40個=13,240点の元素散布図になり、これが8元素比では28個の2元素比の散布図となり、この図の中に遺物の分析点をプロットして産地を推測することは、想像できても実用的でない。もし、散布図で判定するなら、あらかじめ遺物の原石産地を決めて、予想した産地のみで散布図を書き産地を決定する。これでは、一致する産地のみを探すのみで、科学的分析のあらゆる可能性を否定することが科学分析であると言うことに反し、科学的産地分析と言えない。ある産地の原石組成と遺物組成が一致すれば、その産地の原石と決定できるという理論がないために、多数の産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調査素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な意味をもつ結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原産地産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。

黒曜石、安山岩などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行い、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合（マハラノビスの距離）を求める。次に、古代人が採取した原産地出

点と現代人が分析のために採取した原石産地と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT2乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある遺物原材がA産地に10%の確率で必要条件が満たされたとき、この意味はA産地で10個原石を採取すると1が遺物と同じ成分だと言うことで、現実により得ることであり、遺物はA産地原石と判定する。しかし、他の産地について、B産地では0.01%で一万個中到一个の組成の原石に相当し、遺跡人が1万個遺跡に持ち込んだとは考えにくい。従って、B産地ではないと言う十分条件を満足する。またC産地では百万個中到一个、D産地では……一個と産地ごとに十分条件を満足させ、客観的な検定結果から必要条件と十分条件を満たしたA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回、北海道遠軽町に位置する旧白滝3遺跡から出土した黒曜石製石器について産地分析の結果が得られたので報告する。

(3) 黒曜石原石の分析

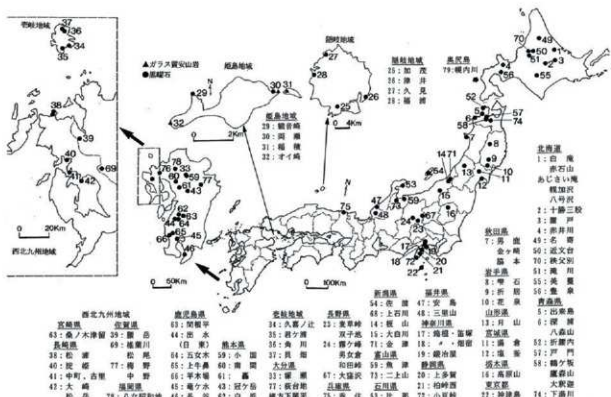
黒曜石原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行う。分析元素はAl, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr, Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比の値を産地を区別する指標としてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布している。

調査を終えている原産地の一部を図IV-11に示す。元素組成によってこれら原石を分類し、表IV-1-3に示す。この原石群に原石産地が不明の遺物で作った遺物群(表IV-4・5)を加えると331個の原石群・遺物群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿野北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿野東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転礫として黒曜石が採取できる。赤石山の大産地の黒曜石は色に関係無く赤石山群(旧白滝第1群)にまとまる。また、あじさい滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい滝群を作った(旧白滝第2群)、また、八号沢の黒曜石原石と白土沢、十勝石川沢の転礫は梨黒の黒曜石で元素組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。幌加沢からの転礫の中で70%は幌加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。

置戸地域産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取された原石であり、その元素組成は置戸・所山群にまとまり、また同町の秋田林道で採取される原石は置戸山群にまとまる。また、同町中里地区の露頭の小原石(最大約3cm)は、置戸山群、常呂川の転礫で作った常呂川第5群に一致し、同町安住地区の小原石の中には常呂川第3群に一致する原石がみられた。

留辺蘂町のケショマップ川一帯で採取される原石はケショマップ第1、第2およびチマキナウシ林道から採取される黒曜石原石から新たにケショマップ第0群(旧ケショマップ第3群に似る)に分類された(「白滝遺跡群Ⅹ」までに設定されていたケショマップ第3群はケショマップ第2群に統合された)。

また、白滝地域、ケショマップ、置戸地域産原石は、湧別川および常呂川に通じる流域にあり、両



図IV-11 黒曜石原産地

河川の流域で黒曜石の円礫が採取され、湧別川下流域から採取した黒曜石円礫247個の元素組成分類結果を表IV-6に示した。また、中ノ島、北見大橋間の常呂川から採取した661個の円礫の中には、独特の元素組成の原石も見られ、新しい原石群を追加し分類結果を表IV-1と表IV-7に示した。また、湧別川の上流地域の遠軽町社名湖地域のサナブチ川流域からも独特の元素組成の原石が見られ、表IV-1と表IV-8に示した。表IV-9に示す金華地区から採取した20個の黒曜石円礫は社名湖群、赤石山群などの他に何処の産地にも一致しない黒曜石があり金華群を作った。生田原川支流ズ線川から採取した19個の黒曜石円礫では社名湖群、白濁地区産黒曜石および金華群などが見られた(表IV-10)。また同支流の大黒沢採取の5個は社名湖群の黒曜石であった(表IV-11)。

十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股露頭があり、また露頭前の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十勝三股を起点に周辺の河川から転礫として採取され十三ノ沢、タウシユベツ川、音更川、芽登川、美里別川、サンケオルベ川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の元素組成は、十勝三股産の原石の元素組成と相互に近似している。これら元素組成の近似した原石の原産地は相互に区別できず、もし遺物石材の産地分析でこの遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股を起点にした周辺の河川の複数の採取地点を考えたければならない。しかし、この複数の産地をまとめて十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題は無いと考えられる。

釧路・上阿寒地域の礫層から最大3.5cmの大きさの円礫状黒曜石原石が産出し、成分組成は十勝三股産と一致した。

また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2つの美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。

3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析

名寄地域では、朝日川、金沢川、上名寄地区、忠烈布地区、智恵文川、智南地区から円礫状の黒曜石が採取できる。これら名寄地域産出の黒曜石を元素組成で分類すると、名寄第1群と名寄第2群に分類できそれぞれ87%と13%の率になる。

旭川市の近文台、台場、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第1群、69%が近文台第2群、11%が近文台第3群にそれぞれ分類され、それから台場の砂礫採取場からは近文台諸群に一致するもの以外に、黒、灰色系円礫も見られ、台場第1・2群を作った。

また、滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、元素組成で分類すると約79%が滝川群にまとまり、21%が近文台第2・3群に元素組成が一致する。滝川群に一致する元素組成の原石は、北竜市恵袋別川培本社からも採取される。

秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下ろす丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況と礫の状態は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第1群は滝川第1群に元素組成が一致し、第2群も滝川第2群に一致しさらに近文台第2群にも一致する。

赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここから採取される原石の中で小球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえないもので赤井川第1群を作り、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質なものなどで赤井川第2群を作った。これら第1・2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。

豊泉産原石は豊浦町から産出し、元素組成によって豊泉第1・2群の両群に区別され、豊泉第2群の原石は既品が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。

また、青森県教育庁の齊藤岳氏提供の奥尻島幌内川産黒曜石の原石群が確立されている。

最近の北見市教育委員会太田敏量氏による原石産地調査で、上足寄地域から上足寄群、津別・相生から相生群、釧路市埋蔵文化財センターの石川朗氏による釧路空港、上阿寒地域からピッチストーン様の黒曜石が調査され、相互に似た組成を示し、それぞれ相生群、釧路空港群を作った。

また、雄武地域・音稲府川から名寄第2群に組成の似た音稲府群、鶴居・久著呂川から久著呂川群を作り原石群に新たに登録した。

出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た元素組成の原石は、岩木山の西側を流れ鯉ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸と同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群を作り、また、八森山産出の原石で八森山群を作った。これら深浦町の両群と相互に似た群は、青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第2群である。戸門第1群、成田群、浪岡町泉民の森地区より産出の大釈迦群(旧浪岡群)は赤井川産原石の第1・2群と弁別は可能であるが原石の元素組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石礫が作れる大きさのものがみられるが、鷹森山群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石で中には5cm大のものもみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。産地分析は、日本、近隣国を含めた産地の合計331個の原石群・遺物群と比較し、必要条件と十分条件を求めて遺物の原石産地を同定する。

表IV-6 湧別川河口域の河床から採取した247個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
赤石山群	90	36%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	120	49%	割れ面が梨肌の黒曜石
あじさい滝群、梶加沢	31	13%	割れ面が梨肌でないもの
ケショマップ第2群	5	2%	
KS3遺物群	1	0.04%	

注：八号沢、白土沢、あじさい滝、梶加沢の一部は組成が類似し、分類は割れ面の梨肌が否かで区別した。

表IV-7 常呂川（中ノ島～北見大橋）から採取した661個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
所山群	321	49%	常呂川第4群に似る
置戸山群	75	11%	常呂川第2群、常呂川第5群、HS2遺物群に似る
ケショマップ第1群	65	10%	FR1,FR2遺物群に似る
ケショマップ第2群	96	9%	同時にケショマップ第0群に0.5～0.001%に同定、FR1,FR2遺物群に似る
八号沢群	1	0.2%	割れ面梨肌
常呂川第2群	14	2%	置戸山群、高原山群、HS2遺物群に似る
常呂川第3群	3	0.5%	
常呂川第4群	70	11%	KS1遺物群、所山群に似る
常呂川第5群	10	2%	置戸山群、HS2遺物群に似る
常呂川第6群	1	0.2%	FH1遺物群に似る
常呂川第7群	2	0.3%	FR2遺物群に似る
常呂川第8群	1	0.2%	名寄第2群に似る
十勝	1	0.2%	戸門第1群、鷹森山群、大沢淵群に似る
台地第2群	1	0.2%	美萼第1群に似る

注：常呂川第2群は分析場所を変えて複数回測定して作る。

表IV-8 サナブチ川から採取した80個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
社名洞群	69	86%	
赤石山群	5	6.3%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	3	3.8%	割れ面が梨肌の黒曜石
常呂川第5群	1	1.3%	
ケショマップ第2群	1	1.3%	
社名洞第2群	1	1.3%	

表IV-9 金華地区から採取した20個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
社名洞群	13	65%	サナブチ川の社名洞群に一致
金華群	3	15%	十勝三股に似るが一致せず
赤石山群	2	10%	白滝産地赤石山群に一致
置戸山群	1	5%	常呂川第2群、常呂川第5群、HS2遺物群に似る
常呂川第5群	1	5%	

表IV-10 生田原川支流支線川から採取した19個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
社名洞群	8	42%	サナブチ川の社名洞群に一致
赤石山群	6	32%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	2	10.5%	割れ面が梨肌の黒曜石
あじさい滝群、梶加沢	2	10.5%	割れ面が梨肌でないもの
金華群	1	5.3%	十勝三股に似るが一致せず

表IV-11 生田原川支流大黒沢川から採取した5個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備 考
社名洞群	5	100%	サナブチ川の社名洞群に一致

(4) 結果と考察

遺跡から出土した黒曜石製石器、石片は風化に対して安定的で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。縄文時代の黒曜石製遺物は表面から約3ミクロン程度の厚さで風化層ができています。分析はこの風化層を通して遺物の内部の新鮮面をいかに多く測定するかが重要である。蛍光X線分析法の中の電子線励起方式のEPMA分析は表面の分析面積1～数百ミクロン分析されているが、深さ約1ミクロンの風化層しか分析を行っていないために、得られた結果は原石で求めた新鮮面のマトリックスと全く異なった可能性の風化層のみの分析結果になるために、黒曜石遺物は破壊して新鮮面を出して分析する必要がある。X線励起(50KeV)でマトリックスをシリカとしてモデル計算を行うと、表面から、カリウム元素など軽元素で数ミクロンから10ミクロン、鉄元素で約300ミクロン、ジルコニウムで約800ミクロンの深さまで分析され、鉄元素より重い元素では風化層の影響は相当無視できると思われる。風化層以外に表面に固着した汚染物が超音波洗浄でも除去できないときはその影響を受ける。また、被熱黒曜石の風化層は厚く、表面ひび割れ層に汚染物が入り込んでいるときも分析値に大きく影響する。

風化層が厚い場合、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられ、Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行う。軽元素比を除いて場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

一方、安山岩製石器、石片は、黒曜石製遺物に比べて風化の進行が早く、非破壊で原産地が特定される確率は黒曜石製遺物に比べて相当低くなる。ササカイト製は風化の進行が早く完全非破壊分析での産地分析ができる確率は黒曜石に比べて相当低くなる。ササカイト製遺物の表面が白っぽく変色し部分は新鮮な部分と異なった元素組成になっていると考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行っている。

今回分析した旧白滝遺跡出土の黒曜石製遺物の分析はセイコーインスツルメンツ社のSEA2110Lシリーズ卓上型蛍光X線分析計で行い、分析結果を表IV-12～14に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えたと、表IV-12の試料番号113471番の遺物ではRb/Zrの値は1.104であり、十勝三股群に比較すると、十勝三股群の[平均値] ± [標準偏差値] は、1.097 ± 0.055である。遺物と原石群の差を十勝三股群の標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群の平均値から0.13 σ 離れている。ところで十勝三股群原産地から100個の原石を採ってきて分析すると、平均値から±0.13 σ のずれより大きいものが90個ある。すなわち、この遺物が十勝三股群の原石から作られていたと仮定しても、0.13 σ 以上離れる確率は90%であると言える。だから、十勝三股群の平均値から0.13 σ しか離れていないときには、この遺物が十勝三股群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。次にこの遺物を所山群に比較すると、所山群の[平均値] ± [標準偏差値] は、0.823 ± 0.023であるので上記と同様に所山群の標準偏差値(σ)を基準にして考えると、この遺物の所山群の平均値からの隔たりは12 σ である。これを確率の言葉で表現すると、所山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から12 σ 以上離れている確率は、千億分の一であると言える。このように、千億個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、

所山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は十勝三股産地に90%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから十勝三股産原石が使用されていると同定され、さらに所山群に十億分の一の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから所山群の原石でないと同定される」。

遺物が一つの産地（十勝三股産地）と一致したからと言って、例え十勝三股群と所山群の原石は成分が異なっても、分析している試料は原石でなく遺物であり、さらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから他の産地に一致しないとは言えない。また同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地（十勝三股産地）に一致し必要条件を満たしたと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表IV-1-5の331個全ての原石群・遺物群について行い十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして可能性を消していくことにより、はじめて十勝三股産地の石材のみが使用されていると判定される。

実際はRb/Zrといった唯一つの変量だけでなく、前述した8つの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えば、A原産地のA群でCa元素とRb元素との間に相関がありCaの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。従って、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT²乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する^{4, 5)}。

産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製のものについては331個の推定確率結果が得られている。

今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち十勝三股産原石と判定された遺物に対して、カムチャッカ産原石とカロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地だけの結果を表IV-15・16に記入した。ここで大切なことは、遺物材料研究所で行った結果で、十勝三股群と判定された遺物を使って、先史時代の交流を考察するときには、表IV-15・16に記入された十勝三股群以外の表IV-1-5の330個の原石産地と交流がなかったということを証明している点である。北海道の先史人は北海道と東北範囲のみでしか交流がなかったと仮定して、遺物と比較する産地を北海道、東北の主な産地だけで十分であると考えて遺物の原産地を求め、十勝三股産原石が使用されているとの結果は、先史時代の交易を一部の範囲に限定することになる（広い地域の範囲の黒曜石と比較していないから、広い範囲との交流は言えない、即ち日本の限定的地域にのみ有効で、東アジア、極東ロシア地域では通用しない結果である）。考古学者の主観的な石器の様式分類が北海道、東北地域に限定されていたとしても、分析された石器がもつ自然科学的結果が何処までの範囲に通用するかが、考古学の交易を考える上で非常に重要で、自分の主観的考察が満足されれば良いとの狭い見では真の考古学的研究とは言えない。他の広い交易範囲を考えている考古学者にも通用する産地分析結果が必要である。論外は、個人知識による肉眼観察を含め、十勝三股産原石が使用されているとの判定を、比較をしていないロシア産黒曜石、ロシア遺跡で使用されている遺物の、肉眼観察とか組成（遺物群）ではないと評

3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原材産地分析

表IV-12 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の元素比分析結果(1)

分析 番号	元 素 比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
105043	0.141	0.024	0.101	2.825	1.759	0.139	0.451	0.098	0.028	0.368
105044	0.171	0.061	0.083	2.593	1.377	0.300	0.360	0.038	0.028	0.371
105045	0.637	0.127	0.055	2.639	0.554	0.710	0.155	0.003	0.028	0.409
105046	0.530	0.106	0.054	2.611	0.646	0.682	0.175	0.022	0.032	0.404
105047	0.650	0.142	0.054	2.513	0.611	0.686	0.167	0.030	0.030	0.377
105048	0.663	0.142	0.055	2.509	0.620	0.726	0.185	0.046	0.029	0.367
105049	0.326	0.130	0.047	1.879	0.816	0.437	0.186	0.007	0.031	0.416
105050	0.324	0.127	0.046	1.818	0.817	0.455	0.171	0.035	0.030	0.407
105051	0.174	0.064	0.081	2.943	1.318	0.303	0.333	0.074	0.029	0.385
105052	0.172	0.059	0.077	2.617	1.308	0.274	0.358	0.063	0.028	0.365
105053	0.258	0.112	0.049	1.787	0.855	0.468	0.181	0.024	0.031	0.405
105054	0.325	0.126	0.047	1.761	0.818	0.446	0.172	0.076	0.031	0.418
105055	0.174	0.063	0.080	2.452	1.328	0.275	0.340	0.056	0.029	0.381
105056	0.138	0.023	0.098	2.877	1.811	0.076	0.468	0.135	0.026	0.354
105057	0.171	0.062	0.081	2.745	1.333	0.296	0.343	0.085	0.028	0.365
105058	0.172	0.065	0.082	2.809	1.322	0.273	0.344	0.097	0.028	0.369
105059	0.153	0.053	0.079	2.779	1.423	0.311	0.337	0.085	0.024	0.318
105060	0.170	0.061	0.082	2.825	1.333	0.290	0.340	0.057	0.028	0.377
105061	0.172	0.061	0.084	3.029	1.454	0.280	0.340	0.043	0.028	0.366
105062	0.139	0.024	0.107	3.017	1.809	0.091	0.467	0.080	0.028	0.368
105063	0.141	0.024	0.104	2.826	1.689	0.096	0.408	0.044	0.029	0.379
105064	0.170	0.060	0.080	2.861	1.391	0.294	0.358	0.046	0.029	0.382
105065	0.176	0.063	0.077	2.636	1.329	0.258	0.326	0.049	0.028	0.376
105066	0.170	0.059	0.081	2.883	1.406	0.294	0.342	0.080	0.027	0.361
105067	0.139	0.024	0.105	3.108	1.790	0.121	0.458	0.045	0.028	0.373
105068	0.138	0.023	0.097	2.848	1.763	0.064	0.478	0.064	0.027	0.359
105069	0.177	0.062	0.080	2.795	1.576	0.282	0.356	0.070	0.028	0.359
105070	0.323	0.127	0.049	1.790	0.828	0.436	0.176	0.043	0.030	0.406
105071	0.329	0.128	0.048	1.804	0.827	0.471	0.187	0.061	0.031	0.413
105072	0.173	0.062	0.081	2.724	1.320	0.269	0.337	0.090	0.028	0.361
105073	0.134	0.024	0.096	2.568	1.707	0.080	0.441	0.123	0.027	0.362
105074	0.136	0.021	0.103	2.658	1.800	0.066	0.474	0.062	0.027	0.359
105075	0.124	0.022	0.096	2.762	1.787	0.102	0.462	0.127	0.023	0.306
105076	0.138	0.013	0.113	3.006	1.971	0.201	0.484	0.081	0.014	0.203
105077	0.135	0.022	0.101	2.669	1.752	0.102	0.476	0.110	0.027	0.368
105078	0.137	0.025	0.096	2.571	1.711	0.105	0.485	0.056	0.028	0.369
105079	0.535	0.107	0.054	2.622	0.647	0.696	0.189	0.014	0.031	0.400
105080	0.673	0.143	0.057	2.588	0.586	0.679	0.166	0.009	0.031	0.398
105081	0.616	0.124	0.053	2.568	0.538	0.708	0.155	0.014	0.034	0.432
105082	0.556	0.104	0.051	2.485	0.620	0.639	0.174	0.016	0.028	0.375
113467	0.142	0.026	0.101	3.016	1.739	0.073	0.431	0.064	0.028	0.365
113468	0.669	0.140	0.057	2.622	0.586	0.711	0.170	0.021	0.029	0.369
113469	0.140	0.021	0.098	2.913	1.710	0.055	0.441	0.107	0.027	0.360
113470	0.143	0.028	0.102	2.858	1.730	0.106	0.449	0.094	0.027	0.359
113471	0.255	0.072	0.068	2.227	1.104	0.426	0.352	0.017	0.028	0.384
113472	0.679	0.147	0.057	2.642	0.614	0.720	0.167	0.032	0.029	0.370
113473	0.688	0.150	0.056	2.604	0.588	0.690	0.174	0.035	0.028	0.358
113474	0.178	0.061	0.079	2.758	1.338	0.301	0.327	0.069	0.027	0.357
113475	0.172	0.058	0.076	2.742	1.316	0.276	0.335	0.055	0.027	0.358
113476	0.178	0.064	0.076	2.689	1.286	0.246	0.302	0.086	0.027	0.359
113477	0.177	0.069	0.084	2.808	1.359	0.292	0.350	0.048	0.028	0.371
113478	0.324	0.132	0.049	1.893	0.828	0.451	0.186	0.074	0.029	0.396
113479	0.326	0.124	0.045	1.673	0.844	0.462	0.193	0.029	0.029	0.393
113480	0.140	0.028	0.096	2.750	1.791	0.157	0.467	0.084	0.027	0.353
113481	0.319	0.125	0.047	1.794	0.846	0.456	0.191	0.036	0.028	0.381

表IV-13 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の元素比分析結果(2)

分析 番号	元 素 比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
113482	0.141	0.024	0.099	2.760	1.704	1.136	0.452	0.073	0.027	0.359
113483	0.169	0.063	0.080	2.860	1.374	0.299	0.355	0.109	0.027	0.366
113484	0.172	0.065	0.080	2.816	1.317	0.315	0.349	0.084	0.027	0.365
113485	0.140	0.023	0.100	2.937	1.714	0.089	0.428	0.103	0.027	0.363
113486	0.138	0.024	0.096	2.517	1.695	0.060	0.459	0.132	0.026	0.351
113487	0.178	0.073	0.085	2.629	1.398	0.297	0.340	0.091	0.026	0.345
113488	0.317	0.128	0.046	1.755	0.823	0.419	0.178	0.033	0.028	0.380
113489	0.174	0.064	0.078	2.401	1.413	0.271	0.324	0.100	0.027	0.355
113490	0.177	0.062	0.082	2.794	1.332	0.286	0.338	0.053	0.027	0.365
113491	0.674	0.150	0.055	2.550	0.596	0.683	0.164	0.022	0.030	0.380
113492	0.143	0.026	0.106	3.133	1.818	0.085	0.453	0.049	0.027	0.358
113493	0.169	0.058	0.076	2.701	1.314	0.283	0.344	0.116	0.027	0.360
118598	0.174	0.061	0.080	2.846	1.353	0.267	0.347	0.077	0.026	0.349
118599	0.173	0.058	0.079	2.760	1.347	0.261	0.352	0.057	0.027	0.356
118600	0.175	0.063	0.079	2.740	1.336	0.294	0.340	0.063	0.027	0.353
118601	0.164	0.051	0.078	2.387	1.373	0.263	0.349	0.044	0.024	0.310
118602	0.173	0.059	0.078	2.513	1.325	0.288	0.336	0.045	0.028	0.365
118603	0.137	0.021	0.104	2.920	1.800	0.138	0.452	0.123	0.025	0.340
118604	0.174	0.062	0.077	2.622	1.265	0.278	0.323	0.095	0.027	0.356
118605	0.145	0.024	0.103	2.852	1.808	0.147	0.467	0.082	0.023	0.319
118606	0.161	0.060	0.081	2.653	1.436	0.254	0.370	0.075	0.023	0.305
118607	0.171	0.061	0.079	2.565	1.326	0.261	0.332	0.036	0.027	0.364
118608	0.170	0.060	0.081	2.594	1.343	0.265	0.337	0.095	0.027	0.356
118609	0.154	0.055	0.080	2.904	1.366	0.271	0.356	0.078	0.023	0.302
118610	0.156	0.053	0.078	2.845	1.396	0.282	0.364	0.039	0.023	0.298
118611	0.142	0.024	0.096	2.955	1.738	0.116	0.443	0.063	0.026	0.346
118612	0.170	0.058	0.080	2.885	1.361	0.284	0.338	0.076	0.026	0.344
118613	0.171	0.064	0.079	2.758	1.331	0.297	0.339	0.076	0.027	0.368
118614	0.137	0.025	0.100	3.028	1.883	0.086	0.510	0.116	0.026	0.351
118615	0.138	0.020	0.099	2.894	1.778	0.107	0.508	0.125	0.026	0.343
118616	0.170	0.063	0.081	2.770	1.389	0.306	0.354	0.102	0.025	0.330
118617	0.173	0.061	0.081	2.812	1.359	0.277	0.332	0.054	0.027	0.352
118618	0.139	0.022	0.106	2.976	1.845	0.152	0.471	0.102	0.026	0.344
118619	0.152	0.046	0.081	2.736	1.389	0.281	0.349	0.060	0.022	0.294
118620	0.174	0.062	0.072	2.528	1.216	0.224	0.313	0.065	0.027	0.357
118621	0.169	0.059	0.074	2.463	1.341	0.263	0.351	0.096	0.026	0.345
118622	0.155	0.054	0.084	2.834	1.415	0.302	0.354	0.080	0.022	0.290
118623	0.174	0.060	0.079	2.721	1.357	0.317	0.374	0.085	0.024	0.328
118624	0.175	0.061	0.075	2.407	1.307	0.252	0.333	0.063	0.027	0.353
118625	0.171	0.054	0.076	2.700	1.362	0.272	0.353	0.074	0.027	0.358
118626	0.177	0.060	0.076	2.655	1.293	0.273	0.338	0.063	0.027	0.360
118627	0.173	0.061	0.074	2.504	1.367	0.277	0.353	0.055	0.027	0.346
118628	0.138	0.025	0.101	2.949	1.851	0.089	0.505	0.080	0.026	0.348
118629	0.140	0.023	0.106	3.052	1.842	0.135	0.483	0.078	0.027	0.356
118630	0.137	0.022	0.096	2.629	1.715	0.074	0.443	0.055	0.026	0.356
118631	0.142	0.024	0.103	3.073	1.835	0.129	0.484	0.088	0.027	0.355
118632	0.145	0.026	0.094	2.733	1.624	0.099	0.418	0.048	0.023	0.324
118633	0.162	0.061	0.082	2.774	1.321	0.304	0.342	0.087	0.025	0.321
118634	0.172	0.063	0.081	2.794	1.350	0.280	0.345	0.071	0.028	0.377
118635	0.175	0.063	0.083	2.813	1.369	0.302	0.342	0.020	0.027	0.354
118636	0.173	0.061	0.081	2.694	1.362	0.280	0.355	0.059	0.027	0.366
118637	0.173	0.062	0.072	2.400	1.307	0.253	0.317	0.069	0.026	0.346
118638	0.173	0.057	0.081	2.518	1.391	0.284	0.365	0.087	0.028	0.363
118639	0.163	0.059	0.075	2.225	1.337	0.227	0.324	0.074	0.025	0.337
118640	0.140	0.022	0.083	2.321	1.481	0.101	0.428	0.096	0.026	0.350

3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析

表IV-14 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の元素比分析結果(3)

分析 番号	元 素 比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
118641	0.132	0.032	0.104	3.116	1.808	0.092	0.493	0.042	0.024	0.315
118642	0.176	0.063	0.071	2.343	1.138	0.229	0.308	0.056	0.027	0.352
118643	0.174	0.065	0.077	2.586	1.289	0.280	0.356	0.110	0.026	0.347
118644	0.172	0.062	0.079	2.789	1.359	0.301	0.359	0.089	0.026	0.343
118645	0.172	0.063	0.080	2.742	1.360	0.276	0.342	0.083	0.026	0.356
118646	0.142	0.026	0.103	3.020	1.787	0.152	0.480	0.072	0.027	0.358
118647	0.172	0.059	0.079	2.793	1.335	0.264	0.331	0.054	0.026	0.352
118648	0.170	0.062	0.078	2.740	1.351	0.281	0.354	0.091	0.026	0.349
118649	0.157	0.055	0.076	2.725	1.363	0.259	0.349	0.065	0.023	0.305
118650	0.170	0.058	0.078	2.752	1.323	0.288	0.362	0.053	0.026	0.352
118651	0.174	0.060	0.080	2.766	1.307	0.274	0.342	0.102	0.027	0.353
118652	0.152	0.051	0.076	2.479	1.330	0.268	0.331	0.067	0.021	0.282
118653	0.176	0.062	0.076	2.824	1.346	0.264	0.350	0.093	0.027	0.354
118654	0.174	0.062	0.078	2.717	1.346	0.259	0.335	0.076	0.023	0.317
118655	0.175	0.057	0.081	2.819	1.325	0.276	0.345	0.092	0.027	0.362
118656	0.587	0.137	0.064	2.793	0.629	0.742	0.172	0.018	0.031	0.369
118657	0.659	0.136	0.056	2.490	0.619	0.706	0.161	0.042	0.028	0.365
118658	0.132	0.021	0.098	2.629	1.712	0.060	0.444	0.143	0.025	0.329
118659	0.170	0.064	0.082	2.830	1.372	0.284	0.332	0.026	0.026	0.336
118660	0.169	0.063	0.082	2.833	1.375	0.276	0.333	0.074	0.027	0.349
118661	0.576	0.130	0.062	2.789	0.628	0.766	0.182	0.012	0.030	0.361
118662	0.135	0.024	0.101	3.035	1.869	0.087	0.479	0.122	0.025	0.338
118663	0.173	0.071	0.078	2.652	1.348	0.300	0.360	0.066	0.027	0.354
118664	0.140	0.025	0.103	3.088	1.788	0.098	0.438	0.065	0.027	0.356
118665	0.140	0.022	0.100	2.946	1.726	0.134	0.456	0.076	0.027	0.353
118666	0.139	0.020	0.102	2.817	1.836	0.087	0.469	0.123	0.023	0.320
118667	0.138	0.028	0.096	2.793	1.686	0.110	0.446	0.099	0.026	0.346
118668	0.129	0.028	0.099	2.962	1.835	0.087	0.491	0.097	0.024	0.316
118669	0.173	0.065	0.078	2.604	1.329	0.272	0.327	0.102	0.027	0.354
118670	0.174	0.066	0.077	2.645	1.322	0.271	0.344	0.053	0.027	0.352
118671	0.139	0.024	0.106	3.045	1.782	0.110	0.464	0.086	0.026	0.351
118672	0.142	0.026	0.105	3.161	1.872	0.134	0.465	0.046	0.026	0.344
118673	0.135	0.021	0.094	2.452	1.719	0.084	0.443	0.061	0.026	0.349
118674	0.137	0.022	0.100	2.999	1.813	0.092	0.475	0.110	0.026	0.346
118675	0.142	0.027	0.108	3.261	1.860	0.100	0.465	0.034	0.027	0.360
118676	0.173	0.066	0.084	2.760	1.347	0.271	0.341	0.070	0.027	0.352
118677	0.140	0.028	0.099	2.927	1.752	0.103	0.444	0.077	0.027	0.350
118678	0.141	0.025	0.103	2.731	1.784	0.121	0.443	0.098	0.026	0.343
118679	0.176	0.065	0.079	2.672	1.293	0.286	0.336	0.058	0.022	0.302
118680	0.172	0.065	0.082	2.884	1.407	0.268	0.346	0.092	0.028	0.366
118681	0.175	0.065	0.078	2.747	1.314	0.302	0.353	0.057	0.026	0.342
JG-1	0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1標準試料-Ando,A.Kurasawa,H.Ohmori,T.&Takeda,E.1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

値することで、ないと評価するには実際に比較し確認するしかない。

また、産地分析の結果を評価するときに、比較する原石群は新鮮面であり、また遺物群は風化面を測定した群を表IV-1~5に示している。風化の程度の差はあるものの風化していない遺物はなく、遺物を分析して原石産地が同定されない場合は、1:風化の影響で分析値が変動し、新鮮面と分析値が大きく異なったとき。2:遺物の厚さが薄く、厚さの影響が分析値に現れたとき。3:未発見の原石産地の原石が使用されているときなど。風化の影響を受けている遺物は黒曜石の光沢なく表面が曇っていて、分析するとカリウムの分析値が大きく分析される。風化の影響が少ないときは軽元素

比を抜くことにより同定が行える。風化が激しく、軽元素以外の他の元素まで風化の影響が及ぶと、遺物の産地が同定できなくなったり、また、新鮮面分析と異なった原石産地に同定されることがあり注意が必要である。原石群を作った原石試料は直径3cm以上で5mm以上の厚さであるが、細石刃などの小さな遺物試料の分析では、遺物の厚さが1.5mm以下の薄い部分を含んで分析すると、厚さの影響を受けて、重い元素は小さく測定され、分析値には大きな誤差範囲が含まれるために、分析値に実験で求めた厚さ補正値を乗じて同定を行わなければならない。分析平均厚さが0.3mm以下になると補正が困難になり同定できない。細石刃は厚さが薄く、縄文時代の遺物より風化の進んだ遺物もあり、厚さ補正と軽元素を抜いて同定を行っている。

蛍光X線分析では、分析試料の風化による化学的変化（カリウムが大きく観測される）、表面が削られる物理的変化、不定形の試料では薄い部分を完全に避けて分析できないとき、分析面が遺物の極端な曲面しか分析できない場合など、分析値に影響が残り、また、装置による分析誤差も加わり、分析値は変動し判定結果は一定しない。特に元素比組成の似た原産地同士では区別が困難で、遺物の原産地が原石・遺物群の複数の原産地に同定されるとき、および信頼（記載）限界の0.1%（十勝三股（99%）のみ記載では、信州、霧ヶ峰産地（6%）かどうか不明で考古学者が安心して引用できないから、0.1%までの設定にしている）判定境界に位置する場合は、分析場所を変えて3～12回分析し最も多く回数同定された産地を判定の欄に記している。風化、厚さ、不定形など比較原石群分析とは異なる誤差が遺物の分析値に含まれるために、産地分析では、一致する産地（必要条件）の結果だけでは信頼性が小さく、他の産地には一致しない（十分条件）ことを満足しなければならない。また、判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低確率（5%以下）の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。

ホテリングのT2乗検定の定量的な同定結果から、石材の成分組成以外の各産地特有の原石の特徴を考慮して遺物の原産地の判定を行ったとき、鉱物組成などの特徴を肉眼観察で求めた場合、キラキラ光る鉱物が多い、少ない、また輝石か、雲母かなど個人的な知識、経験などの主観が加わり判定される。白滝地域産黒曜石の中で、赤石山産原石の割れ面はガラス光沢を持っているが、元素組成が相互に似たあじさい滝、八号沢、白土沢、靱加沢、十勝石川沢などの群の原石は、あじさい滝、靱加沢産はガラス光沢を示し、八号沢、白土沢、十勝石川沢産は梨肌を示すため、原産地の判定に梨肌か、梨肌でないかを指標に加えた。

また、赤井川および十勝産、上阿寒礫層産原石を使用した遺物の判定は複雑になる場合がある。これは青森市戸門、鷹森山地区、浪岡町大釈迦より産出する黒曜石で作られた戸門第1、鷹森山、大釈迦の各群の元素組成が赤井川第1、2群、十勝三股群、上阿寒礫層群に比較的似ているために、遺物独特の風化の影響、不定形による影響を受けた分析値は、分析値への受け方の程度により戸門原産地と赤井川または十勝・上阿寒礫層産地、これら複数の原産地に同時に同定される場合がしばしば見られる。十勝三股群、上阿寒礫層群、赤井川諸群、大釈迦群、戸門第1群、鷹森山群に同定された遺物を定量的に弁別する目的で、元素比の組み合わせを探し、新たに、K/Si、Fe/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Sr/Rb、Y/Rb、Ti/Fe、Si/Feの組み合わせによるホテリングのT2乗検定を行う。

また、従来の元素比の組み合わせで同定されなかった原石・遺物群は十分条件となる。従って、判定の必要条件と十分条件は新元素比と従来元素比の両ホテリングのT2乗検定結果の組み合わせで判定する。また、戸門産地の原石が使用されたか否かは、一遺跡で多数の遺物を分析し戸門第1群と第2群に同定される頻度を求め、これを戸門産地における第1群（50%）と第2群（50%）の産出頻度

3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析

表IV-17 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の新元素比による産地分析結果

分析番号	試料番号	調査区名	一括層位	遺物番号	器種	地区	母岩番号	接合番号	折れ接合番号	新元素比によるホテリング ² 検定	判定結果	表面状態
113471	SHIRA-X633	C20		13	削器	A				50665	非登川第1群(26%)、上阿寒礫層(7%)、十勝三股(6%)、芽登川第2群(4%)	十勝 38mm

十勝三股・上阿寒礫層産原石と青森黒曜石との区別-K/Si、Fe/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Sr/Rb、Y/Rb、Ti/Pa、Si/Peの新元素比による十勝三股・上阿寒礫層・鷹森山・大釈迦・戸門第1群のみでホテリングのT2検定を行う。この検定で分析された遺物は青森黒曜石と上阿寒礫層産原石に一致し必要条件を満たし、十分条件として青森黒曜石でないことを証明した。表1に掲載している青森黒曜石群を除く他の原石群に一致しないという十分条件は従来元素比によるホテリングのT2検定で証明されているため、両ホテリングのT2検定結果の組み合わせで総合的に判断し十勝産または上阿寒礫層産原石が使用されていると判定した。上阿寒礫層産は円礫で最大径約3.5cmである。遺物が3.5cm以上であれば十勝産とみなすため、十勝産黒曜石製石器と判定した。

表IV-18 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の産地別使用頻度

使用個数(使用頻度)						
赤石山	あじさい滝・梶加沢	所山	ケシヨマップ第2群	ケシヨマップ第1群	十勝	合計
77(51%)	48(31.8%)	10(6.6%)	10(6.6%)	5(3.3%)	1(0.7%)	151

と比較し戸門産地の原石である可能性を推定する。多数分析した遺物の中に全く戸門第2群に帰される遺物が見られないときは、戸門産地からの原石は使用されなかったと推測できる。また浪岡町大釈迦産原石は非常に小さい原石が多く使用された可能性は低いと思われる。

新たな元素比の組み合わせでも、十勝三股群と上阿寒礫層群は区別ができず、上阿寒礫層群の原石は最大3.5cm以下のローリング痕のない円礫で、遺物の大きさが3.5cm以上の場合十勝産と特定できる。また石器作成にロスする原石の長さを考えると、かなり小さな石器でも上阿寒礫層群の原石は使用できない可能性があるなど、元素分析以外の情報も取り入れて原石産地を絞り込んでいる。また、自然面を残す石器については、角礫は露頭地域から、円礫は河川・河川堆積層から原石が採取されたと推測した。

分析した旧白滝3遺跡出土十勝産原石使用石器の大きさは、加工前は3.5cm以上あったと推測され、石器原料は上阿寒礫層産地から採取されていないと推測した。使用されている十勝産黒曜石は赤井川産原石および青森市三内丸山遺跡で使用されている、戸門第1群、鷹森山、大釈迦産黒曜石と青森市産黒曜石原石とは新元素比による定量的判定で明確に区別された(表IV-17)。

また、遺跡で使用されている各産地の原石の使用頻度は、赤石山産が51%(77個)、あじさい滝・梶加沢産が31.8%(48個)、所山産が6.6%(10個)、ケシヨマップ第2群が6.6%(10個)、ケシヨマップ第1群が3.3%(5個)、十勝産が0.7%(1個)であった(表IV-18)。使用頻度の高い産地との交流が活発であったとすると、地元白滝地域の黒曜石は多用されていて、近隣の所山、ケシヨマップ原産地遺跡(ケシヨマップ第1、2群)の原石が使用され、これら原産地遺跡との交流が推測され、これら地域との生活、文化情報の交換があったと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

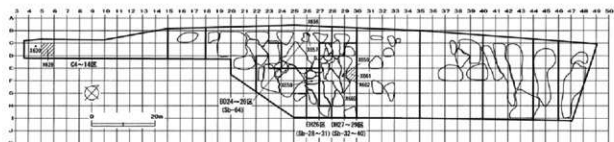
今回の分析では日本についてはほぼ全土、外国については、表IV-3・5で調査された原産地と外国の遺跡で使用されている黒曜石原料の範囲内に限定されるが、石器様式が日本に伝搬したと推測されている東アジア、極東ロシアからの伝搬が石器原料を伴っていないことも証明されたことと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。また、今回分析した結果は、沿海州地域の遺物群、原石と直接比較していることから、沿海州地域の考古学の参考資料として使用できる報告書になっている。

参考文献

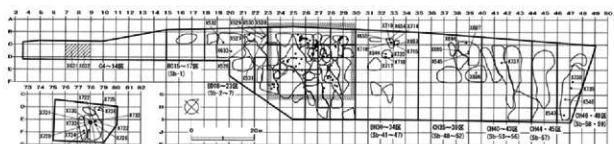
- 1) 薬科哲男・東村武信(1975)、蛍光X線分析法によるサスカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学、8:61-69

- 2) 薬科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサスカイト石器の原産地推定 (Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学, 10, 11:53-81:33-47
- 3) 薬科哲男・東村武信 (1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 東村武信 (1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90
- 5) 東村武信 (1990), 考古学と物理化学。学生社

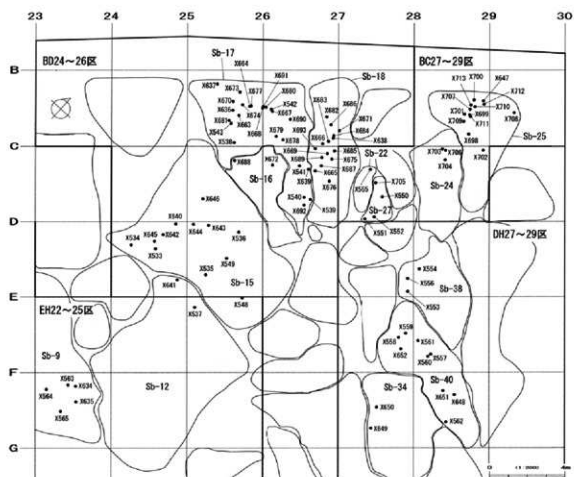
3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析



分析資料の出土位置(白滝I群)



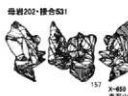
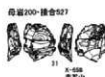
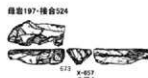
分析資料の出土位置(白滝I群以外)



分析資料の出土位置拡大図(白滝I群以外)

図IV-12 産地分析試料出土位置図

白滝1群

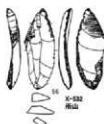


C4-14

水口方型形器



版部片



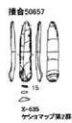
BD18-23

巖越・奥利河



EH22-25

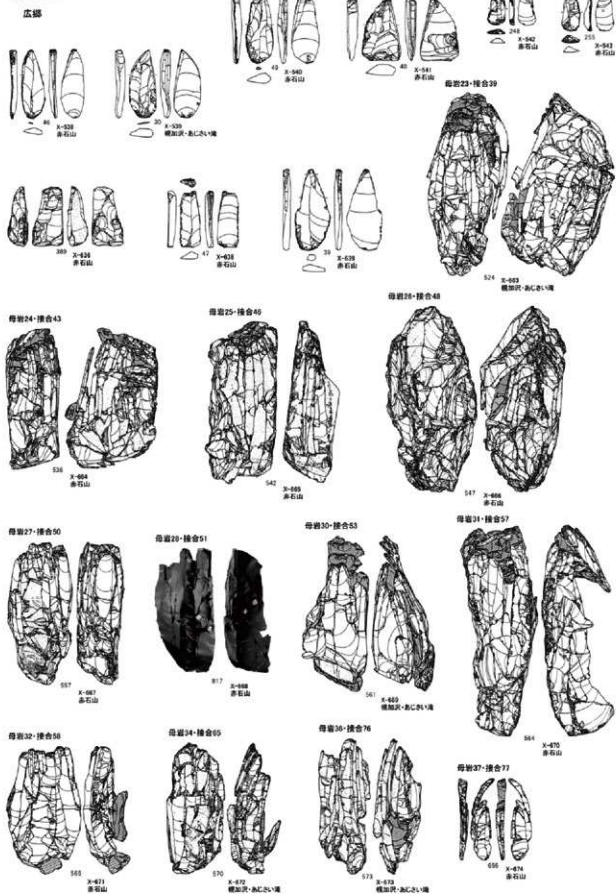
有舌尖頭器



図IV-13 産地分析試料(1)

3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析

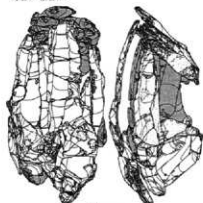
BD24-26



BD24-26

広部

母岩41・接合83

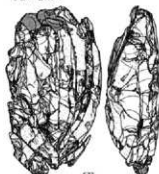


576

X-475

赤石山

母岩42・接合89



577

X-476

櫻川沢・北沢川・尾

母岩44・接合98

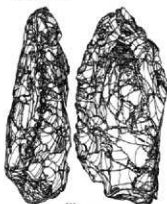


582

X-477

赤石山

母岩50・接合125

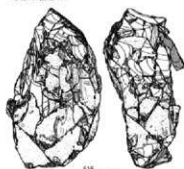


585

X-478

赤石山

母岩53・接合133

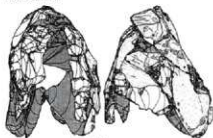


510

X-480

赤石山

母岩45・接合95



588

X-479

赤石山

母岩55・接合126

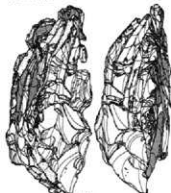


601

X-482

赤石山

母岩58・接合138



611

X-483

赤石山

母岩54・接合97



589

X-481

赤石山

母岩61・接合142

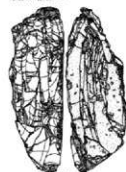


617

X-485

赤石山

母岩63・接合154



614

X-486

櫻川沢・北沢川・尾

図IV-15 産地分析試料(3)

3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原材産地分析

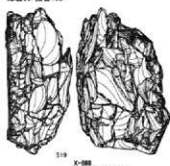
BD24-26

広楕

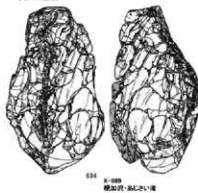
母岩64-種合157



母岩65-種合158



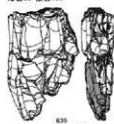
母岩66-種合159



母岩72-種合175



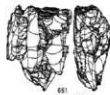
母岩80-種合199



母岩83-種合206



母岩84-種合209



腰板台

種合5067



小型舟楫

母岩52-種合129



有舌尖頭器



種合5065



種合5058



図Ⅳ-16 産地分析試料(4)

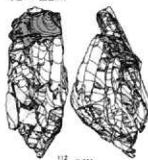
BC27-29

産部合・広部？

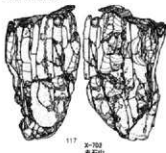
母岩107-種合254

103 X-538
縞状片・黒色片・塊106 X-483
縞状片・黒色片・塊

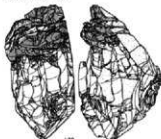
母岩110-種合259

112 X-506
赤石山

母岩112-種合261

117 X-752
赤石山

母岩113-種合262

120 X-360
赤石山

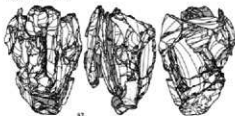
母岩114-種合264

125 X-364
縞状片・黒色片・塊

母岩119-種合270

128 X-706
赤石山

母岩117-種合272

97 X-307
赤石山

母岩118-種合275

133 X-700
赤石山

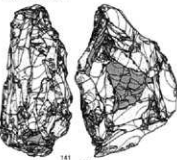
母岩119-種合277

137 X-369
赤石山

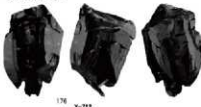
母岩120-種合278

95 X-198
赤石山

母岩122-種合281

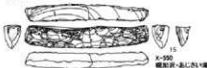
141 X-711
赤石山

母岩123-種合284

176 X-742
赤石山

産部合

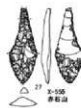
種合50694

11 X-592
縞状片・黒色片・塊

種合50693

12 X-581
縞状片・黒色片・塊

母岩115-種合266

11 X-582
赤石山13 X-647
縞状片・黒色片・塊17 X-535
赤石山

図IV-17 産地分析試料(5)

3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析

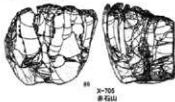
BC27-29

扇部台

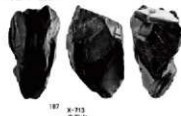
母岩111-標合290



母岩119-標合295



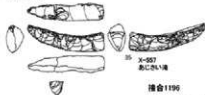
母岩125-標合297



DH27-29

扇部台

標合50700



標合1064



標合1196

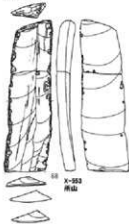


標合18



水口方型厚器

標合50670



標合50660



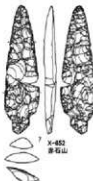
有背尖頭器



石器群不明



標合50625



図IV-18 産地分析試料(6)

BH30-34

産部合-広部マ

標合51742



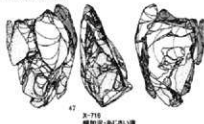
母岩221-標合1297



母岩220-標合1294



母岩224-標合1302



縮下



標合1307



標合51745



標合1309



CH35-39

広部



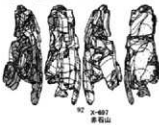
母岩232-標合1304



母岩233-標合1305



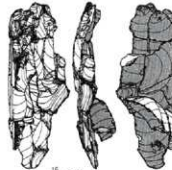
母岩242-標合1445-1446



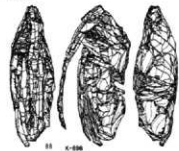
CH40-43

広部

母岩245-標合1407



母岩237

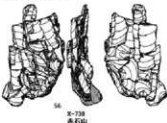


CH46-48

広部



母岩254-標合1403

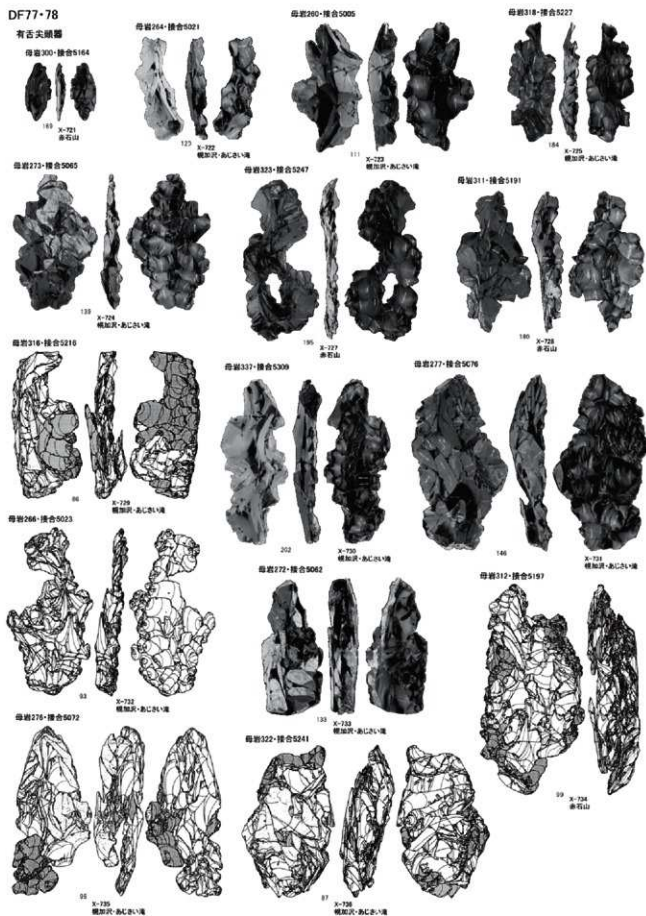


母岩255-標合1414



図IV-19 産地分析試料(7)

3 旧白滝3遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析



図IV-20 産地分析試料(8)

4 旧白滝3遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

旧白滝3遺跡は、北海道紋別郡遠軽町旧白滝325（北緯43° 54' 40"、東経143° 13' 08"）に所在する。測定対象試料は、II層で検出された炭化物層や焼土等から出土した木炭合計40点である（表IV-19）。

試料に近接して様々な石器群が出土しており、それらは重層的な出土状況で検出された場所もある。

（2）測定の意義

試料に近接して出土した石器群の年代を検討する。

（3）化学処理工程

- ① メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- ② 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001 Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時は「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表IV-19に記載する。
- ③ 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- ④ 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- ⑤ 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- ⑥ グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4）測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算出方法

- ① $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表IV-19）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- ② ¹⁴C年代（Libby Age: yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表IV-19に、補正していない値を参考値として表IV-20に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- ③ pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。

pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同程度以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表IV-19に、補正していない値を参考値として表IV-20に示した。

- ④ 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を使い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表IV-20に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

(6) 測定結果

測定結果を表IV-19・20に示す。試料40点は、II層で検出された炭化物層や焼土等から出土し、同じ遺構等から出土した複数の試料は近い年代値を示したものが多い。この内、SHIRA-157、158、164、165、175、176、179、180の8点は縄文時代、その他の32点は後期旧石器時代に当たる年代値を示した。後期旧石器時代の試料は、32点の内最も古いSHIRA-186の暦年較正年代 (1σ) が32725~32100cal BPの範囲、最も新しいSHIRA-183が18131~17939cal BPの範囲となっており、全体として後期旧石器時代前半期から後半期に含まれる幅広い年代の試料が認められる (工藤 2012)。それらの年代値を近接して出土した石器群ごとに見ると、年代値にまとまりが認められる場合がある。縄文時代の試料は、SHIRA-157が前期後半頃、SHIRA-158が後期前葉頃、SHIRA-164、165、175、176が草創期後葉頃、SHIRA-179、180が晩期中葉頃に相当する (小林編 2008)。

試料の炭素含有率は、SHIRA-161を除く39点が50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。SHIRA-161の炭素含有率は、通常の炭化物より若干低い42.6%であった。亀裂の中に褐鉄と見られるものが付着し、完全に除去できなかった。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
 工藤雄一郎 2012 旧石器・縄文時代の環境文化史 高精度放射性炭素年代と考古学, 新泉社
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

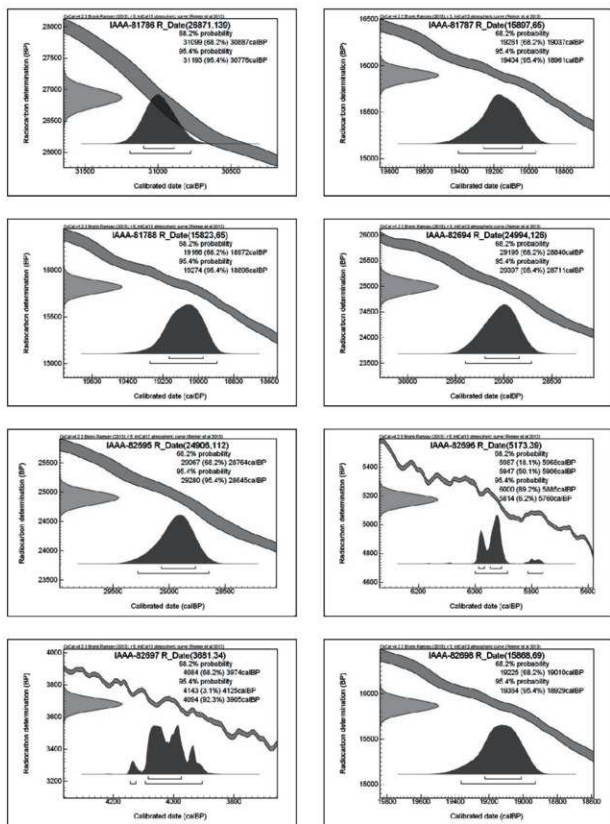
表IV-19 放射性炭素年代測定結果(δ13C補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ13C (‰) (AMS)	δ13C補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC (%)
IAAA-81786	SHIRA-152	Cb-17 Ⅱ層	木炭	AaA	-23.44±0.43	26,870±140	3.53±0.06
IAAA-81787	SHIRA-153	Cb-7 Ⅱ層	木炭	AAA	-22.87±0.32	15,900±70	13.82±0.11
IAAA-81788	SHIRA-154	F-3 Ⅱ層	木炭	AaA	-24.36±0.34	15,820±70	13.95±0.11
IAAA-82694	SHIRA-155	Cb-12 Ⅱ層	木炭	AaA	-23.13±0.74	24,990±130	4.45±0.07
IAAA-82695	SHIRA-156	Cb-12 Ⅱ層	木炭	AaA	-25.81±0.63	24,910±110	4.5±0.06
IAAA-82696	SHIRA-157	Cb-3 Ⅱ層	木炭	AaA	-25.84±0.77	5,170±40	52.52±0.26
IAAA-82697	SHIRA-158	Cb-2 Ⅱ層	木炭	AaA	-24.17±0.74	3,680±30	63.24±0.27
IAAA-82698	SHIRA-159	Cb-7 Ⅱ層	木炭	AaA	-23.51±0.77	15,870±70	13.87±0.12
IAAA-82699	SHIRA-160	Cb-9① Ⅱ層	木炭	AAA	-24.67±0.65	17,910±80	10.75±0.11
IAAA-82700	SHIRA-161	Cb-13 Ⅱ層	木炭	AaA	-23.5±0.6	17,660±80	11.1±0.11
IAAA-82701	SHIRA-162	Cb-18 Ⅱ層	木炭	AAA	-26.21±0.68	20,330±100	7.96±0.1
IAAA-82702	SHIRA-163	Cb-18 Ⅱ層	木炭	AAA	-26.41±0.6	20,390±100	7.9±0.1
IAAA-82703	SHIRA-164	F-1 Ⅱ層	木炭	AAA	-26.54±0.69	10,240±50	27.95±0.18
IAAA-82704	SHIRA-165	F-1 Ⅱ層	木炭	AAA	-23.98±0.73	10,100±50	28.44±0.17
IAAA-82705	SHIRA-166	F-3 Ⅱ層	木炭	AaA	-26.66±0.63	16,040±70	13.58±0.12
IAAA-82706	SHIRA-167	F-4 Ⅱ層	木炭	AaA	-27.14±0.8	15,770±70	14.04±0.12
IAAA-82707	SHIRA-168	F-4 Ⅱ層	木炭	AaA	-27.28±0.85	15,710±70	14.14±0.12
IAAA-82708	SHIRA-169	Cb-4 Ⅱ層	木炭	AAA	-25.93±0.94	17,170±80	11.79±0.12
IAAA-82709	SHIRA-170	Cb-4 Ⅱ層	木炭	AaA	-25.9±0.93	17,380±80	11.49±0.11
IAAA-82710	SHIRA-171	Cb-6 Ⅱ層	木炭	AaA	-22.95±0.79	16,860±70	12.26±0.11
IAAA-82711	SHIRA-172	Cb-6 Ⅱ層	木炭	AaA	-24.03±0.71	16,470±70	12.87±0.11
IAAA-82712	SHIRA-173	Cb-8 Ⅱ層	木炭	AAA	-22.59±0.61	16,010±70	13.63±0.12
IAAA-82713	SHIRA-174	Cb-15① Ⅱ層	木炭	AAA	-21.98±0.92	15,950±70	13.73±0.12
IAAA-82714	SHIRA-175	F-2 Ⅱ層	木炭	AAA	-23.98±0.95	10,140±50	28.3±0.18
IAAA-82715	SHIRA-176	F-2 Ⅱ層	木炭	AAA	-21.17±0.83	10,080±50	28.5±0.19
IAAA-82716	SHIRA-177	Cb-16 Ⅱ層	木炭	AAA	-23.61±0.52	18,790±90	9.65±0.1
IAAA-82717	SHIRA-178	Cb-16 Ⅱ層	木炭	AAA	-20.28±0.65	18,830±90	9.59±0.1
IAAA-91777	SHIRA-179	Cb-1 Ⅱ層	木炭	AAA	-24.66±0.49	2,760±30	70.93±0.28
IAAA-91778	SHIRA-180	Cb-1 Ⅱ層	木炭	AAA	-24.2±0.8	2,780±30	70.75±0.28
IAAA-91779	SHIRA-181	Cb-5 Ⅱ層	木炭	AaA	-24.17±0.43	17,620±80	11.15±0.11
IAAA-91780	SHIRA-182	Cb-5 Ⅱ層	木炭	AaA	-23.78±0.59	17,800±80	10.9±0.1
IAAA-91781	SHIRA-183	Cb-8 Ⅱ層	木炭	AAA	-25.81±0.53	14,830±60	15.78±0.12
IAAA-91782	SHIRA-184	Cb-9 Ⅱ層	木炭	AaA	-24.21±0.6	17,600±70	11.18±0.1
IAAA-91783	SHIRA-185	Cb-11 Ⅱ層	木炭	AaA	-25.43±0.66	27,560±130	3.24±0.05
IAAA-91784	SHIRA-186	Cb-11 Ⅱ層	木炭	AAA	-25.54±0.62	28,440±140	2.9±0.05
IAAA-91785	SHIRA-187	Cb-13 Ⅱ層	木炭	AAA	-22.29±0.64	17,710±80	11.03±0.1
IAAA-91786	SHIRA-188	Cb-14 Ⅱ層	木炭	AaA	-25.37±0.64	25,060±120	4.42±0.06
IAAA-91787	SHIRA-189	Cb-14 Ⅱ層	木炭	AaA	-25.14±0.6	24,770±110	4.58±0.06
IAAA-91788	SHIRA-190	Cb-15 Ⅱ層	木炭	AAA	-23.55±0.61	15,830±60	13.94±0.11
IAAA-91789	SHIRA-191	Cb-7 Ⅱ層	木炭	AAA	-24.81±0.66	15,920±70	13.79±0.11

4 旧白濁3遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

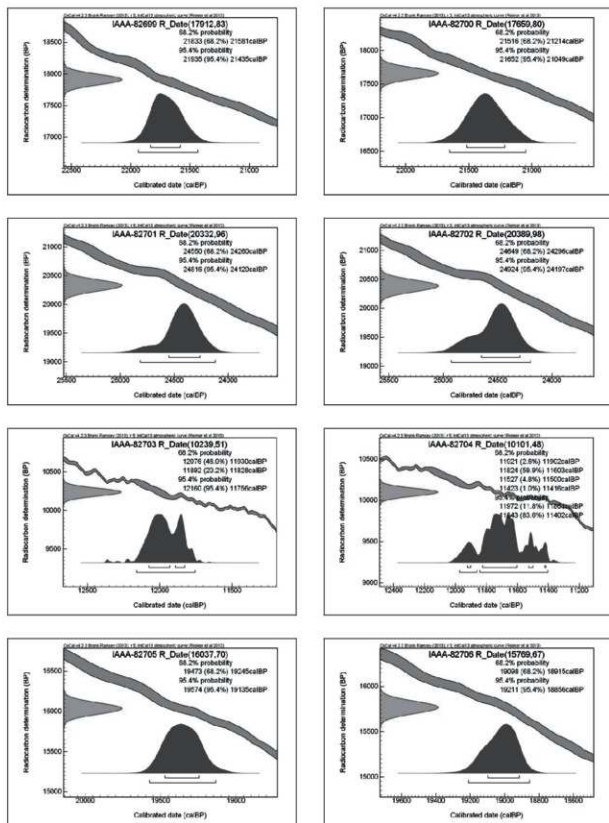
表IV-20 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}C$ 未補正值、暦年較正用14C年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲		2 σ 暦年代範囲	
	Age(yrBP)	pMC(%)					
IAAA-81786	26,850 ± 140	3.54 ± 0.06	26,871 ± 139	31,099calBP - 30,887calBP (68.2%)	31,193calBP - 30,776calBP (95.4%)		
IAAA-81787	15,860 ± 70	13.88 ± 0.11	15,897 ± 65	19,261calBP - 19,037calBP (68.2%)	19,404calBP - 18,961calBP (95.4%)		
IAAA-81788	15,810 ± 70	13.97 ± 0.11	15,823 ± 65	19,166calBP - 18,972calBP (68.2%)	19,274calBP - 18,896calBP (95.4%)		
IAAA-82694	24,960 ± 130	4.47 ± 0.07	24,994 ± 126	29,195calBP - 28,840calBP (68.2%)	29,397calBP - 28,711calBP (95.4%)		
IAAA-82695	24,920 ± 110	4.5 ± 0.06	24,906 ± 112	29,067calBP - 28,764calBP (68.2%)	29,280calBP - 28,645calBP (95.4%)		
IAAA-82696	5,190 ± 40	52.43 ± 0.24	5,173 ± 39	5,987calBP - 5,968calBP (18.1%) 5,947calBP - 5,906calBP (50.1%)	6,000calBP - 5,885calBP (89.2%) 5,814calBP - 5,760calBP (6.2%)		
IAAA-82697	3,670 ± 30	63.34 ± 0.25	3,681 ± 34	4,084calBP - 3,974calBP (68.2%)	4,143calBP - 4,125calBP (3.1%) 4,094calBP - 3,905calBP (92.3%)		
IAAA-82698	15,840 ± 70	13.91 ± 0.12	15,868 ± 69	19,225calBP - 19,010calBP (68.2%)	19,364calBP - 18,929calBP (95.4%)		
IAAA-82699	17,910 ± 80	10.76 ± 0.11	17,912 ± 83	21,833calBP - 21,581calBP (68.2%)	21,935calBP - 21,435calBP (95.4%)		
IAAA-82700	17,630 ± 80	11.13 ± 0.11	17,659 ± 80	21,516calBP - 21,214calBP (68.2%)	21,653calBP - 21,049calBP (95.4%)		
IAAA-82701	20,350 ± 100	7.94 ± 0.09	20,332 ± 96	24,500calBP - 24,200calBP (68.2%)	24,816calBP - 24,120calBP (95.4%)		
IAAA-82702	20,410 ± 100	7.88 ± 0.1	20,389 ± 98	24,649calBP - 24,206calBP (68.2%)	24,924calBP - 24,197calBP (95.4%)		
IAAA-82703	10,270 ± 50	27.86 ± 0.17	10,239 ± 51	12,076calBP - 11,930calBP (48.0%) 11,892calBP - 11,828calBP (20.2%)	12,160calBP - 11,756calBP (95.4%)		
IAAA-82704	10,090 ± 50	28.49 ± 0.16	10,101 ± 48	11,921calBP - 11,902calBP (2.6%) 11,824calBP - 11,603calBP (59.9%) 11,527calBP - 11,500calBP (4.8%) 11,423calBP - 11,416calBP (1.0%)	11,972calBP - 11,861calBP (11.8%) 11,843calBP - 11,402calBP (83.6%)		
IAAA-82705	16,060 ± 70	13.54 ± 0.12	16,037 ± 70	19,473calBP - 19,245calBP (68.2%)	19,574calBP - 19,135calBP (95.4%)		
IAAA-82706	15,810 ± 70	13.98 ± 0.12	15,769 ± 67	19,098calBP - 18,915calBP (68.2%)	19,211calBP - 18,856calBP (95.4%)		
IAAA-82707	15,750 ± 70	14.07 ± 0.12	15,714 ± 69	19,034calBP - 18,865calBP (68.2%)	19,152calBP - 18,799calBP (95.4%)		
IAAA-82708	17,190 ± 80	11.77 ± 0.12	17,172 ± 83	20,830calBP - 20,586calBP (68.2%)	20,965calBP - 20,483calBP (95.4%)		
IAAA-82709	17,400 ± 80	11.46 ± 0.11	17,383 ± 77	21,102calBP - 20,835calBP (68.2%)	21,260calBP - 20,715calBP (95.4%)		
IAAA-82710	16,830 ± 70	12.31 ± 0.11	16,862 ± 70	20,462calBP - 20,229calBP (68.2%)	20,550calBP - 20,103calBP (95.4%)		
IAAA-82711	16,450 ± 70	12.9 ± 0.11	16,469 ± 70	19,996calBP - 19,751calBP (68.2%)	20,083calBP - 19,628calBP (95.4%)		
IAAA-82712	15,970 ± 70	13.7 ± 0.12	16,007 ± 72	19,446calBP - 19,206calBP (68.2%)	19,546calBP - 19,083calBP (95.4%)		
IAAA-82713	15,900 ± 70	13.81 ± 0.11	15,960 ± 68	19,372calBP - 19,121calBP (68.2%)	19,481calBP - 19,016calBP (95.4%)		
IAAA-82714	10,120 ± 50	28.36 ± 0.17	10,140 ± 51	11,957calBP - 11,863calBP (23.0%) 11,844calBP - 11,703calBP (40.5%) 11,668calBP - 11,645calBP (4.7%)	12,040calBP - 11,600calBP (91.5%) 11,551calBP - 11,494calBP (3.0%) 11,430calBP - 11,411calBP (0.9%)		
IAAA-82715	10,020 ± 50	28.73 ± 0.18	10,083 ± 52	11,797calBP - 11,788calBP (1.3%) 11,773calBP - 11,598calBP (46.3%) 11,554calBP - 11,475calBP (15.2%) 11,439calBP - 11,409calBP (5.4%)	11,968calBP - 11,865calBP (7.2%) 11,839calBP - 11,391calBP (87.5%) 11,374calBP - 11,359calBP (0.7%)		
IAAA-82716	18,760 ± 90	9.67 ± 0.1	18,785 ± 85	22,748calBP - 22,503calBP (68.2%)	22,896calBP - 22,436calBP (95.4%)		
IAAA-82717	18,750 ± 90	9.69 ± 0.1	18,830 ± 85	22,804calBP - 22,545calBP (68.2%)	22,935calBP - 22,465calBP (95.4%)		
IAAA-91777	2,750 ± 30	70.98 ± 0.27	2,758 ± 31	2,876calBP - 2,790calBP (68.2%)	2,942calBP - 2,937calBP (0.7%) 2,929calBP - 2,777calBP (94.7%)		
IAAA-91778	2,770 ± 30	70.86 ± 0.26	2,779 ± 32	2,929calBP - 2,844calBP (64.1%) 2,814calBP - 2,805calBP (4.1%)	2,954calBP - 2,790calBP (95.4%)		
IAAA-91779	17,610 ± 80	11.17 ± 0.11	17,622 ± 76	21,455calBP - 21,158calBP (68.2%)	21,586calBP - 21,011calBP (95.4%)		
IAAA-91780	17,780 ± 80	10.93 ± 0.1	17,802 ± 77	21,710calBP - 21,434calBP (68.2%)	21,835calBP - 21,305calBP (95.4%)		
IAAA-91781	14,850 ± 60	15.75 ± 0.12	14,834 ± 61	18,131calBP - 17,939calBP (68.2%)	18,244calBP - 17,860calBP (95.4%)		
IAAA-91782	17,590 ± 70	11.2 ± 0.1	17,599 ± 72	21,414calBP - 21,128calBP (68.2%)	21,543calBP - 20,995calBP (95.4%)		
IAAA-91783	27,570 ± 130	3.23 ± 0.05	27,559 ± 132	31,447calBP - 31,226calBP (68.2%)	31,569calBP - 31,116calBP (95.4%)		
IAAA-91784	28,450 ± 140	2.9 ± 0.05	28,444 ± 139	32,725calBP - 32,100calBP (68.2%)	32,914calBP - 31,785calBP (95.4%)		
IAAA-91785	17,670 ± 80	11.09 ± 0.1	17,712 ± 76	21,585calBP - 21,300calBP (68.2%)	21,735calBP - 21,141calBP (95.4%)		
IAAA-91786	25,070 ± 120	4.41 ± 0.06	25,059 ± 115	29,264calBP - 28,917calBP (68.2%)	29,442calBP - 28,782calBP (95.4%)		
IAAA-91787	24,770 ± 110	4.58 ± 0.06	24,767 ± 106	28,919calBP - 28,661calBP (68.2%)	29,073calBP - 28,520calBP (95.4%)		
IAAA-91788	15,810 ± 60	13.98 ± 0.11	15,830 ± 63	19,172calBP - 18,981calBP (68.2%)	19,278calBP - 18,900calBP (95.4%)		
IAAA-91789	15,910 ± 60	13.79 ± 0.11	15,915 ± 64	19,291calBP - 19,059calBP (68.2%)	19,426calBP - 18,980calBP (95.4%)		

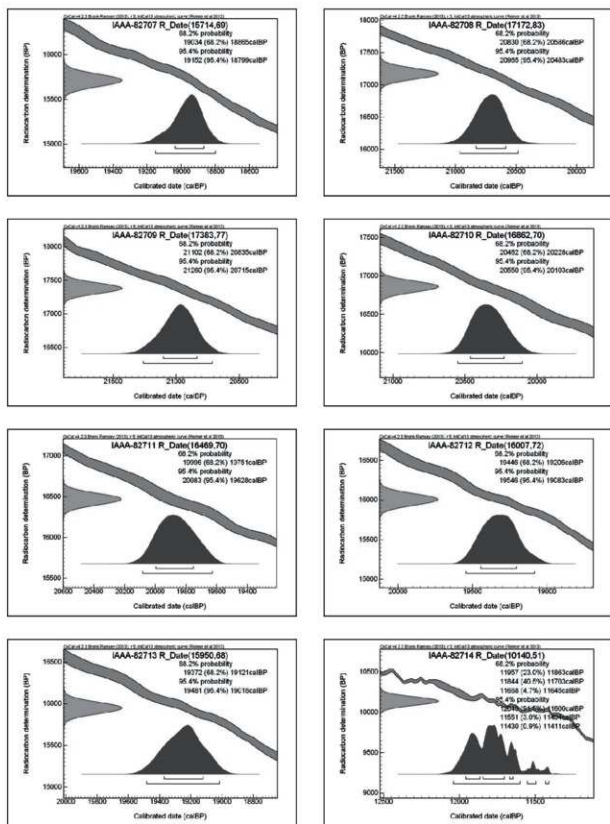


図IV-21 暦年較正年代グラフ (1)

4 旧白濁3遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

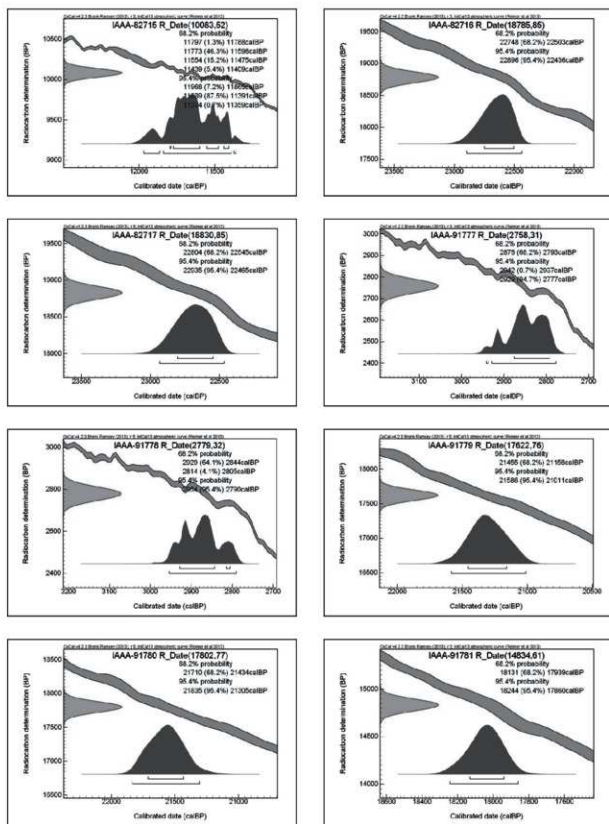


図IV-22 暦年較正年代グラフ(2)

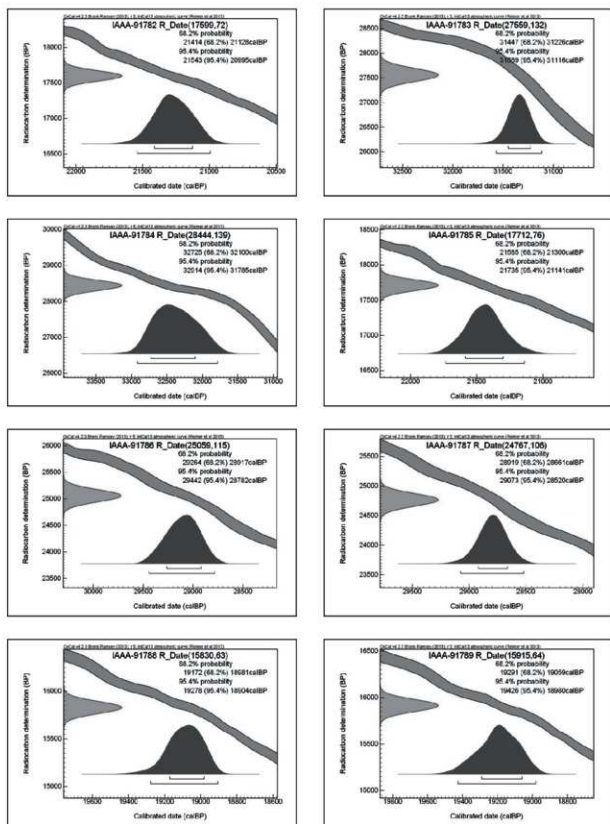


図IV-23 暦年較正年代グラフ (3)

4 旧白濁3遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)



図IV-24 暦年較正年代グラフ (4)



図IV-25 暦年較正年代グラフ(5)

5 旧白滝3遺跡の堆積物粒度分析及び土壌化学性分析結果報告

首都大学東京 出徳雅実・林 和広

(1) はじめに

北海道の後期旧石器時代遺跡は、石狩低地帯南部や十勝平野のように風成の河岸段丘や古砂丘に立地し、多数のテフラ層を狭在する厚い第四紀後期風成堆積物に埋没する事例と、常呂川流域や湧別川流域のように、河岸段丘や緩斜面に立地し、厚さ30cmに満たない浅埋没の事例がある。後者では、ソリフラクションやマスウエイステイングなどの深刻な埋没後擾乱を被り、地質編年と石器集中の形成プロセスの両方の理解に大きな困難が伴う。従って、このような遺跡では遺跡形成過程論に基づく地考古学的調査研究が必要不可欠の視点となる。

本稿では、(1) 旧白滝3遺跡の層序断面から採取された堆積物試料の粒度組成分析及び土壌化学性分析結果を示し、(2) それらの結果と遺跡から回収された放射性炭素年代値をもとに、遺跡の形成過程と埋没後擾乱についていくつかコメントする。

(2) 試料採取地点の地形と堆積コンテキスト

① 地形と堆積コンテキスト

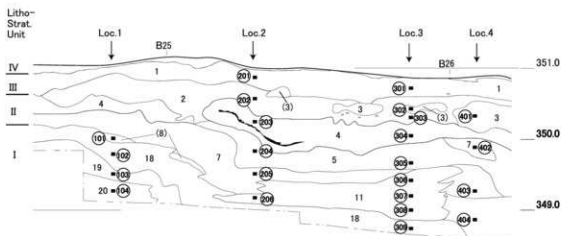
旧白滝3遺跡は、中位の河岸段丘面に立地する(N43° 54' 39"・E143° 13' 9"、標高351m)。この段丘面は、湧別川に沿って細長く分布する河成段丘で、礫、砂、ローム、降下テフラからなり、ステージ5eに離水したとされる白滝盆地の上白滝面(平川他 2000、中村 2008)と対応する。

遺跡周辺では、この段丘面の下位に低位段丘面が2面、高位には高位段丘、緩斜面、及び山地斜面が分布する。高位の山地斜面は主に後期白亜紀～前期漸新世の付加体コンプレックスの砂岩-泥岩互層(泥岩優勢)からなり、ペルム紀～前期白亜紀玄武岩、中～後期中新世珪質火山岩類の貫入岩、および鮮新世溶結凝灰岩を含む。これらの地形面からは、これらの岩石が重力や流水による堆積物として遺跡に供給される可能性がある。また、後期更新世から完新世にかけては、レス(Ono and Naruse 1997)とテフラ(中村他 1999)が風成堆積物として供給されている。テフラは、下位から、トエトコ火山灰(Ttk, 150-200ka)、支笏第1テフラ(Spfa-1, 40-45ka)、屈斜路庶路(Kc-Sr, 35-40ka)、大雪御鉢平(Ds-Oh, >30ka)、樽前a軽石(Ta-a, AD1739)が報告されている(中村他 1999)。

② 層序断面の地質学的ユニット区分

図1-16に旧白滝3遺跡の発掘区北壁における層序を示す。第24区から第30区までの東西22mの範囲で、地表下最大約200cmまでの第四紀未固結堆積物を観察した。この断面で観察した層厚は、西端で約120cm、中央26区付近で最大となり200cm、東端で80cmである。全体として、この層序断面では、東西方向の層相変化が著しい。いずれの地点でも、地表から段丘基底の側方付加堆積物までを連続して観察することはできなかった。また、南北方向の層序断面は確認していない。

最大層厚を持つ発掘区北壁B25～26区付近の層序断面では、下位から上位に向かって岩相層序ユニットI～IVに区分された(図IV-26)。ユニットIは、小規模なクリークもしくはガリーを充てんする堆積物で、水平方向の層相変化が著しく、小亜角礫や粗砂を多く含み、側方に指交する小規模な分布のサブユニットからなる。全体として、サブユニット間の層界は明瞭で、上方に向かって細流化



図IV-26 岩相層序ユニット区分図

する傾向を示し、上位のユニットIIより水流の影響を比較的高く被っていることが推測される。本ユニットの上位に遺物産出層準がある。本ユニットは、段丘の側方付加堆積物あるいは直後の垂直付加堆積物ではなく、斜面上方からの水と重力作用による堆積物と見なされる。ユニットIIは、同じく小規模なガリーを埋める堆積物である。いくつかのサブユニットに区分され、それらは大抵ピンチアウトする。下位のユニットIよりも淘汰がよく層界は不明瞭、水流の影響が比較的低いというという相異がある。全体として、サブユニット間の関係は不安定で、シートウォッシュやソリフラクションなどのマスマーヴメントによって移動したと推測される。ユニットIIIは風成ローム層で、若干しまりが弱く、シルトサイズのマトリクスが増える傾向がある。層界は漸移的で、北壁の層序断面を通じて厚さ10cm強で層厚は一定し、下位のユニットを広く覆う。ユニットIVは、これら風成堆積物を母材とする、現地表から連続的に発達する黒色A層準とB層準を特徴とする。これらのユニット区分は、図I-16に提示されている発掘調査時の発掘担当者による層序区分と以下の通り概ね対応する。すなわち、図IV-26の区間において、下位から、ユニットIが20-18、ユニットIIが7,5,4、ユニットIIIが4-1であり、ユニットIVは図示されていない。

(3) 試料と方法

① 試料

野外での層序断面の地質学的ユニット区分は、2008年8月に第1著者によって実施された。堆積物試料は、第1著者との打ち合わせの後、発掘担当者の直江が行った。堆積物試料は、堆積物粒度分析と土壌化学分析を目的として採取した。堆積物試料の採取位置と内訳を図I-16および図IV-26に示す。堆積物試料の合計は23点である。堆積物試料は、全て層序断面発掘区北壁24~30区において採取したが、水平方向の層相変化が著しいため、試料採取位置を合計4ヶ所設定した(Loc.1~Loc.4)。採取した試料点数とそのラベルは、それぞれ以下の通りである。Loc.1: 4点(KST3 101~104)、Loc.2: 6点(KST3 201~206)、Loc.3: 9点(KST3 301~309)、Loc.4: 4点(KST3 401~404)。実験室での風乾は採取後速やかに行い、分析は2012年4月~7月に第2著者と第1著者が行った。

② 堆積物粒度組成分析

粒度分析は首都大学東京考古学研究室および土壌学研究室において実施した。分析方法は湿式篩別

とレーザー回折・分散法の組み合わせによる。合計23点の試料について、(1)乾燥重量約50gを四分法によって準備し、(2)約100ccの水に試料を入れて超音波振盪器で30分振盪し、(3)表面に浮いた比重の軽いヒゲ根や炭化物を機械的に除去し(軽石は除去しない)、(4)有機物(腐植)処理には6% H_2O_2 溶液を用い、反応がなくなるまで追加注入を繰り返した後、2週間程度放置し、(5)湿式篩別(#2mm、#1mm、#500mm、#250mm、#125mm、#63mm)を行い、<#63mm試料をバットで受ける。

(6)篩別した試料は水分が完全に蒸発するまで恒温乾燥機で乾燥させ、試料を計量し、重量%を産出する。(7)<#63mm試料約1gを100ccの水に入れ、超音波振盪器で30分振盪し、懸濁試料を数日間水浸する。(8)土壌学研究室のレーザー回折式粒度分布測定装置(鳥津製作所SALD-200VER)を用いて分析した。(9)得られた結果をヒストグラムによって頻度分布を表示した。そのほか統計量として、最頻値(モード)は、砂礫の場合は1 ϕ 単位の階級値を、シルト・粘土の場合は「Wing SALD」の階級値(0.25~350 μ mを51で区切った対数スケールの階級値)を用い、中央粒径値、平均値、淘汰度、尖度、歪度はFolk and Ward (1957)により算出した。岩相の区分はFolk (1954)の三角ダイヤグラムを参照して呼称した。

③ 土壌化学性分析

実験は首都大学東京土壌学研究室において、堆積物および土壌母材の由来や、古植生など地表環境の変遷を目的とし、土壌一般理化学性として(1)全炭素・全窒素含量、(2)pHを、全量分析として(3)元素組成(EDX分析)を行った。(1)全炭素・全窒素含量は、乾式焼燃-ガスクロマトグラフ法(土壌環境分析法編集委員会1997)をもとに、0.25mmの篩にかけた微粉砕試料をNC-アナライザー(住友化学製SUMIGRAPH NC-22A)を用い測定した。1試料につき3回測定し、その平均を分析結果とした。標準物質にはアセトアリニド(C_8H_9NO)(C=71.09%、N=10.36%)を用いた。試料約300~400mgを秤量し焼燃時間を90秒、計測時間を360秒に設定した。結果を用いC/N比を算出した。(2)pH分析は、土壌環境分析法編集委員会(1997)に従いpH(H_2O)を測定した。試料8mgに対し H_2O (イオン交換水)20mlを加え、振盪したのち1時間静置、pHメータ(東興化学研究所製TPX999)を用いて測定した。(3)元素組成は、エネルギー分散型蛍光X線元素分析装置(鳥津製作所Rayny EDX-700HS)により、構成元素の定性・定量分析(FP法)を行った。試料は0.25mm篩を通した微粉砕試料)で約2gを直径2cm、深さ0.5mmのアルミリングに充填し、100kNで加圧成型して試料ディスクを作成して分析に供した。測定は真空雰囲気下で印加電圧50kV、積算時間360秒として行い、0~40keV(Na-U)の範囲の蛍光X線強度を解析した。結果をもとに主要構成成分10元素(Si, Al, Fe, Ti, Mn, Ca, Mg, K, Na, P)の酸化物組成の重量比と、これに微量元素を含むS.Zr.Sr.Rb.Brを加えた15の元素組成の重量比をもとめた。また酸化物組成の結果からSi/Al、MWPI(Vogel 1975)、CIW(Harnois 1988)の風化指数を算出した。CIWとMWPIは値が低いほど風化しているあるいは風化しやすいことを示し、Si/Alは値が高いほど風化している、あるいは風化履歴のあることを示している。

(4) 結果

① 堆積物粒度組成とパターン

1) Loc. 1 (KST3 101~104)

Loc. 1における粒度分析の結果を図IV-27および表IV-21に示す。粒度分布は、101とKST3 102-104の2つの異なるパターンを示す。101は、礫と砂が少なくシルトと粘土が他の資料と比べて明らか

表Ⅳ-21 粒度分析結果

Locality	Sample No.	Depth	Total	0.075	0.15	0.3	0.6	1.2	2.5	5.0	10.0	20.0	40.0	60.0	80.0	100	0.075	0.15	0.3	0.6	1.2	2.5	5.0	10.0	20.0	40.0	60.0	80.0	100						
Loc.1	KST3101	104	1.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00					
	KST3102	106	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00				
	KST3103	108	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00			
Loc.2	KST3201	114	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00			
	KST3202	116	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		
	KST3203	118	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
Loc.3	KST3301	114	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
	KST3302	116	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	KST3303	118	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
Loc.4	KST3401	94	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	KST3402	98	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	KST3403	102	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

に多い。102-104は、砂が50%程度で、礫、シルト、粘土がそれぞれ20-30%含まれ、淘汰が悪い。最頻値も101とそれ以外と明瞭に異なる。淘汰度と実度は明瞭な傾向を示さないが、歪度はやはり101だけが他と大きく異なる傾向を示す。

2) Loc. 2 (KST3 201-206)

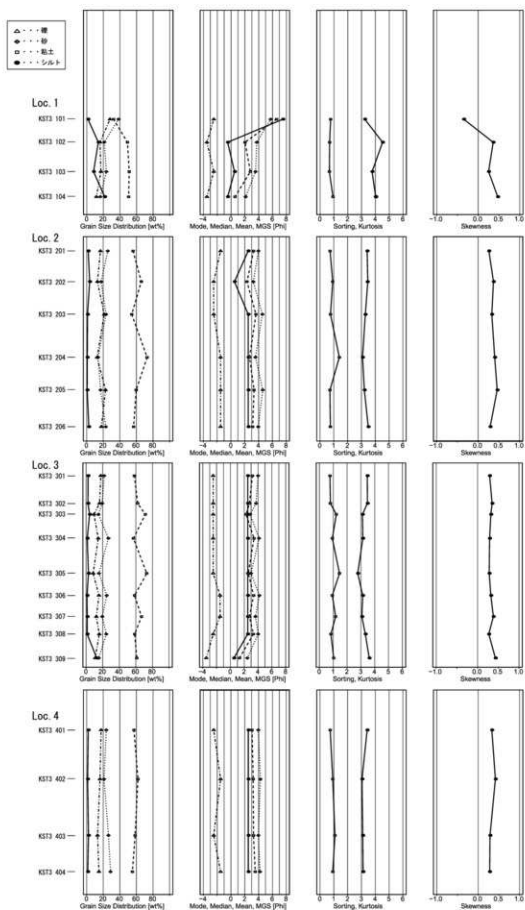
Loc. 2における粒度分析の結果を図Ⅳ-27および表Ⅳ-21に示す。粒度分布は、201-206を通じて大きな変化を示さない。特に礫の変化がないが、202と204で砂が60-70%に達し、シルトと粘土が減少する傾向を持つ。最大粒径は202だけが低く(0.5)、他の試料と異なる(2.5)。一方で、実度は204だけが比較的高い値を示す。まとめると、201、203、205、206は同じ粒度分布を示し、202および204とは異なる傾向を示す。しかし一方で、202と204は砂が多いという共通する傾向はあるものの、202では最大粒径が低く204では実度が高いという点で区別される。

3) Loc. 3 (KST3 301-309)

Loc. 3における粒度分析の結果を図Ⅳ-27および表Ⅳ-21に示す。粒度分布は、301-308が60%前後の卓越する砂を特徴とし、シルト、粘土、および礫の順で構成されるのに対し、309は、同じく砂が60%程度と卓越するものの、シルト、礫、および粘土が15%でほぼ同比という特徴の相異がある。301-308の内、303、305、および307は砂が多く(約70%)、シルトと粘土が減少する傾向を示す。

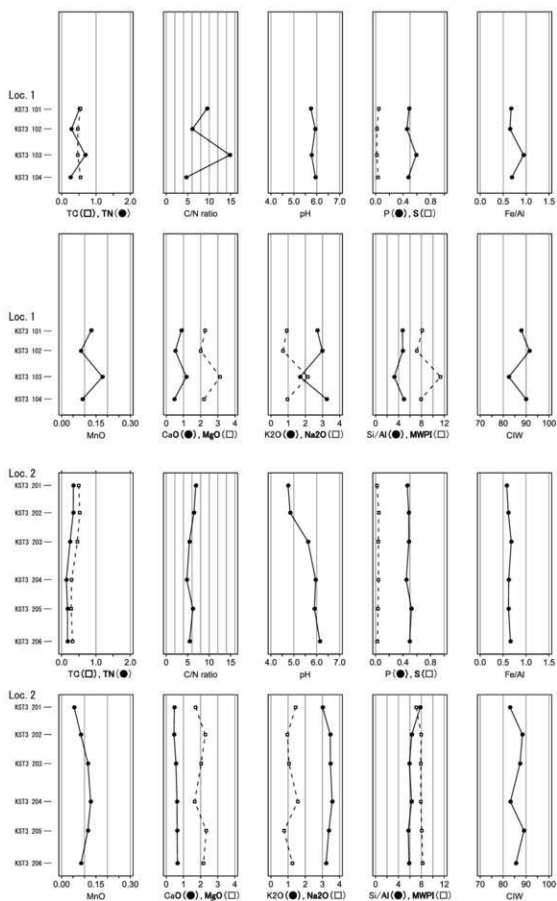
309は最頻値、中央粒径、平均値、淘汰度、および実度がいずれも他の試料に比べて低いことが明瞭である。306と307で最大粒径が高い。303、305、および307で最頻値、中央粒径、および平均値がコンパクトにまとまる傾向を示す。淘汰度は303、305、および307でやや高く、実度は303-307でやや低くその上でやや高いという傾向を示す。歪度に明瞭な傾向は認められない。

5 旧白濁3遺跡の堆積物粒度分析及び土壌化学分析結果報告

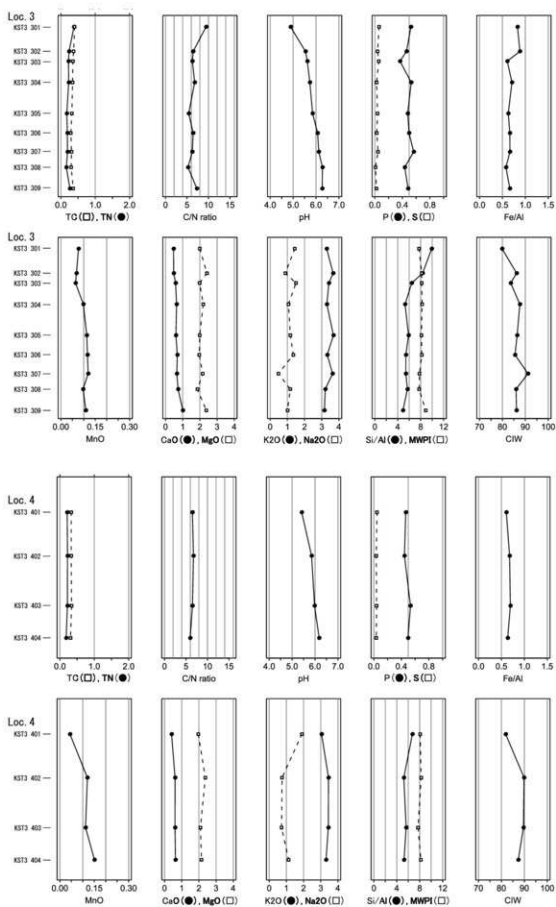


図N-27 粒度分析結果

5 旧白濁3遺跡の堆積物粒度分析及び土壤化学性分析結果報告



図IV-28 土壤化学性分析結果(1)



図IV-29 土壤化学性分析結果(2)

ンを示す。C/N比は基本的に10%以下の低い値を示し、大きな変化は認められない。pHは206が6.14と微酸性を示し、201と202がそれぞれ4.75と4.84で、極めて酸性を示す。全体として、上方に向かって酸性が強まる傾向を示す。

元素組成はいずれの元素においても指摘すべき明瞭な傾向を示さないが、風化指数を見ると、201の風化履歴が比較的高く、また204でも若干風化履歴が高い可能性があることを指摘できる。

3) Loc. 3 (KST3 301~309)

Loc. 3における土壌化学性分析結果を図IV-29および表IV-22に示す。全炭素含量と全窒素含量は共に大きな変化を示さない。C/N比は基本的に10%以下の低い値を示すものの、309と301で比較的高く、上方に向かって緩やかに高くなる傾向を持つ。pHは309-306が微酸性を示し、305-302が弱酸性、そして301が4.89で極めて酸性を示す。全体として、上方に向かって酸性が強まる傾向を示す。

元素組成はいずれの元素においても指摘すべき明瞭な傾向を示さないが、風化指数を見ると、301の風化履歴が最も高く、また307で風化履歴がやや高い傾向があることを指摘できる。

4) Loc. 4 (KST3 401~404)

Loc. 4における土壌化学性分析結果を図IV-29および表IV-22に示す。全炭素含量は全体を通じて0.3程度で変化は認められない。全窒素含量は全炭素含量と同様のパターンを示す。C/N比は基本的に6%程度で、大きな変化は認められない。pHは404が6.18と微酸性を示し、201が5.42で強酸性を示す。全体として、上方に向かって酸性が強まる傾向を示す。

元素組成はいずれの元素においても指摘すべき明瞭な傾向を示さない。風化指数は、401で風化履歴が比較的高い事を示す。

(5) 議論と結論

① 遺跡の自然形成過程

発掘区北壁における層序断面の記載、堆積物粒度分析、土壌化学性分析結果、過去の白滝遺跡群およびその周辺での地形学的調査等を合わせて、以下の通り自然形成過程を再構成できる。

(a) 遺跡が立地する上白滝面の本流性側方付加堆積物と垂直付加堆積物の形成後、湧別川河谷の下刻が始まり、その後北方方向の後背山地斜面や緩斜面から堆積物が供給される。

(b) 小規模なクリークもしくはガリーが形成され、主に比較的高い水流の影響によって、またはしばしば重力作用によって、それを充填する小規模な堆積物が付加されてゆく(ユニットI)。本ユニット下位から遺物の出土は確認されていないが、上位の比較的安定したコンテキストで複数の石器集中が形成された。

(c) 引き続き、小規模なクリークもしくはガリーが、シートウォッシュやソリフラクションなどのマスマーヴメントによって移動したと推測される堆積物によって充填され、およそ緩やかな波状の起伏になる(ユニットII)。複数の石器集中が形成された。

(d) 比較的安定した厚さ10cm程度の風成ローム層が、下位のユニットを広く覆って堆積する(ユニットIII)。多数の石器集中が形成された。

(e) これら風成堆積物を母材とする黒色A層準とB層準が発達する(ユニットIV)。

② 遺跡の形成過程と埋没後擾乱についてのいくつかのコメント

遺跡の形成過程の検討結果を踏まえて、石器集中の形成と埋没後擾乱に関わるいくつかのコメントを提示しておきたい。

ユニット I 上部に残された石器集中は、それより上位のユニットから産出した石器集中とは異なる層序コンテクストにあることは明らかである。但し、ユニット I 上部の形成年代とユニット II より上位の堆積ユニットの形成年代は、不明である。

ユニット I やユニット II に産出層準を持つ遺物集中の形成プロセスは、3つの可能性が考えられる。すなわち、(1) 現在遺物が比較的システミックコンテクストを比較的保っている可能性、(2) システミックコンテクストは斜面上方で形成されたが、シートウォッシュあるいはマスマーブメントによって移動してきた可能性、(3) その両者が混合している可能性である。これらは、遺跡の立地コンテクストが崩積・斜面コンテクストにあることから、いずれも可能であり、石器集中間あるいは石器集中の内部においても生じうる。また、(2) では、埋没後の移動プロセスの種類相異によって、例えばシートウォッシュでは遺物の空間的コンテクストは原形を留めない程度に変化させられるが、マスマーブメントではシステミックコンテクストを留めたまま移動する可能性が推測される。そしてその結果は、占拠地点の微地形と、埋没後擾乱の強度、範囲、持続期間によって変化する。今回の分析結果に加えて、石器集中の空間分析と年代測定値の検討を行い、上記の問題点にアプローチすることは有益であろう。

謝辞

本研究を実施するにあたり、渡邊真紀子教授（首都大学東京土壌学研究室）、川東正幸准教授（首都大学東京土壌学研究室）、白井正明准教授（首都大学東京地理学研究室）から実験室の使用にあたって便宜を図っていただいた。また、堀恭介氏（首都大学東京考古学研究室）には、実験室での分析と図表の作成を補助していただいた。本研究は、JSPS科研費24320157（基盤（B）「環日本海北部地域の最終氷期最盛期における人類社会の形成と変化」研究代表者：出穂雅実）の助成を受けたものです。

引用文献

- 土壌環境分析法編集委員会（1997）『土壌環境分析法』博友社。
- 平川一臣・中村有吾・石川守（2000）「IV章3節 北海道白滝遺跡と周辺地域のテフラ層序と地形環境」『白滝遺跡群 I』財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書、第140集、pp.235-249。
- 中村有吾（2008）「IV章3 旧白滝地域のテフラ層序と地形環境」『白滝遺跡群Ⅱ』財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書、第261集、pp.231-239。
- 中村有吾・平川一臣・長沼孝（1999）「北海道白滝遺跡と周辺地域のテフラ」『地学雑誌』108、616-628。
- Folk, R.L. (1954). The distinction between grain size and mineral composition in sedimentary-rock nomenclature. *Journal of Geology*, 62, 344-359.
- Folk, R.L., & Ward, W.C. (1957). Brazos River bar: A study in the significance of grain size parameters. *Journal of Sedimentary Petrology*, 27, 3-26.
- Harnois, L. (1988). The CIW index: A new chemical index of weathering. *Sedimentary Geology*, 55, 319-322.
- Ono, Y. and Naruse, T. (1997) Snowline elevation and eolian dust flux in the Japanese islands during isotope stage 2 and 4. *Quaternary International* 37 : 45-54.
- Vogel, D. E. (1975). Precambrian weathering in acid metavolcanic rocks from the Superior Province Villebon Township, south central Quebec. *Canadian Journal of Earth Sciences*, 12, 2080-2085.

6 旧白滝3遺跡における地形・地質環境

北海道大学大学院理学研究院 地震火山研究観測センター
中村有吾

(1) はじめに

本稿では2008年に行われた旧白滝3遺跡の発掘現場周辺の地形・地質環境について、詳細な地質断面を提示するとともに、若干の考察を行う。現地調査は2008年7月に行った。

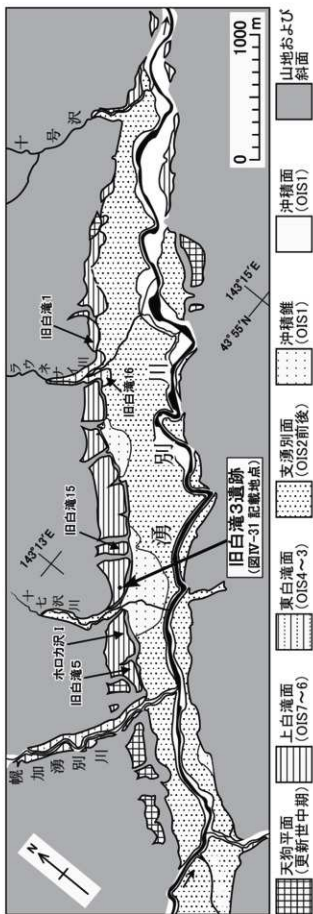
調査地点は、主に湧別川左岸の河成段丘面上である(図IV-30)。なお、本調査地域周辺およびその上流に位置する白滝盆地では、既にテフラ層序と段丘面区分が明らかになっている(中村ほか1999、平川ほか2000、中村ほか2003、中村2008)。とくに中村(2008)によって旧白滝3遺跡周辺のテフラ層序・段丘面区分が明らかにされた。

旧白滝および周辺地域の地形分類図(段丘面区分図)を図IV-30に示す。旧白滝付近の段丘面は、白滝盆地主要部に分布する段丘面(平川ほか2000、中村ほか2003)に対比することができる。すなわち、旧白滝3遺跡は、旧白滝5遺跡、旧白滝15遺跡と同様に上白滝面に立地する(図IV-30)。上白滝面は、湧別川左岸に連続的に分布する本流性河成段丘面である。本調査地点付近の標高は約350mで、下位の沖積錐との間に20m前後、支湧別面との間に35m前後の比高をなす。中村(2008)によると、この段丘堆積物はトエトコ火山灰(Ttk, 15万~20万年前頃; 奥村1991)に直接覆われる。また、調査地点の約700m上流にある旧白滝5遺跡では、段丘面を厚い斜面堆積物(粒径3~5mmの角礫を含む淘汰の悪い堆積物)が覆っており、地形表面もなだらかな斜面となる。Ttkが段丘堆積物を直接覆うことから、上白滝面は15万~20万年前(酸素同位体比ステージ6~7)頃に段丘化したと考えられる。また、旧白滝5遺跡では大雪御鉢平テフラ(Ds-Oh, 約3万年前。勝井ほか1979、中村・平川2000)が認められ、その上位にも斜面堆積物がある(中村2008)ことから、3万年前以降(おそらく最終氷期極相期: 18000年前ころ)にも、斜面上でのマスマーブメントが働いた可能性が高い。このマスマーブメントは、周氷河性のソリフラクションと考えられている(中村ほか2003)。

(2) 地質断面の記載

旧白滝3遺跡のB25杭~B30杭まで幅約22mのトレンチについて、堆積物を記載するとともに地質断面図(図IV-31)、を作成した。図の左端が南西、右端が北東方向に相当する。調査地点の最大傾斜方向は東南東であるが、トレンチ上面も左から右へと緩やかな斜面をなす。図IV-31左端地点における地表面の標高は351mである。図IV-31に示した[1]~[15]の地層の詳細を以下に示す。

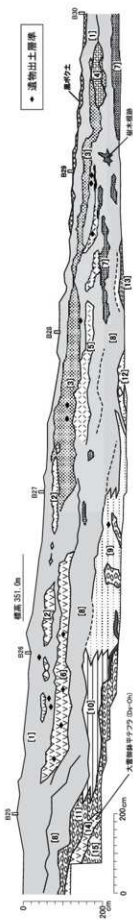
- [1]層: 表層土壌(風成堆積物および黒ボク土壌。遺物を含む)
- [2]層: 再堆積火山灰・軽石層(Ds-Ohの再堆積)
- [3]層: 斜面堆積物(シルト~極粗砂層。遺物を含む)
- [4]層: 再堆積火山灰層(Ds-Ohの再堆積)
- [5]層: 再堆積火山灰層(Ds-Ohの再堆積)
- [6]層: 再堆積軽石層(Ds-Ohの再堆積)。遺物を含む。
- [7]層: 極細砂~極粗砂の薄層
- [8]層: 風成層(古土壌層。細砂~粗砂)
- [9]層: 極細砂~中砂層(遺物を含む。台形様石器群)



図IV-30 旧白滝地域の地形分類図

※図IV-30の系図は中村(2008)による。凡例中のOISは国際標準地層ステージを示す。図中に示した標高数値は地形図標高(UD2000)による。

IV 自然科学的手法による分析



図中の数字(1)~(10)は遺物の種類については本文の記述を参照

図IV-31 旧白滝3遺跡における地質断面スケッチ (B25~B30区)

- [10]層：平行ラミナのある粘土～中砂層
- [11]層：粘土質細礫層（最大粒径7mm）、浅い谷を埋める堆積物
- [12]層：角礫（粒径8cm）を含む再堆積火山灰・軽石層。[14]層の再堆積。
- [13]層：粗砂～5mmサイズ中礫層
- [14]層：大雪御鉢平テフラ（Ds-Oh）層
- [15]層：角礫層（斜面堆積物）

（3）旧白滝3遺跡付近の地史

堆積の順番はほぼこの逆順（[15]層から[1]層まで）と思われる。この層序に従えば旧白滝3遺跡付近の地史は次の1～6にまとめられる。

1. 段丘礫層を覆う斜面堆積物[15]の堆積とDs-Oh[14]の降下
2. 段丘堆積物[13]およびDs-Ohの再堆積[12]

おそらく寒冷期のマスマーブメント（ソリフラクション等）により上記[14]・[15]の堆積物が、斜面下方に移動し、[13]・[12]層を形成した。但し、[13]・[12]層の堆積と[15]・[14]層との間の時間間隙の長さは不明で、[15]と[14]層、[13]と[12]層がそれぞれ同時期の堆積物の可能性もある。

3. 流水堆積物の形成[11]～[9]

[11]～[9]層は浅い谷を埋める河川堆積物で、[10]層と[9]層はおそらくほぼ同時期に堆積したと考えられる。[10]層は粘土を含み、[9]層も極細砂を含む水成堆積物であることから、[10]・[9]層の堆積時、B26～B27区付近には浅く幅広い谷状の地形があったと考えられる。また、平行・水平のラミナの存在は、比較的速い流れを示唆する。なお、[9]層には遺物（台形様石器、第三章（6）参照）が含まれている。よって、河川氾濫時以外は比較的安定した環境だったと思われる。

4. 安定期の存在[8]～[7]

比較的安定した時期で、この時期の堆積物は細粒の風成層[8]が中心である。流水やマスマーブメントの影響は小さいといえる。但し、小規模ながら薄い砂層[7]の堆積がみられる。この砂については、移動様式（水成かマスマーブメントか）についても供給源についても不明であるが、やはり斜面下部へと向かって運搬・堆積したと考えられる。

5. 火山灰の再堆積[6]～[4]

再び、Ds-Oh層がマスマーブメントにより再移動する。[6]層から[4]層へと、斜面の下方へ移動しており、徐々に層厚が薄くなる。[6]層はDs-Ohと層相が似るが、遺物が含まれることから、本来のテフラ層ではありえない。[5]層はDs-Ohないし[6]層から洗い出された細粒物質（火山ガラス粒子など）からなる堆積物であろう。なお、Ds-Ohと考えられる層はB25区では礫層に覆われていることから、[6]～[4]層の供給源は、この記載地点よりも上方（スケッチに対して左側）になる。

6. 粗粒砂層の再堆積[3]～[1]

上述の再堆積火山灰層を覆う様にして、粗粒の砂層[3]が堆積している。この層はB27区からB29区付近まで連続的に分布するが、斜面下方へと徐々に層厚が薄くなる。やはり周水河性のマスマーブメントによる移動・堆積と考えてよいだろう。なお、旧白滝3遺跡で最も表層の堆積物である[1]層には旧石器時代終末と考えられる遺物（小型舟底形石器器群）が多く含まれている。[1]層は、[8]層同様に風成層を中心とする堆積物で、比較的安定した時期だったと考えられる。

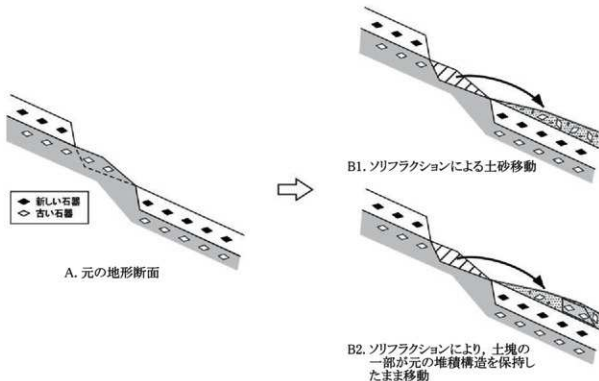
(4) 堆積時期について

[11]~[9]層はDs-Ohを直接覆うことから、3万年前から最終氷期極相期(1.9万~2.3万年前)にかけての堆積物と考えられる。なお、本報告書によると、[9]層に含まれる遺物はその形態から3~2.5万年前ころと推定されている。[1]~[8]層の年代については、本報告書において数点の放射性炭素年代が提示されている他は、上限を決める地質学的証拠(示標テフラなど)は見つかっていない。しかし、一般に北海道において黒ボク土壌が発達するのは完新世に入ってからとされている(三浦ほか2009)。本調査地点ではB29区付近で、黒ボク土壌が[1]を覆う様子が認められる。この黒ボク土を仮に完新世の最温暖期(7,000~8,000年前)の形成と考えると、[1]~[8]層は最終氷期極相期から完新世初頭の比較的短期間に形成されたと考えられる。とくに、比較的厚い風成堆積物である[8]層は最終氷期極相期の堆積物と考えるのが妥当であろう。[7]~[2]層の一連の再堆積火山灰は、それ以降の比較的短期間(数千年間か)で形成された、周水河性マスムーブメント堆積物と推定される。

(5) 遺物および遺構層位の逆転現象について

旧白滝3遺跡の発掘現場では、斜面上部では新旧の遺物が地層累重の法則に従って出土するのに対し、斜面下部では古い時代の石器(広郷型細石刃核石器群、 ^{14}C 年代より17,000年前ころと推定される)が新しい石器(小型舟底形石器石器群、旧石器時代終末期の形式を示す)の上位に出土する状況が見られた(第三章、図Ⅲ-44参照)。また、古い年代測定値の遺構(炉跡)(図Ⅲ-2、Cb-7)が、新しい石器群(小型舟底形石器石器群)の上位から発見された(図Ⅲ-44)。

まず、新旧の石器群が逆転する現象は、遺物包含層形成後のソリフラクションが原因と考えられる。図Ⅳ-32に示す概念図のように、斜面上部に露出していた古い石器群を伴う堆積物(図Ⅳ-32のA)が、ソリフラクションによって移動し、斜面下部の新しい地層(石器)を覆うように堆積した(図Ⅳ



図Ⅳ-32 ソリフラクションによって古い石器が新しい石器を覆うイメージ(模式図)

-32のB1)と考えれば矛盾しない。このように、ソリフラクションの結果、層序が反転したり同一時期の堆積物が2層に出現したりする現象は、澤口(1992)などによって報告されており、白滝遺跡でも中村ほか(2003)が記載した。

しかし、古い時代の遺構が、新しい時代の石器の上位にある現象(図Ⅲ-44)については、若干の注意を要する。この現象を合理的にとらえるには、(a)年代測定の誤差によって上位の地層でより古い年代がでてしまった可能性、(b)古い時代の木片や炭化物が再堆積して、新しい遺構の上位に堆積した可能性、(c)石器の形式編年を誤った可能性、(d)古い時代の遺構を含む土塊が原形を保ったままソリフラクションによって移動し、新しい時代の石器包含層の上位に定着した可能性(図Ⅳ-32のB2)、などを考慮しなければならない。まずは、上記(a)～(c)が当てはまらないことを確認することが必要である。(d)についていうと、ソリフラクションが形成する地形(ソリフラクションロープ)の縁辺部では元の堆積構造を保ったまま物質が移動することが既に指摘されている(例えば、澤口1992、曾根ほか1998)ので、旧白滝地域でも同様の現象が起こった可能性は存在する。但し、図Ⅲ-2(Cb-7)に示される長径1mを超える土塊が破壊されずに移動したかどうかについては、さらなる検討を要する。

引用文献

- 勝井義雄・横山 泉・伊藤太一(1979)旭岳, 火山地質・活動の現況および防災対策, 北海道における火山に関する研究報告書, 7, 北海道防災会議, 42p.
- 澤口晋一(1992)北上川上流域における最終氷期後半の化石周水河現象-ソリフラクションロープ, 階状土の形成時期と古環境, 季刊地理学, 44, 18-28.
- 曾根敏雄・白岩孝行・北原智之(1998)大雪山白雲岳における礫質ソリフラクションロープの表面礫の移動, 季刊地理学, 50, 201-207.
- 平川一臣・中村有吾・石川 守(2000)北海道白滝遺跡と周辺地域のテフラ層序と地形環境, 長沼孝・鈴木宏行・坂本尚史・直江康雄(編)『白滝遺跡群Ⅰ』, 財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書, 第140集, pp. 235-249.
- 中村有吾・平川一臣(2000)大雪御鉢平テフラの岩石記載学的特徴, 火山, 45, 281-288.
- 中村有吾(2008)旧白滝地域のテフラ層序と地形環境, 直江康雄(編)『白滝遺跡群Ⅱ』, 財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書, 第261集, pp. 231-239.
- 中村有吾・平川一臣(2000)大雪御鉢平テフラの岩石記載学的特徴, 火山, 45, 281-288.
- 中村有吾・平川一臣・長沼 孝(1999)北海道白滝遺跡と周辺地域のテフラ, 地学雑誌, 108, 616-628.
- 中村有吾・平川一臣・石川 守(2003)テフロクロロジーにもとづく北海道白滝盆地の段丘面編年と化石周水河現象, 北海道地理, 77, 17-25.
- 三浦英樹・佐瀬 隆・細野 衛・苅谷愛彦(2009)第四紀土壌と環境変動:特徴的土層の生成と形成史, 日本第四紀学会編(2009)デジタルブック最新第四紀学(CD-ROMおよび解説集), 日本第四紀学会.
- 奥村晃史(1991)北海道地方の第四紀テフラ研究, 第四紀研究, 30, 379-390.

V まとめ

1 調査結果の概要

旧白滝3遺跡は3,300㎡を調査し、遺構24か所(焼土5か所、炭化木片集中19か所)と石器類1,470,708点・1,074,600.8gを確認した。白滝遺跡群の中でも出土点数は最多、出土重量は5番目に多い。

遺構の分布範囲はA地区19～33ラインにかけてみられ、特にB-Fライン×25～30ラインの320㎡ほどの範囲にまとまって検出されている(図V-2)。同範囲には遺物が高密度に分布し、共伴石器群が確認できた遺構は11か所に及んだ。さらに同範囲は土層の発達が良好で、遺構・遺物は1～2mほどの堆積の中で重層的に検出されている。また、遺構から採取した炭化木片を用いて放射性炭素年代測定を行ったところ旧石器時代の年代幅に入る値が多数認められ、共伴石器群の直接の年代を示すものと考えられる。測定値は大まかに、①6,000年よりも新しいもの(Cb-1～3)、②10,000年強のもの(F-1・2)、③15,000年前後のもの(F-3・4、Cb-7・8・15)、④17,000年前後のもの(Cb-4・5・6・9・13・16)、⑤24,000年より古いもの(Cb-11・12・14・17)、に分けることができる。この内、②は有舌尖頭器石器群、③は服部台型石刃石器群、④は広郷型細石刃核石器群、⑤は白滝I群との共伴が認められている。各遺構の分布、測定年代などの詳細はⅢ章第1・2節、Ⅳ章第4節に記載している。

出土遺物はほぼ全てが旧石器時代に属するものと判断できる(石鏃が1点のみ出土)。地区別の出土状況は、本調査区域のA地区999,468点・852,515.5g、B地区466,109点・186,850.7g、その他排土遺物等を含めると計1,467,397点・1,045,696.3gが出土している。このほか工事立会範囲であるC・D地区の遺物3,311点・28,904.5gを合算すると上記した遺跡全体の出土総数となる。遺跡全体の集計値を元に算出すると、1点当たりの平均重量が0.7g、1㎡当たりの出土数が446点・325.6gとなる。白滝遺跡群の中でも1㎡当たりの出土点数・重量は群を抜いて多いが、遺物1点当たりの平均重量はもっとも小さい値であった(表I-2)。面積に対して非常に高密度で多量の遺物が出土した遺跡と捉えられるが、小型石器や細片が点数的に主体を占めることが理解できる。これはフレイク集中の調査の際、土壌採取と水洗選別による遺物取り上げを採択したことも少なからず影響している。

出土状況については点取り遺物の平面分布や石器内容、接合状況などを基準として65か所の石器ブロックを設定し、さらに接合状況などから区域(石器ブロック群)を設けて扱った(図Ⅲ-6・7)。区域はA地区がC4-14区～CH46-48区の13か所、B地区がDF77・78区の1か所、合計14か所を設定している。

確認された主な石器群と出土区域は、白滝I群(C4-14区・BD18-23区・BD24-26区・EH26区・DH27-29区・BH30-34区・CH35-39区)、川西型石刃石器群(BD18-23区・EH22-25区)、蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群(BD18-23区)、広郷型細石刃核石器群(BD24-26区・BC27-29区・CH35-39区・CH40-43区・CH46-48区)、服部台型石刃石器群(BD18-23区・BC27-29区・DH27-29区)、峠下型細石刃核石器群(BH30-34区)、ホロカ型彫器石器群(C4-14区、DH27-29区)、有舌尖頭器石器群(EH22-25区・BD24-26区・EH26区・DH27-29区・CH35-39区・DF77・78区)、小型舟底形石器群(BD18-23区・EH22-25区・BD24-26区・EH26区・CH35-39区・CH44・45区)がある(表Ⅲ-30～32)。Ⅲ章本文中では石器群を断定しなかった「服部台型もしくは広郷型」の石器群(BC27-29区)は検討の結果広郷型細石刃核石器群に属する可能性が高いと考えられ、上記では広郷型に加えている。長期間に亘り多数の石器製作集団が繰り返し訪れ、継

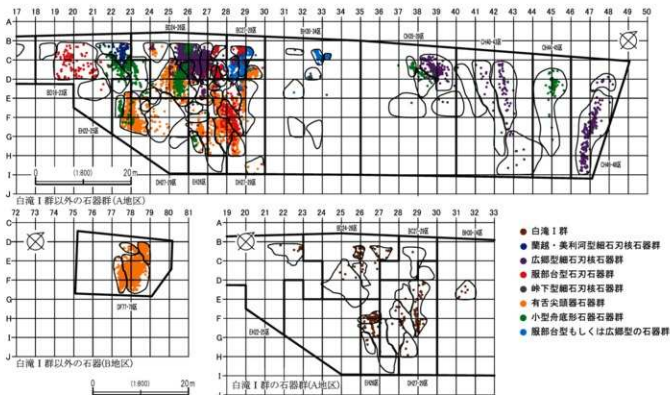
1 調査結果の概要

統的・断統的に遺跡を利用したことが理解される。

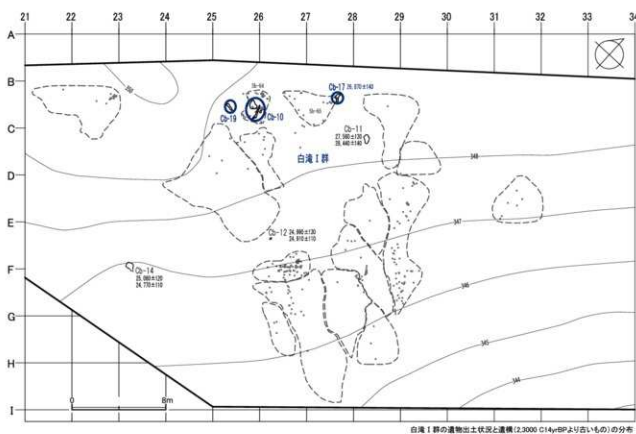
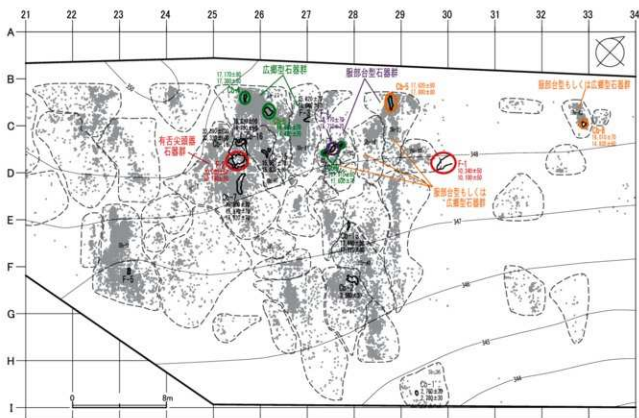
旧白滝3遺跡では母岩別資料339個体、剥離面接合資料2,083個体、折れ面のみ接合資料1,212個体が確認された(表Ⅲ-28)。接合点数は28,235点(剥離面接合25,212点・折れ面接合のみ3,023点)・(点取り遺物25,150点・一括遺物3,085点)で、点取り遺物の総点数67,254点に対し37.4%、遺物総点数1,470,708点に対し4.9%の接合率である。但し旧白滝3遺跡は水洗選別による細片の取り上げ数が多く、これを除外した遺物点数374,822点を分母にすると7.5%となり、白滝遺跡群の他の遺跡と比較しても高い接合率である。また、母岩別資料の点数は29,569点(点取り遺物27,214点・一括遺物2,355点)で、点取り遺物の総点数に対しては40.5%、一括遺物を含めた遺物総点数に対しては2.0%の母岩抽出率である。同様に水洗選別遺物を除外した374,822点を分母とした場合は7.9%となる。

石器群の中で最も良好に母岩別資料が復元されたのは広郷型細石刃核石器群(63母岩、6,607点・179,563.1g)と有舌尖頭器石器群(149母岩、14,532点・195,903.0g)であり、全母岩別資料(29,569点・538,693.5g)に対し、前者は点数比22.3%・重量比33.3%、後者は点数比49.1%・重量比36.4%を占めている。両石器群とも遺跡の広範囲で作業を行い、複数の石器ブロックを形成した様子が認められる。また広郷型細石刃核石器群は5つの区域にブロックを形成しているが、この内3か所(BD24-26区・CH40-43区・CH46-48区)に区域間接合が認められ、これらは同一製作集団によって遺されたものと推測できる。

特徴的な内容には以下の二つの石器群の様相をあげることができる。広郷型細石刃核石器群ではBD24-26区Sb-17・18で特にまとまった石器製作の様子が認められた。25~45cmを超える大型角礫素材の母型・石核を30母岩程度搬入し、石刃剥離から細石刃剥離までの作業を集中的に行っていた。特に細石刃剥離作業はCb-4・6の二つの炉の周辺で行われたと復元できる。有舌尖頭器石器群ではDF77・78区Sb-60~63で特にまとまった石器製作の様子が認められた。大きさ20~25cm程度の原石やこれを素材とした両面調整石器などを74個体程度搬入し、119点以上の尖頭器・両面調整石器の



図V-1 各石器群の分布状況



図V-2 遺構と遺物の分布状況

1 調査結果の概要

製作と73点以上の搬出を行った様子が復元されている。

以下、確認された石器群を単位に内容をまとめていくこととする。

2 白滝I群

(1) 出土区域と出土状況

白滝I群は遺跡全体で417点・7,191.0gが出土しており、石器群が判別できた全石器(28,557点・523,912.6g)に対し点数比1.5%・重量比1.4%で認められる(表Ⅲ-30・31)。遺跡全体に占める割合は極少数である。

出土区域はC4-14区(Sbなし)、BD18-23区(Sb-6)、BD24-26区(Sb-15-18・64・65)、BC27-29区(Sb-25)、EH26区(Sb-29-31)、DH27-29区(Sb-34・35・37-40)、BH30-34区(Sb-45)、CH35-39区(Sb-50)の8区域で、特にまとまった出土はBD24-26区(95点・2,739.3g、点数比22.8%・重量比38.1%)、EH26区(109点・1,798.8g、点数比26.1%・重量比25.0%)、DH27-29区(179点・1,998.7g、点数比42.9%・重量比27.8%)の近接した範囲に認められた(図V-1、表Ⅲ-32)。母岩別資料も主にこの3区域で復元されている。

遺構との共伴が認められたのはBD24-26区Sb-64・65で、Cb-10・17・19に近接して白滝I群が出土している(図V-2)。また、EH26区ではCb-12と3mほどの距離をもって遺物が分布している。

(2) 組成石器

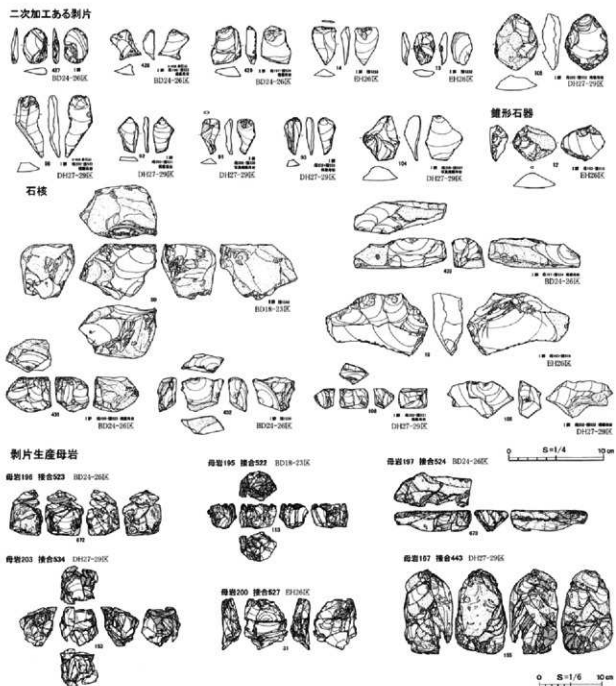
確認された器種には、錐形石器(1点)、二次加工ある剥片(23点)、剥片(268点)、石核(23点)、原石(3点)、礫(2点)がみられる(図V-3、表Ⅲ-31)。錐形石器はEH26区から出土しており、剥片の海部腹面に軽微な調整を加えて錐状部を作出している。二次加工ある剥片は、①微細な剥離が部分的範囲に連続的に認められるもの、②素材片側縁の背腹に平坦剥離が加えられるものがあり、前者①が大多数を占める。また①は背腹面のいずれかに剥離が認められる。石核は①サイコロ状を呈するもの、②棒状原石素材で短軸方向に剥片剥離するもの、③剥片素材で腹面に小型剥離を加えるものがみられる。原石はBD24-26区に拳大の角礫や針状の原石が搬入されている。

(3) 石器製作技術

白滝I群の母岩別資料は13個体が復元され(母岩163・167・195~197・200~207)、剥離技術類型は全て5類(剥片生産)であった。類型を細分すると、5D i類(頻繁な90度打面転移を繰り返し残核がサイコロ状となるもの)が9個体、5B i類(平坦で広い面を作業面に設定するもの)が3個体で、主体的な技術と認められる。5D類はBD24-26区やDH27-29区、5B類はEH26区で主に復元されているが、剥片素材の石核などは5B類の残核と判断でき、各区域に出土している。いずれも白滝I a群(鈴木・直江 2004)に属すると考えられる。また、素材原石の選択については小型の転離を主体としながらも角礫が3割程度認められる。

(4) 石材消費形態

使用石材は黒曜石が99%と大多数を占め、黒曜石の中では黒曜石1が7割程度に及ぶ(表Ⅲ-30)。石材の搬入は主に10cm前後の原石を素材とした小型石核の状態と認められ、遺跡内で剥片剥離を行っている。搬入母岩は13個体だが非接合の石核も12点がみられ、20個体程度が上記の形態で遺跡内に持ち込まれている。また母岩別資料では剥片を素材として剥片剥離が行われるものがある。剥離



図V-3 白滝I群の石器

作業の後、遺跡内に残核が遺棄されたものは12点（核素材5点、剥片素材7点）、欠落し搬出が推測されるものは11点（核素材7点、剥片素材4点）がみられ、半数程度が搬出の対象となったと考えられる。但し、個々のブロックに持ち込まれた石核の数量は平均で2～3個体となり小規模な製作活動と捉えられる。

小型石核を少数個体搬入する作業形態は旧白滝地区の他の遺跡（旧白滝5遺跡・旧白滝16遺跡）でも認められ、同地区の白滝I群の様相を示すものかもしれない。上白滝地区上白滝8遺跡でみられた大型転礫を複数搬入し集中的な剥片生産作業を行う状況とは対照的である。

本石器群では9点に対し産地分析を行い、赤石山6点、靱加沢・あじさい滝2点、ケシヨマップ第

2 白滝I群

2群1点の結果が得られている。主体となる白滝産のものは母岩別資料から抽出した資料で角礫素材と転礫素材がみられ、原石採取内容は多様とみられる。またケシヨマップ産のものは石核で搬入され遺跡内での作業は復元されていない。

(5) 年代

共存遺構の内年代測定を行ったのはCb-17で、 $26,870 \pm 140$ yrBP (31,099-30,887 calBP) の測定値を得ている。また、遺物分布に比較的接近して検出されたCb-12でも $24,910 \pm 110$ ~ $24,990 \pm 130$ yrBP (28,764-29,195calBP) の近い年代値が得られた。

3 蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群

(1) 出土区域と出土状況

蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群は遺跡全体で295点・4,625.5gが出土しており、石器群が判別できた全石器 (28,557点・523,912.6g) に対し、点数比1.0%・重量比0.9%で認められる。本石器群は学史的にそれぞれ分離して捉えられているが、本遺跡では石刃技法に蘭越型細石刃核石器群の特徴が色濃く、細石刃核やその母型製作に美利河型細石刃核石器群の特徴が見て取れることから、便宜的に両者をまとめた石器群とした。なお、両石器群は柏台1遺跡やオバルベツ2遺跡などで遺跡内の別地点で出土しており、年代的にも近く位置づけられている。

石材は黒曜石が230点で大多数を占め、この内黒曜石4が161点あり7割程度に及ぶ。その他に頁岩が多く見られ65点・50gが出土している。

出土区域はBD18-23区のみで認められ、特にSb-6・7からまともに出土している。母岩別資料も主にこの区域で復元されている。近接する範囲から遺構は検出されていない。

(2) 組成石器

確認された器種には、細石刃 (36点)、細石刃核 (3点)、削片 (11点)、搔器 (6点)、彫器 (2点)、二次加工ある剥片 (3点)、石刃 (9点)、剥片 (209点) がみられる (表Ⅲ-31、図V-4)。以下、特徴的石器に関して個別に記載する。

① 細石刃核

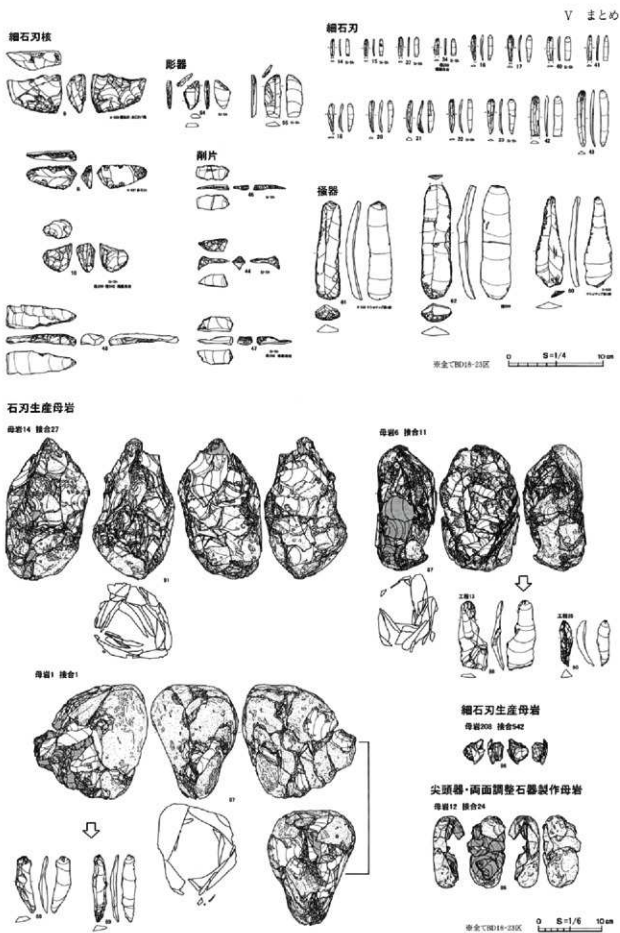
大きく2種類が確認されている。① 両面加工により断面が楔形の母型を作成するもの、② 石刃を素材として半両面加工を加えるものである。さらに①では母型が横長となる美利河型 (図V-4-9) と、縦長の母型が想定される蘭越型の可能性のあるものが存在する (図V-4-10)。なお前者には粗い細石刃剥離痕が残る、後者は頁岩製であった。②は峠下型であり、長さ/高さが2.1、基部長/高さが1.6でいずれも峠下型1類の基準 (山田2006) に合致するが、高さ/幅は2.2で2類に含まれる。細石刃核の打面部となる上縁の加工が軽微な点や、最終的に彫器に転用されており、器種の未分化という点では峠下型1類の範疇に入ると考えられる。

② 細石刃核削片

一次削片を観察すると細石刃核と同様に断面三角形のものではなく、いずれも上面が平坦に加工されたものである。

③ 彫器

石刃素材で彫刀面傾斜角が腹面側に傾く左斜刃のものが出土している。彫刀面打面は調整面による



図V-4 蘭越・美利河型細石刀核石器群の石器

3 蘭越型ないし美利河型細石刃核石器群

ものと細かな彫刀面によるものがみられる。また、側縁調整も変異が大きく、無調整のものと急角度加工により端部が収斂する形状のものが存在する。

④ 播 器

石刃素材で側縁調整が部分的な加工によるものが主体で、全体的に細長の形状である。

(3) 石器製作技術

細石刃剥離技術、石刃剥離技術に関する特徴を述べる。

① 細石刃剥離技術

細石刃剥離に関する母岩は1個体(母岩208)が復元されている。また、両面調整石器を製作する母岩の内、2個体(母岩6・14)が細石刃核の母型の可能性がある。

細石刃剥離に関する母岩208は頁岩製で、遺跡内では打面作出後の工程が確認できた。側面調整と下縁からの調整がなされ、その後細石刃剥離が行われている。細石刃核は片側面が平坦であることから、剥片素材の可能性がある。

母型を作成した母岩6・14はいずれも片側縁のみ鋭く両面加工し、反対側縁は急角度の縁辺となる両面調整石器を製作しているもので、断面形が楔形に近い形状を呈している。石器群の内容からすれば、美利河型細石刃核の母型を製作した可能性を考えて良いと思われる。

② 石刃剥離技術

石刃剥離に関する母岩は1個体(母岩1)が復元されている。背後を中心として石核整形されるものである。正面に明瞭な稜線は作出されず、比較的平坦な面が広がり、正面と両側面との角の部分を利用して石刃剥離が開始されている。

(4) 石材消費形態

母岩別資料を見ると、20cm前後の原石を主体として10cm前後の原石も利用されている。いずれも原石の状態で搬入されており、転礫ないし亜角礫が用いられている。剥離作業の後、遺跡内に残核が遺棄されたものは核素材の石刃核1点のみで、その他はいずれも欠落し、遺跡外に搬出されたと考えられる。頁岩を石材とした細石刃核関連の母岩は、ある程度剥離の進行した状態で遺跡内に搬入され、残核が遺跡内に遺棄されている。

蘭越型細石刃核石器群は旧白滝15遺跡でも出土しているが、本遺跡の搬入形態とは対照的に、石核の状態でも遺跡内に搬入されたものが主体を占めている。

(5) 年 代

近接して検出された遺構はない。現在提示されている主要な編年案では後期旧石器時代の後半期はじめに位置付けられ、約20,000yrBP前後の年代とされている(寺崎 2006、山田 2006)。

4 広郷型細石刃核石器群

(1) 出土区域と出土状況

広郷型細石刃核石器群は遺跡全体で6,945点・190,396.7gが出土しており、石器群が判別された全石器(28,557点・523,912.6g)に対し、点数比24.3%・重量比36.3%で認められる。重量比では3分の1以上を占めている(表Ⅲ-30・31)。

主な出土区域はBD24-26区 (Sb-16-18)、BC27-29区 (Sb-22・23)、CH35-39区 (Sb-51)、CH40-43区 (Sb-53-56)、CH46-48区 (Sb-58・59) の5区域で、特にまとまった出土はBD24-26区 (5,955点・173,818.6g、点数比85.7%・重量比91.3%) とCH35-39区 (546点・4,993.2g、点数比7.9%・重量比2.6%) で認められた (図V-1、表Ⅲ-32)。また、BC27-29区 (Sb-22・23) の資料は、Ⅲ章において「服部台型もしくは広郷型」の石器群として石器群を断定しないまま扱ったが、検討の結果広郷型の可能性が最も高いと考えられた。このため本章では石刃製作技術や石材消費形態の分析について、これら資料を含めて観察を行った。BC27-29区の「服部台型もしくは広郷型」の石器群を含めると、石器群が判別された全石器に対し点数比34.0%・重量比49.4%に及ぶこととなる。

遺構との伴いが認められたのは、①BD24-26区Sb-17のCb-4・6、②BC27-29区Sb-22・23のCb-9、の2か所で、特にCb-4・6の遺構間2m弱の範囲には被熱石器がまとめて分布している (図V-2)。

(2) 組成石器

本石器群で組成される器種には、尖頭器 (6点)、両面調整石器 (2点)、細石刃 (163点)、細石刃核 (46点)、削片 (112点)、彫器 (103点)、搔器 (19点)、削器 (21点)、錐形石器 (6点)、二次加工ある剥片 (178点)、石刃 (1,723点)、縦長剥片 (303点)、石刃核 (28点)、石核 (28点)、剥片 (4,197点)、赤色顔料原材 (6点)、軽石 (4点) がある (図V-5-7、表Ⅲ-31)。細石刃については作業の都合上石器群を判別していないものが多数あり上記の点数に留まっているが、BD24-26区、CH35-39区、CH46-48区出土の大多数は当該石器群に属すると考えることができるだろう。

① 尖頭器・両面調整石器

尖頭器は長さ10cm前後の小型品がCH40-43区からまとめて出土している。またBC27-29区からも「服部台型もしくは広郷型」の石器群に伴って小型柳葉形の尖頭器が出土している。両面調整石器は平面楕円形で末端ヘラ状を呈するもの製のものがみられるが、同様の石器は千歳市アンカリト-7遺跡SB-1にも出土が認められ珪化岩が使用されている。

② 細石刃・細石刃核

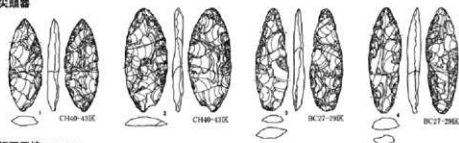
細石刃核は広郷型が出土し、細石刃は細身・直線的・断面甲高な同技法の特徴的な形態を呈するものが大多数を占める。完形細石刃の大きさは長さ5-9cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm程度が主体的に認められる。但し細石刃は折損品が大多数であり、機能時の石器長は折損した長さ2-4cmと推測される。

【素材】 細石刃核の素材は大多数に石刃もしくは縦長剥片が使用され、素材打面側と末端側で厚さに差がある場合は厚い方を細石刃核の打面に設定している。これにより作業面正面観は長身の逆三角形となり、円錐形や楔形細石刃核と同様に末端部が収斂する状況が生まれている。素材の厚さは1.0-1.5cm以下が主体で、一部1.7cm前後の厚いものも認められる。また厚さ0.7cmほどの薄手も一定量みられた。

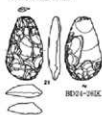
【作業面と打面】 細石刃核は打面が左側面上端、作業面が右側面に設定されるものが大多数である。打面には楕状剥離打面と調整剥離面打面 (腹面から背面側に作出する縁辺調整) があり、ほぼ等量が認められる。いずれも細石刃剥離に際して作業面側からの薄く細かい打面調整剥離を受けることが多い。また打面は背面側に傾くものと腹面とほぼ直交するものがあり、前者の場合作業面が腹面側に傾き、後者の場合背腹均等に展開している。背面側に傾く打面については、腹面との角度が55-70度で作出されるものが主体で、楕状剥離や縁辺調整など加工方法が異なる場合でも同様の角度で形成され

4 広郷型細石刃核石器群

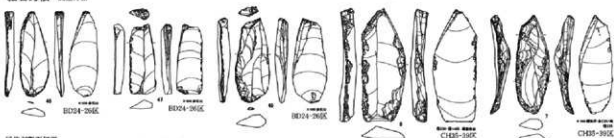
尖頭器



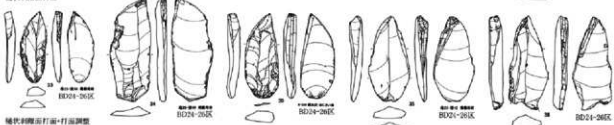
両面調整石器



細石刃核 調整打石



細石調整面打石



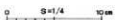
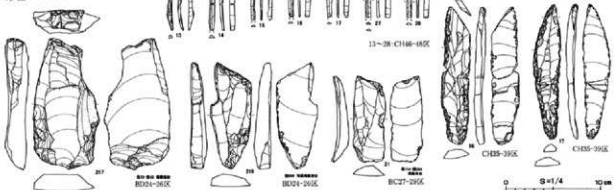
細石調整面打石+打面調整



細石刃



彫器 調整打石



図V-5 広郷型細石刃核石器群の石器(1)

ている。

打面と作業面のなす角度は、ほとんどが40～60度の間で計測され、70度を超えるものが若干みられた。石器長軸と作業面のなす角度は20～30度に開くものと平行関係のものがあり、前者が多く認められた。この石器長軸との角度は細石刃剥離作業が進行しても一定に保持されることがCH35-39区母岩234・236などから確認されている。作業面は長さ5～9cmで、幅は素材の厚さに規定され1.6cm以下となっており、1cm前後が主体である。また頭部調整は普遍的な技術として認められる。

【**微細剥離痕や摩耗**】細石刃核には連続的な微細剥離や縁辺の摩耗が観察された。主に観察できた部位は①桶状剥離打面、②桶状剥離作業面、③素材縁辺で、①・②は打面・作業面を形成する桶状剥離面の背面側、腹面側、桶状剥離面内の縁辺に微細剥離痕等が生じている。掲載資料では、打面に観察されるものがBD24-26区の32・34・38・39・41・42とCH46-48区の2～4、作業面に観察されるものがBD24-26区の32・33・39・42・50とCH46-48区の2である。同様の痕跡は彫器にも認められ、彫器と同じ原因によって生じた「使用痕」と推測される。擦痕が認められたのはBD24-26区の33のみで、桶状剥離縁辺から腹面側の広範囲に発達し摩耗も顕著であった。③は背部側（左側縁側）に主に認められ、顕著な摩耗が観察できる。掲載資料ではBD24-26区の30-32・34・37、CH35-39の7・8、CH46-48区の3・7-9が該当し、「使用痕」として生じたことが推測される。但し③の中でも特徴的なものとして、作業面の下位と対向する逆側縁の縁辺に微細剥離と摩耗が観察できる資料があり、同部位に平坦剥離が加えられる場合もある。掲載資料ではBD24-26区の30・32・39・46、CH35-39区の7・8、CH46-48区の3・6・9が該当する。これらは細石刃剥離作業時に生じたことが考えられ、固定・保持の方法を示す可能性がある。

③ 彫 器

彫器は交叉型と側型が主体である。交叉型はA.単条同士交叉と、B.複数条×単条もしくは複数条同士が交叉するものがみられ、後者は石器長軸に対し片側縁が斜交し逆側縁が概ね平行する、細石刃核的なものが多くみられた。側型のものも調整剥離打面のもので折れ面打面のもので主体で、1点ウートラバッセした彫刀面末端部を打面として逆側縁に彫刀面を作出するものもみられた。また、細石刃核を母材に彫器に転用した個体も少数認められる。このほか特徴的な内容として、めのう製の小型彫器がBD24-26区などからまともに出土している。

④ 搔 器

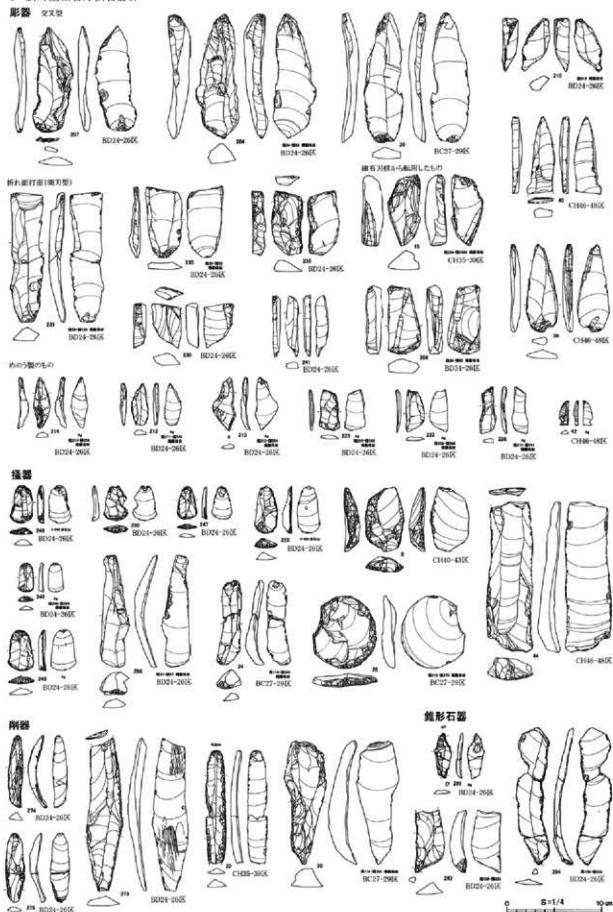
搔器は小石刃や剥片を素材とした長さ5cm以下の短寸のものがまともな状態で認められ、めのう製が多く含まれていた。BD24-26区でまともに出土している。これら短寸搔器および中型の搔器には、刃部調整剥離の末端にパンチ痕が生じたものが4点ほど観察され、接合資料も含まれていた。同様の痕跡はこれまで有舌尖頭器石器群及び怒路子型細石刃核石器群でのみ類例が報告されているが（高倉2004、鈴木2006・2007、坂本2012）、本報告で新たに広郷型細石刃核石器群でも確認したことになった。

⑤ 二次加工ある剥片

二次加工ある剥片はこれまでの白滝遺跡群の整理から分類範囲を広げており、本遺跡ではA～C類に細分している（I章4節5項「遺構・遺物の分類」）。A類は石刃や剥片に敲打・擦痕・潰れ・摩耗などの使用痕がみられるもの、C類は主に石刃・縦長剥片の端部に調整加工や剥離がみられるもので、この両者が多く出土している。特にC類は本石器群で特有に組成される器種と考えられる。

【**A類**】石器群全体で38個程度が認められた。主に石刃や石刃技法の過程で産出した剥片を素材とする。①縁辺が顕著に摩耗するもの、②集中的な敲打痕がみられるもの、③腹面などの平坦面に擦

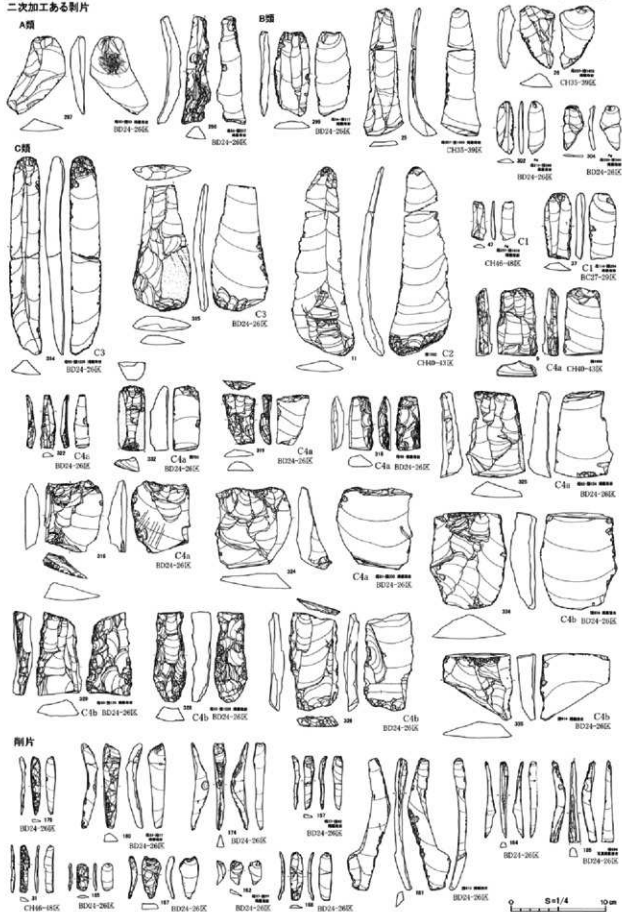
4 広郷型細石刃核石器群



図V-6 広郷型細石刃核石器群の石器(2)

二次加工ある剥片

V まとめ



図V-7 広郷型細石刃核石器群の石器(3)

痕がみられるものがあり、①～③が複合する個体も認められる。数量は①が最も多くみられ、細石刃核など他器種の縁辺にも同様の痕跡を認めることができる。①の擦痕はBD24・26区母岩44やCH35-39区母岩232に接合する資料に少数みられ、素材縁辺と概ね直交方向に生じている。しかし大多数のものは擦痕を認めることができなかった。②は1～2cmほどの範囲にまとまることが多く、正裏の対向する部位に分布する資料もみられた(BD24・26区567)。③はもっぱら4×2cm程の範囲にまとまり、末端弧状の擦痕から往復運動によって生じたと観察できる(BD24・26区273・293など)。擦痕は細く鮮明で、硬質の突ったものや細かな凹凸のあるものと接触したことが推測される。削器など他器種にも同様の痕跡が生じたものがある(BD24・26区273)。また②・③の分布範囲が重複する例もみられ(BD24・26区297)、敲く・擦るが一連の作業過程で行われた可能性が指摘できる。

【**C類**】石器群全体で76個体程度が認められた。C類は上述のように主に石刃・縦長剥片の端部に調整加工や剥離がみられるもので、近年北見市中本遺跡や留辺藁町元町2遺跡で注目された「のみ形石器」(鶴丸 2009)と同種の石器である。同石器が初めて報告されたのは1958年北海道学芸大学考古学研究会発行の連絡紙「ウタリ」とみられ、君 尹彦によって置戸町安住287番地(現 置戸安住遺跡)出土の資料を「置戸形GRAVER」として紹介している(君 1958)。このほかの類例としては上川町日東遺跡の母岩別資料5に認めることができた(長沼・佐藤ほか 2000)。本遺跡では「二次加工ある剥片」として分類し、剥離内容によって4つに細分した(1章4節5項「遺構・遺物の分類」)。各類型の数量はC1類(背面側への調整加工)が20個体、C2類(腹面側への調整加工)が18個体、C3類(両面加工で背面への調整剥離が長幅比1.5未満を主体とするもの)が10個体、C4類(縦長志向剥離がみられるもの)が33個体である。この内C4類は管見の限り、他石器群には類例のない特殊な形態の石器と考えられる。C4類は末端部に設けられた打面の内容により、更にa類:調整打面、b類:末端平坦面もしくは折れ面の打面、c類:裏面打面、に細分した。数量はC4 a類15個体、C4 b類19個体、C4 c類1個体で、前二者が主体を占める。なお、上記集計は一個体中に複数の類型が認められる場合それぞれを勘定するため合計数が実個体数を上回っている。本遺跡のC類石器は多様性を有し個々の類型で一定量の出土がみられることが分かった。またC4類は特に多数を占め、石刃を素材とした器種の中でも主要な石器として組成されたことが考えられる。

「のみ形石器」とした鶴丸の論考では、形態的特徴からこれらを分類して形態的多様性を有する器種と捉え、端部に形成されたのみ状調整面に使用痕が観察されることからこの部位を機能させた結論している。本報告では時間的制約もあり細かな属性分析を行うことができなかった。そのため、C類と区分された中で1～4類の技術形態的な差異がどのような関係性や意味を持つかを検討する段階には至らなかった。これについては今回得られた情報を整理したうえで今後取り組むべき課題と考えている。

本遺跡のC4類については末端調整面の観察の結果、使用痕を観察することができず、対して背面から剥離された縦長剥片に微細剥離が生じた例を少数ながら認めた。また、打面と背面剥離面との角度は多様で90度近い急角度の折れ面をそのまま使用した資料も多数あり、刃部として機能したことを積極的に肯定することは難しく感じられた。Ⅲ章でも述べたように、石刃技法に類する打面調整・頭部調整の技術が用いられることや、ウートラパッセを生じるようなある程度の厚みを持った一定の大きさの剥片(4～10cmで6cm以下主体)が剥離されていることなどから、剥片生産を目的に行われた可能性が高いと現段階では考えている。但しC1～3類についてはその限りではなく、のみ形石器(末端調整面を機能部とした石器)としての妥当性と、C4類の母型的な石器が含まれる可能性の両者を検討していく必要があるだろう。

(3) 石器製作技術

① 全体の様相

本石器群で確認された母岩別資料は63個体あり、①尖頭器・両面調整石器製作(1A i類: 6個体)、②細石刃生産(2A i類: 7個体)、③石刃生産(全体48個体、4C類: 14個体、4D類: 33個体、4F類: 1個体)、④剥片生産(5類: 9個体)が認められる。このほか広郷型細石刃核石器群の可能性が高いと考えられる「服部台型もしくは広郷型」の石器群に①が3個体、③が23個体(4A類: 4個体、4A・C類: 6個体、4C類: 16個体)みられた。これらを含めた全体の中で石刃生産が7割以上を占め、主体的な石器製作作業と捉えられる。石刃技法は打面調整・頭部調整を加えるもの(4C類)と、打面調整・頭部調整に頭部縁辺の擦りを加えるもの(4D類)が主体を占めている。以下、石刃剥離技術について詳述していく。

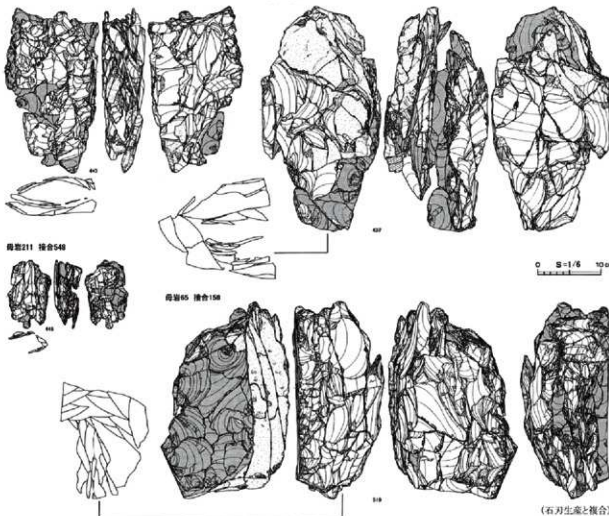
② 石刃剥離技術

石刃技法母岩は各区域から出土がみられるが、上記したように区域ごとの作業内容に差異が認められる。但し、①背部に平坦面もしくは背稜を設置する、②横断面が五角形もしくは逆台形、③打面

BD24-26区の尖頭器・両面調整石器製作母岩

母岩82 接合201+202

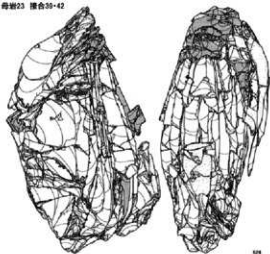
母岩67 接合142



図V-8 広郷型細石刃核石器群の石器(4)

4 広郷型細石刃核石器群
BD24-26区の石刃生産母岩
母型A類

母型23 標合30-42



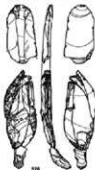
母型A (標材 工型7.0L)



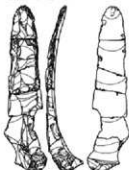
母型B



母型C (標材 工型20.0L)



母型D (標材 工型20.0L)



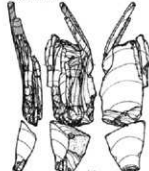
母型24 標合48



母型B (標材 工型8.0L)



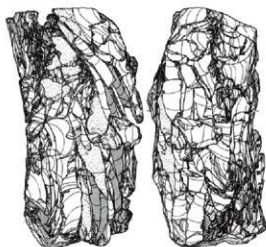
母型A (標材 工型10.0L)



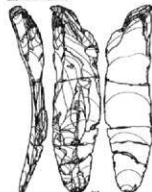
母型E (標材 工型10.0L)



母型61 標合142



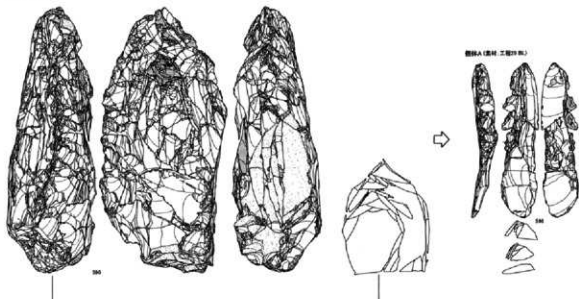
母型A (標材 工型10.0L)



0 5-1/8 10 cm

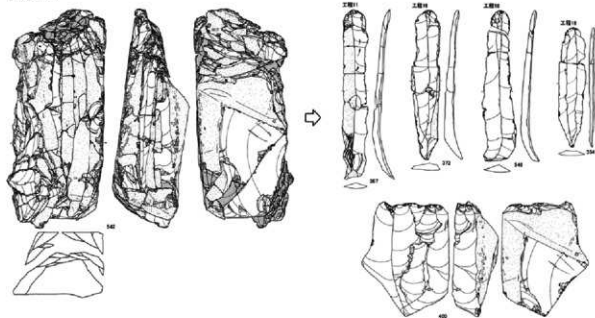
図V-9 広郷型細石刃核石器群の石器(5)

標本50 組合125

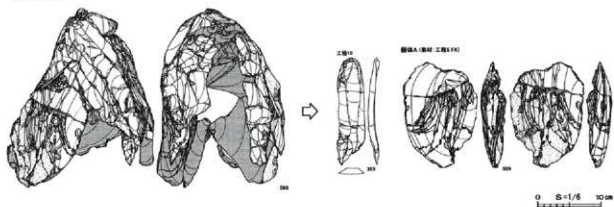


母型C類

標本25 組合44



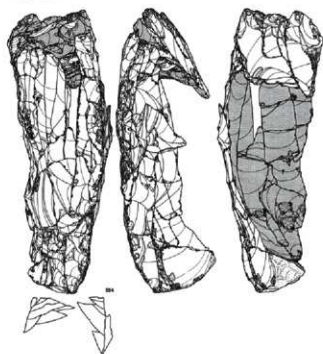
標本43 組合99



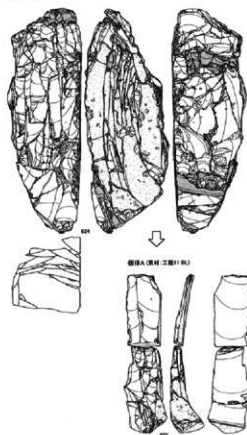
図V-10 広郷型細石刃核石器群の石器(6)

4 広郷型細石刃核石器群

母型31 種合37

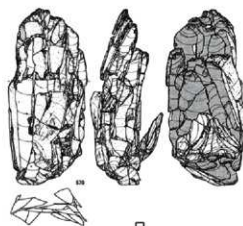


母型93 種合134

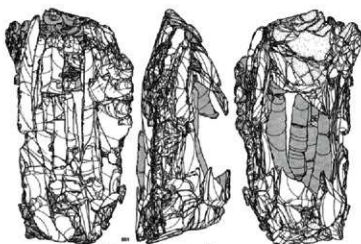


母型0類

母型34 種合95



母型55 種合129



種別A (種材: 工型1) (B)



種別B (種材: 工型2) (B)



種別C (種材: 工型3) (B)



0 1/6 10cm

図V-11 広郷型細石刃核石器群の石器(7)

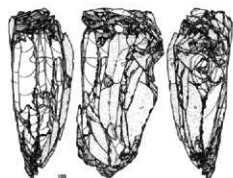


図V-12 広郷型細石刃核石器群の石器(8)

4 広郷型細石刃核石器群

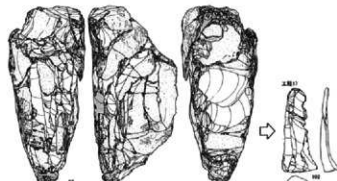
母型B類

発掘107 種合254



母型C類

発掘120 種合279



母型D類

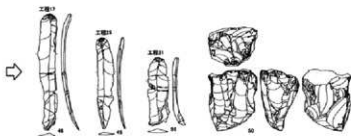
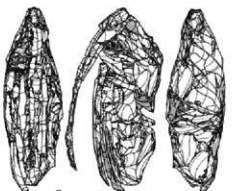
発掘118 種合277



CH35-39区の石刃生産母岩

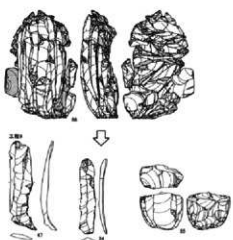
母型A類

発掘227 種合1403

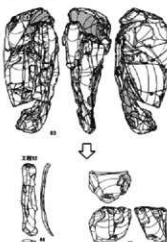


母型F類

発掘233 種合1395



母型232 種合1394



細石刃生産母岩

発掘234 種合1388



発掘236 種合1400



0 5 1/5 10mm

図V-13 広郷型細石刃核石器群の石器(9)

調整・頭部調整が普遍的で頭部縁辺への擦りが特徴的に加えられる、などの共通した技術的要素も認められる。以下、石刃剥離技術について区域ごとに述べていくこととする。

【BD24-26区】

A. 素材原石形状

素材原石形状が判別できた母岩は33個体で、角礫29個体、亜角礫3個体、転礫1個体がみられた。また原石の大きさは30～45cm以上の大型のものと10cm以下の小型があり、後者が亜角礫となっている。大多數の母岩が30cm以上の大型角礫原石を素材としている。

B. 母型形状

本区域で母型形状が把握できた個体は24個体である。搬入形態は粗割原石・粗割母型・母型とあるが、後二者は遺跡内で母型形成作業を再開し仕上げを行っている。母型形状は図V-14のように区分が可能で、この内A類（背部平坦・正面中央に稜線）が12個体（母岩23・26・41・50・53・54・58・59・61・64・66・83）、C類（背部平坦・正面左右に稜線）が9個体（母岩24・25・27・31・36・44・45・63・65）、D類（背稜有・正面左右に稜線）が2個体（母岩34・55）、E類（横断面凸レンズ状で両側面に稜線）が1個体（母岩42）みられた。また全体形状は不明だが背部が平坦であるF類が3個体（母岩30・75・84）ある。いずれの形態も正面側に設置された稜線が作業面の剥離起点となる部位で、正面中央（A類）と左右両側縁（C・D類）に位置するものが等量ずつみられ主体を占めている。また背部に平坦面を配置するもの（A・C・E・F類）が22個体に及び、母型の定型的な形状と認められる。

C. 石刃剥離過程の技術

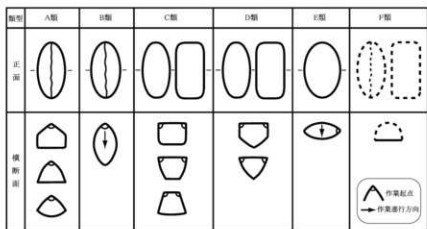
母岩別資料を概観して以下のような調整技術を認めることができた。

a) **打面調整・頭部調整** 打面調整は頻繁に加えられる一般的な技術として認められ、小・中・大型に区分することができる。小型は幅0.5～1cm以下の薄く細かな調整剥離で、個々の石刃剥離に際して加えられた打面形状を整えるための加工と観察できる。また打面を山形に加工しその頂部を擦る技術が認められるが、山形打面自体が数量的には多くなく散見される程度である。中型は幅3×厚0.5cm程度の剥離で、主に作業面と打面の角度を発達したバルブによって調整する加工と考えられる。大型は幅5～8×厚1～2cmの厚手で末端が肥大する剥離で、小・中型で生じたヒンジの除去、および中型剥離によって消費され直角化した作業面と打面（上面）との角度を再び鋭角に傾斜させる打面再生と考えられる。中型剥離が頻繁に繰り返されると打面作出剥離等により設定された当初の打面の傾斜が消費され水平化する。このため背部に向かって傾斜する末端肥大型の剥離を加えて以降の打面調整剥離と石刃剥離に適した傾斜角を形成している（図V-15）。また母岩55では打面の背部側を横方向に厚手に剥離し、打面を傾斜化させる技術が認められる。

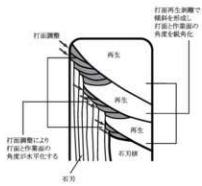
頭部調整は一般的な技術として認められ、剥離を予定する頭部の部分的範囲を外湾させるように整形している。擦痕は、打面が山形に突出する様形成される場合はその頂部を擦るが、緩やかな外湾形の場合は縁辺をやや広く擦っている。また擦りは作業面形成段階で剥離される縦長剥片や不整形な石刃（非目的的石刃）にも認めることができ、作業面での剥離過程で広く全般的に用いられている。石刃打面の大きさは幅0.5～2×厚0.1～0.7cmで計測され、主に幅1cm以下×厚0.3cm以下が大型石刃（長25cm前後）の打面の大きさとして捉えられる。本石器群の石刃は長大であるが押し並べて小型打面で剥離されている。また石刃の剥離開始部は概してリップ状を呈し、バルブの発達は弱いもしくはほとんどみられないものが主体を占める。

b) **作業面への整形剥離** 各母岩とも石刃剥離に先行して、作業面調整の剥離を盛んに行っている。

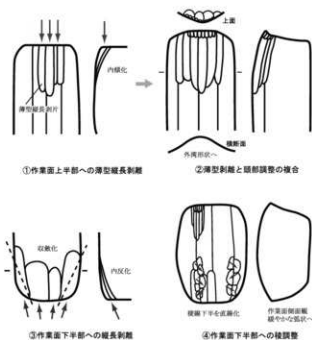
4 広郷型細石刃核石器群



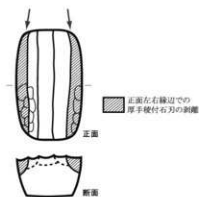
図V-14 母型形状の類型



図V-15 打面調整と再生の工程(縦断面)



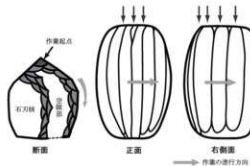
図V-16 作業面の整形技術



図V-17 厚手掬石刃剥離による石核整形

表V-1 広郷型石器群黒曜石製石刃技法母岩の区域別搬入・搬出状況

石刃技法母岩数	区域					
	CH02-206X	CH02-206X	CH35-384X	CH40-434X	CH46-484X	
内層	29	17	2	1	3	
中層	3				2	
不明	1	3				
搬入時母岩の大きさ						
30cm以上	25	3		1		
25cm以上	7	5	1			
20cm以上	1	4	1		2	
15cm以上	1	3	2			
15cm未満	2	1				
不明	3	1				
母型形状						
A型	12	6	2			
B型	9	2				
C型	9	3				
D型	2	2				
E型	1					
F型	3	1				
不明	3			1	3	
搬入形態						
原石	2	1				
厚手掬石	2	3				
厚手掬石型	2	6				
母岩	21	3	1		1	
石核	11	6	3	1	2	
存	20	15	4	0	1	
石核の有無						
無	14	3	0	1	2	
搬出石刃の大きさ						
サイズ1	長:20-25 幅:2-4 厚:1-2cm	長:15-20 幅:2-3 厚:1-1.5cm	長:20 幅:2.5-3 厚:0.5cm	-	-	
サイズ2	-	長:10-15 幅:2-4 厚:0.5-1.5cm	長:15-17 幅:2-4 厚:0.5cm	-	-	
サイズ3	-	-	長:10 幅:2 厚:0.5cm	-	-	
目的石刃の大きさ	長:15-35 幅:3-8 厚:0.5-2.5cm	長:10-30 幅:2-6 厚:0.5-1.5cm	長:10-20 幅:2-3 厚:0.4-1cm	長:30 幅:5-7 厚:1.5-2.5cm	長:15-30 幅:4-5 厚:1-1.5cm	



図V-18 作業面の90度転移

大まかにみて、①作業面上半部への薄型縦長剥離、②作業面下半部へのやや厚手縦長剥離、③作業面下半部への稜調整剥離、の三つがある(図V-16)。

①は大型石刃の剥離に先行して行われ、主に作業面上部を緩やかに内傾させ、予定剥離石刃の中軸稜線を中心に横断面が外湾するよう整形している。また①の剥離に重ねて頭部調整が加えられ頭部形状を整えている。②は下設打面からの剥離で、石刃剥離に相前後して頻繁に行われている。主に作業面下部を内反させるためと捉えられ、同時に石核下半を収斂させている。収斂形状への加工は横方向からの剥離を伴う例もあり、随時整形が進められている。①と②の作業面整形により作業面側面観は緩やかな弧状を呈することとなり、石刃剥離のステップやヒンジを予防し剥離が石核末端まで到達するように整形したと推測される。また、薄型縦長剥離と打面調整によって剥離角度を一定に調整する効果も担ったと考えられる。③は作業過程で随時加えられており、作業面のなかでも特に下半部の稜線形状が重視され補正を受けたと観察できる。稜線は直線的で内反・収斂するように整形されている。

e) 正面左右縁辺での厚手稜付石刃の剥離 大型石刃の剥離が進行して作業面が広く平坦化した段階で行われる技術で、母岩58・66・81などに認められた。以下のような内容が観察できる(図V-17)。

①作業面の左右縁辺に稜調整を加えてここから分厚い稜付石刃を剥離する。②石刃は正面の平坦な作業面に対し急角度で交わるように剥離され、石核横断面を多角形させている。③これにより形成された剥離稜線部を次作業の起点として、やや厚手・狭長の石刃剥離が再開される。

平坦化した作業面に対処する技術とみられ、石刃の幅広・平坦化を防いで一定形状の石刃が剥離されるよう調整したものと観察できる。上記のような正面左右側線を使用する例のほか、側面に厚手の石刃剥離を行って作業起点となる稜線を形成する例(母岩66)もみられる。

d) 作業面の90度転移 石刃剥離が開始されてから早い段階で作業面が90度転移される例(母岩23・42・50・64)がみられる。母型形状A・D類の個体で小口面の突出する稜線から剥離を開始するものが該当している。小口面での数回の石刃剥離を経た後、作業を徐々に広い平坦側面へと展開させて母型剥離面や自然面の除去を進行し、側面側に主作業面を形成した後は幅4cmを超える長大な石刃剥離段階に移行している。作業面転移後の工程で剥離された石刃に多くの欠落が生じており、目的的な石刃剥離が行われたと解釈できる。①小口面稜線を作業起点とし、②90度の作業面転移(展開)によって広い主作業面を確保し、③目的的石刃剥離へと連続する、計画的な工程が看取できる(図V-18)。

D. 目的的石刃の大きさ

石刃は長15～35×幅3～8×厚0.5～2.5cmの大型が主体で、搬出されたと考えられる欠落石刃のサイズは長20～35×幅3～6×厚1～2cmと観察できる(表V-1)。細石刃核の素材となる大きさに対応する石刃が主に生産・搬出されている。

【BC27-29区】

A. 素材原石形状

素材原石形状が判別できた母岩は20個体で、角礫17個体、転礫3個体がみられた。また原石の大きさは25～30cm強のやや大型のものと20cm以下の中・小型があり、後者が転礫となっている。大多数の母岩が30cm程度の角礫原石を素材としている。

B. 母型形状

本区域で母型形状が把握できた母岩は13個体であった。搬入形態は粗制原石・粗制母型が主で、母型の加工は粗く簡略的で角礫稜線や平滑面などの原石形状が利用されている。母型形状は図V-14の内の概ね四タイプに区分が可能で、A類(背部平坦・正面中央に稜線)が6個体(母岩110・113・114・116・117・122)、B類(背稜有・正面中央に稜線)が2個体(母岩47・107)、C類(背部平坦・

正面左右に稜線)が3個体(母岩108・120・122)、D類(背稜有・正面左右に稜線)が2個体(母岩118・119)、みられた。このほか全体形状は不明だが背部が平坦であるF類が1個体(母岩123)ある。小口面正面から作業を開始するA・B類(8個体)と、正面左右両側縁から作業を開始するC・D類(5個体)が大きな隔差なくみられ、また背部を平坦に加工するA・C類が9個体と多数を占めている。BD24-26区と同様の傾向が認められる。

C. 石刃剥離過程の技術

母岩別資料を概観して以下のような調整技術を認めることができた。

a) **打面調整・頭部調整** 打面調整は頻繁に加えられる普遍的な技術として認められるが、①同一個体の中で打面再生を契機に平坦断面と調整打面が入れ替わる、②大型の打面調整剥離面から剥離されるため実質的に平坦打面となる、③同一の打面で調整打面と平坦打面が共存する、などの状況が認められる。また平坦打面の頭部縁付近に作業面と直交方向に走る擦痕が観察された個体(母岩118・120)も確認できた。このほか打面加工技術で特徴的なものとして、打面(上面)背部側を横方向へ連続的に剥離し作業面から背部へ向かう傾斜面を作出する作業が認められる(母岩47・107)。これらは背稜を有し小口面から石刃剥離作業を開始する母型形状B類のものが該当している。

頭部調整も普遍的な技術として認められ、細かく入念なものが目的的な石刃剥離が開始される段階から加えられる。頭部縁には磨耗がみられるもの(母岩107・121・123)もあり、軽微に擦られた可能性がある。

石刃打面の大きさは個体差が大きく、工程前半と終盤で大型打面が突発的に出現する状況がみられる。これらを除くとやや幅広く薄い、線状・小型の打面が主体的で、幅は0.3~1.5cm、厚さは線状~0.3cm程度が多い。また石刃の剥離開始部は概してリップ状を呈し、バルブの発達は弱いもしくは殆どみられないものが主体を占める。

b) **原石の利用方法** 当該区の石刃技法母岩は狭い小口面に作業面、広い平坦面に側面を設定し、奥行きある背部に向かって一定方向に作業を進行するものが大多数を占める。上述した、主作業面を広い平坦面側に設定しやや扁平な石刃核で作業を行うBD24-26区の状況とは、原石の利用・消費方法が大きく異なっている。

D. 目的的石刃の大きさ

石刃は長10~20×幅2~6×厚0.5~1.5cmが主体で、搬出品と考えられる欠落石刃のサイズは長15~20×幅4~5×厚1~1.5cmと、長10~15×幅2~4×厚0.5~1.5cmの大型・中型2種類が認められる(表V-1)。

【CH35-39区】

A. 素材原石形状

素材原石形状が判別できた母岩は2個体で全て角礫であった。上記した二区域の状況を踏まえると、本石器群は石刃技法母岩にもっぱら角礫を選択したことが理解できる。

B. 母型形状

母型形状が判別できた母岩は2個体あり、いずれもⅤ-14のA類(背部平坦・正面中央に稜線)であった。また他の2個体についてもF類(背部平坦)に分類できた。特に母岩237は端正な紡錘形を呈し、作業面は入念な稜調整を受けて側面を弓なりとし、横断面も整った五角形に整形されている。入念な加工により製作された規格的な母型と捉えられる。

C. 石刃剥離過程の技術

母岩別資料を概観して以下のような調整技術を認めることができた。

a) **打面調整・頭部調整** 打面調整は頻繁に加えられる普遍的な技術として認められ、中・小型の剥離を丹念に加えて打面を山形に整形する石刃も多く認められる。また打面調整が進んだ段階で打面（上面）から背部にかけて横方向の大型剥離が加えられ、水平化した上面を背部へ向かって傾斜するように整形している。以降の打面調整・再生が剥離し易い様に準備したものと捉えられ、BD24～26区、BC27～29区でも類似した技術が認められる。

頭部調整はやや粗い剥離→小範囲への細かな剥離→縁辺への擦りの順で加えられ、個々の石刃剥離に際して予定加撃部の周辺に行われたと観察される。特に山形打面のものには1cm程の範囲に入念な頭部調整と擦りが施され滑らかに摩耗している。

石刃打面の大きさは幅0.5～2.0×厚0.1～0.8cmと広範囲にみられるが、主に幅1cm以下×厚0.1～0.5cmの小型が定形的石刃の打面サイズと観察できる。

b) **石核整形** 母岩237については石刃剥離の進行に伴い順次側面や背部に石核調整が加えられている。打面再生・調整などの作業に先行して石核形状を整え、石刃の連続剥離に備えたものと捉えられる。母型の形成から石刃剥離過程において高い規格性と計画性を認めることができる。

D. 目的的石刃の大きさ

本区域では特に狭長な石刃が剥離されており、大きさは多様で10～20cm以上がみられる。欠落が確認できたのは母岩237で、一母岩から多量の石刃が搬出されたと観察できた。搬出石刃のサイズは、大型：長23×幅2.5～3×厚0.5cm、中型：長15～17×幅2.5×厚0.5cm、小型：長10×幅2×厚0.5cmと復元される（表V-1）。

(4) 石材消費形態

① 石刃生産母岩の区域別の石材搬入・消費状況

使用石材は黒曜石が石器群全体の97%程度に及び大多数を占める（表Ⅲ-30）。黒曜石の中では黒曜石1が4割以上を占めて最も多く、黒曜石3・4・5が各1～3割程度認められる。また、めのうが232点とまとまってみられ、BD24～26区・CH40～43区・CH46～48区で出土している。これら三区域には接合関係が認められ、同一製作集団によって形成された可能性が指摘できる。

本石器群の主体的な作業として黒曜石を石材とした石刃生産がみられるが、区域ごとの搬入形態と生産内容には以下のような差異が認められた。

[BD24～26区]

当該区には36個体の石刃技法関連の黒曜石製母岩があり、搬入形態は原石2個体、粗割原石2個体、母型21個体、石核11個体で認められた。特に大きさ30～45cmの大型角礫原石を素材とした大型母型が多く搬入され、母型には自然面や粗い大型剥離を一定程度残置するものが主体的であった。母型は裏面・側面・作業面が広く加工され、作業面へは比較的人念な調整が加えられるものが多く、作業面の形状や母型の横断面形には定型性がみられる。また、最も多量の母型・石核が持ち込まれ大規模な石器製作作業が展開された区域と考えられる。少数ではあるが、母岩表面の剥離面に風化の進んだものがみられ、遺跡内での剥離面とは明らかなバティナの違いが認められた（母岩26・63）。これらは母型作成と石刃剥離の間に時間的隔りがあったことを意味し、遺跡外での母型形成作業後、一定期間の保管または放置がなされたと考えられる。推測される状況には、A. 遺跡外で母型を製作したがなんらかの理由で搬出されず一定期間経過後に搬出し石刃生産作業が行われた、B. 遺跡内に母型を搬入し一定期間経過させた後に石刃生産作業が行われた、などがあげられるだろう。

目的と判断できる生産石刃は長15～35×幅3～8×厚0.5～2.5cmの大型が主体で、搬出石刃も長

4 広郷型細石刃核石器群

20~35×幅3~6×厚1~2cmの大型が選択されている。また母岩45のように母型形成時の大型剥片を使用して長10×幅2cm程度の小型石刃が量産された状況も認められ、これら小型石刃には搬出の様子がなく、縁辺に連続的な小剥離を加えた削器に加工し遺跡内で消費している。

石刃核の搬出（欠落）はおおよそ4割程度に認められる。遺跡内に遺棄された残核で15cmを超える大型のものは12個体あり、大型石刃の剥離が困難となった段階で作業を終了している。

本区域では生産石刃の多数がツールや細石刃核の素材に使用される特徴があり、多くが遺跡内で消費されている。また出土石刃についても細縁に連続的な剥離痕が観察できるものが多くみられ使用されたことが考えられる。但し単体での搬入品（非母岩・非接合資料）も各器種まとまって出土している。

【BC27-29区】

当該区では「服部台型もしくは広郷型」の石刃技法が復元され広郷型に属する可能性が高いと考えられた。黒曜石製石刃技法母岩は21個体があり、搬入形態は原石1個体、粗製原石5個体、母型9個体、石核6個体で認められた。20~30cmの角礫原石を素材とした母型が多く搬入・製作されているが、母型形成は粗く消極的で、作業面や側面などに自然面や大型剥離面が広く残置する個体が多い。そのため母型形状の規格性は他区域に比べ乏しいと捉えられる。また、BD24-26区と同様に母型剥離面に風化の進んだ個体が少数認められ（母岩108・110）、母型形成から遺跡内での作業再開の間に一定程度の時間的隔たりが推測される。同様の状況は尖頭器製作個体である母岩126にも観察できた。

目的的判断できる生産石刃は長10~20×幅2~6×厚0.5~1.5cmと他区域に比べやや小型のものが主体で、搬出石刃は概ね二つのサイズがあり、長15~20×幅4~5×厚1~1.5cmと、長10~15×幅2~4×厚0.5~1.5cmが選択されている。石核の搬出は21個体中3個体のみで、大多数が遺跡内で消費されている。

【CH35-39区】

当該区では4個体の黒曜石製石刃技法母岩があり、搬入形態は母型が1個体、石核が3個体であった。石核は大きさ20cm弱、母型は30cm大で搬入され、加工が進み自然面の残置がほとんどない個体が主体であった。特に母型は精緻な調整を受け整った紡錘状に加工されている。他区域に比べ管理的・規格的な内容と考えられる。またBD24-26区、BC27-29区と同様に母型剥離面に風化の進んだ個体が認められ（母岩242）、母型作成と石刃剥離の間に時間的隔たりが推測される。

目的的判断できる生産石刃は長10~23×幅2~3×厚0.4~1cmがみられ、他区域に比べ狭長でやや薄手のものが主体である。搬出石刃が認められたのは母型で搬入された1個体のみで、概ね三つのサイズが搬出対象と観察でき、大型:長23×幅2.5~3×厚0.5cm、中型:長15~17×幅2.5×厚0.5cm、小型:長10×幅2×厚0.5cmが選択されている。石刃核の搬出はなく、全て遺跡内で消費されている。また細石刃核や彫器・搔器・削器が出土しているが単体での搬入品と捉えられる。

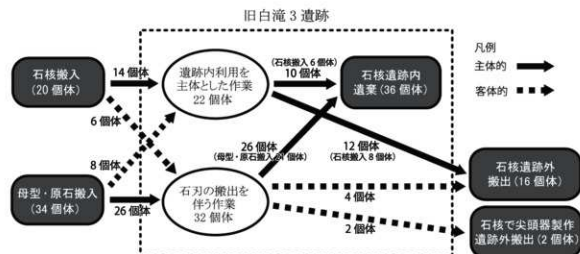
【CH40-43区・CH46-48区】

いずれも母岩別資料に乏しい区域で、黒曜石製の石刃技法母岩は二区域合計で4個体に留まる。母岩搬入形態は20cmを超える大型石核を少量持ち込んだものと観察でき、他区域に比べ石刃生産の規模は小さい。生産石刃はCH40-43区が長30×幅5~7×厚1.5~2.5cmでBD24-26区と同サイズの大型、CH46-48区は長15~20×幅4~5×厚1~1.5cmで、BC27-29区と近似サイズからやや幅広いものと捉えられる。搬出石刃については復元できていない。また石刃核が接合した個体もなく、作業後搬出したことが考えられる。CH46-48区については細石刃核と彫器がまとまって出土しているが、全て搬入品とみられる。両区域とも石刃素材のツール類は非接合資料が主体を占める。

上記した各区域の状況をまとめれば、以下のようになる。

- ① BD24-26区は定期的に加工された大型母型を持ち込んで30cm程度の大型石刃を多量に生産・搬出し、且つ遺跡内で多数のツールを製作し消費している。また4割程度の個体が作業を中断し石刃核を搬出している。
- ② BC27-29区は粗い加工の中型母型を搬入し、10~20cm大の中型・小型の石刃を多量に生産・搬出する。石刃核はほとんどが遺跡内で消費・遺棄される。
- ③ CH35-39区は作業の進行した石刃核もしくは精緻に加工した母型を搬入し、狭長大・中・小型の石刃を生産し、搬出する。石刃剥離作業は遺跡内で完結し、全ての石刃核が遺棄されている。
- ④ CH40-43区・CH46-48区では小規模な生産内容で大型・中型の石刃が生産され、石刃核を搬出したとみられる。

同一石器群の中でも区域によって搬入形態・消費内容が不均質である状況が伺える。作業目的によって消費形態を大きく変異する石器群と捉えられるだろう。但し、各区域に認められる共通点として、①~③の石刃生産が認められる区域(観察母岩54個体)では、母型や粗割原石で搬入した個体(34個体)から搬出石刃が多く生産され(26個体)、これらの多くは遺跡内で消費活動を完結し石刃核を遺棄(21個体)する点があげられる。対して石刃核で搬入された母岩にはあまり搬出石刃が認められず、遺跡内での消費を目的に搬入されたことが推測される(20個体中14個体)。また、石核を搬出する個体では石刃が搬出された例は少数に留まり(16個体中4個体)、本遺跡で使用する石刃の供給を目的として搬入されたことが推測される。つまり、石核で搬入されたものの多くは遺跡内で消費する分量を剥離した後、再び石核を搬出したことが理解できる(図V-19)。



図V-19 広郷型石器群石刃技法母岩の石材消費形態

② 産地分析結果について

本石器群からは49点の資料を抽出して産地分析を行った。内訳は、BD24-26区(単体石器9点・母岩別資料31点)、CH35-39区(母岩別資料4点)、CH40-43区(母岩別資料1点)、CH46-48区(単体石器2点・母岩別資料2点)である。母岩別資料は全て角礫素材の個体である。結果として全て白滝産黒曜石を使用したことが判明し、「赤石山」が36件、「梶加沢・あじさい滝」が13件で、前者が7割以上を占めていた(母岩別資料に限定しても7割を占める)。本遺跡は梶加沢・あじさい滝の露頭に通じる梶加湧別川に近接しているが、「梶加沢・あじさい滝」よりも距離が離れ標高も高い「赤石山」

の角礫原石を主体的に選択し使用したこととなる。「赤石山」産黒曜石が大きさ・形状・石質などの点で本石器群の石刃技法に適していた可能性や、一定の条件を満たす原石がより採取しやすかったことなどを推測することができるだろうか。また、入れ替え作業の結果遺されたと考えられる単体石器も含め、全て白滝産黒曜石で構成される状況は、本石器群の剥離技術が大型原石を豊富に有す白滝産黒曜石に大きく依存していたことを示すものと考えられる。

③ BD24-26区の石材消費量について (図V-20)

A. 搬入

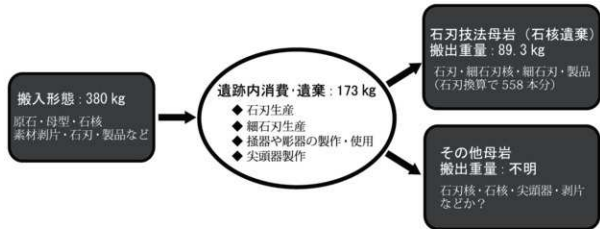
BD24-26区ではSb-17・18に黒曜石製の原石(2個体)・粗削原石(2個体)・母型(21個体)・石核(12個体)・両面調整石器(3個体)・細石刃核(1個体)の小計41個体(内大きさ25cmを超える大型のもの32個体)と、めのう製の石核10個体が搬入されている(表V-1)。搬入時の石器重量を試算したところ、およそ380kgに及ぶ黒曜石母岩と、0.7~1kgのめのう製母岩の搬入状況が復元できた²⁾。搬入時の個々の黒曜石母岩の重量は3~17kgほどとみられ、1個体当たりの平均は9kgであった。また、めのう製母岩の重量は80~130gで計量され、1個体の平均は108gであった。搬入時にもこれと大きく変わらない重さの母岩が搬入されたと観察できる。

B. 搬出

搬出量については、欠落する石器を搬出石器と想定して計算した。上記の搬入重量380kgから母岩の実重量を差し引いたところ、黒曜石の大型母岩で約200kgが欠落していた。この内、石刃技法母岩で石核が接合している個体に限定すると、89.3kgの欠落(搬出)が認められた。当該区広郷型細石刃核石器群の掲載石刃の内、完形品は41点であり、これらから算出される1点の平均重量は160gであった。上の欠落重量89.3kgが全て石刃生産に消費されたと仮定すれば558点前後の石刃が搬出されたと推測することができる。発掘時のサンプリングエラーや母岩別資料として認識されなかった資料の存在を勘案すれば、実際の数字はこれよりも少なくなるが、数百点に及ぶ多量の石刃・石刃素材石器が遺跡外へ持ち出されたことは確実であろう。

C. 遺跡内消費

石刃は遺跡内で消費されたものも多数認められる。母岩別資料に接合した石刃素材の製品は227点(黒曜石202点、めのう25点)があり、器種の内訳は細石刃核15点、彫器62点、搔器6点、削器4点、錐形石器4点、二次加工ある剥片135点(内C4類51点)となっている。彫器や二次加工ある剥片C4類(素材背面に縦長剥離)が多数製作されたほか、多くの細石刃核を製作して細石刃剥離を行った様



図V-20 BD24-26区の石材消費量

子が認められる。細石刃の出土数は1,822点に及び、「交換・入れ替え」を想定しても相当数が遺跡内で生産されたと考えられる。

めのう製母岩10個体からは27点のツール（彫器11点、搔器3点、二次加工ある剥片13点）が製作され、遺跡内での遺棄に至っている。彫器については削片の剥離がみられ刃部再生が行われたことが分かる。また石器製作作業後の石核も9点中6点が遺棄されている。こうした状況からは、小型の母岩を一定量搬入して彫器などをまとめて生産し、遺跡内で消費した様子が復元できるだろう。また多数の母岩が遺跡内で消費し尽されておき、彫器・搔器を使用する集中的な作業を行うための消費形態であると捉えられる。

註) 試算の方法は、①黒曜石原石サンプルから比重を割り出す、②搬入時の大きさ（長×幅×厚）から体積を求め、③体積に密度を掛けて重量を算出する、である。①では黒曜石1（30×18×15cm：重量11.5kg）と黒曜石4（35×20×15cm：13kg）の二つの角礫原石を用い、三つの法量を単純に掛けて体積を求め、平均密度1.3g/cm³を算出した。②でも同様長×幅×厚を単純に掛けて体積を求めた。このため、実際の体積からの誤差が予測されるが概ねの傾向は掴めたと考えている。

④ 母岩別資料の特徴的な分布

BD24-26区ではSb-17・18に黒曜石製の母型・石核・両面調整器41個体（内大きさ25cmを超える大型のもの32個体）と、めのう製の石核10個体が搬入され、主に石刃生産作業が行われている。これら母岩別資料の分布パターンを確認したところ、表V-2に示した6種類が認められた。この内、A-C類は遺物内容と出土地点によって細分を行っている。また、各類型の平面・断面の分布状況を図V-21に示した。

特に多数認められるのがA類で、半数程度の個体がこれに該当する。A類はSb-18に主体的に分布し、一部ツールなどの石器がSb-17などから出土している。Sb-17ではCb-4・6の炉跡に伴う状況が確認できる。またC類はSb-17・18に概ね等量分布するパターンで2割程度が認められるが、やはり主なツール類や個体がSb-17に分布するもの（b類）が多い。上記した二つのパターンはSb-17・18が並行して形成されたことを示し、特にSb-18で主体的に作業が行われて石器が遺棄され、一部石器を選択してSb-17に持ち込んだことが考えられる。

しかし、Sb-18の出土状況であるが、Ⅲ章で述べたように白滝遺跡群の調査の中でも遺物の出土密度が非常に高く、Fc遺物を含めた出土数は188,477点・重量144,361.8gに及んだ。出土地点であるSb-18中央の4×1.2mの狭い範囲に15-20cm程の厚さを持って遺物が密集状態で検出され、正に「土よりも石が多い」出土状況であった。25個体以上の大型母岩を順次この場に持ち込んで作業を行ったとは考え難く、可能性として石器製作作業はSb-18の周辺で行われ、産出した不要な石器をSb-18に集積させたことが考えられる。遺物の垂直分布から、Sb-18はSb-17とは段差状地形を呈した80cmほど低い範囲に位置したことが判明しており、こうした窪地状の地形に不要な石器類を廃棄したと推測できる。

それでは「作業の場」となったのはどの地点であろうか。Sb-17に遺された各母岩別資料の「一部石器」には、ツール類や使用痕ある石器など必要・目的に応じて持ち込まれたと判断できる石器のほかに、薄い小型の剥片や不整形な剥片など、選別されたものとしては不可解な資料も存在する。こうした調整剥片が少数Sb-17から出土する状況は、素材生産作業がその場（Sb-17）で行われたことを示すと考えられる。つまり、Sb-17での作業後に清掃を行い、産出された不要な石器をSb-18に廃棄する。この時に少数取りこぼされたものがそのままSb-17に遺されたと解釈することができるとはならないだろう。

Sb-17のCb-4・6周辺では細石刃・彫器・搔器・削片の集中的な分布が確認されており、細石

4 広郷型細石刃核石群

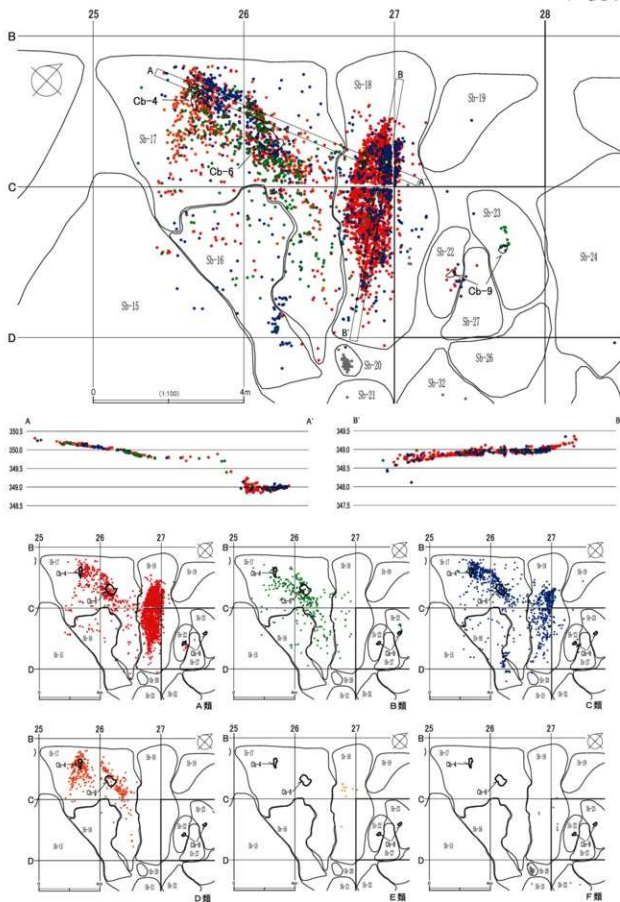
表 V-2 BD24-26区 広郷型細石刃核石群母岩別接合資料の分布パターン

類型	分布パターン	細分	内 容	母岩の大分類 母岩の割合	細石 割合	比率	全割数	比率	
A	Sb-1614< Sb-17< Sb-18	a	主なトカール類や群体がSb-16に分布	0	1	2%	1	2%	
		b	主なトカール類や群体がSb-17に分布	0	17	41%	17	33%	
		c	主なトカール類や群体がSb-18に分布	0	0	0%	0	0%	
		d	その他	0	3	7%	3	6%	
		計		0	21	53%	21	41%	
B	Sb-1614< Sb-17> Sb-18	a	主なトカール類や群体がSb-16に分布	0	0	0%	0	0%	
		b	主なトカール類や群体がSb-17に分布	3	1	2%	5	10%	
		c	主なトカール類や群体がSb-18に分布	0	0	1%	2%	1%	
		d	その他	0	0	0%	0	0%	
		計		3	1	3%	6	12%	
C	Sb-1614< Sb-17> Sb-18	a	主なトカール類や群体がSb-16に分布	0	0	0%	0	0%	
		b	主なトカール類や群体がSb-17に分布	0	4	10%	4	8%	
		c	主なトカール類や群体がSb-18に分布	0	0	1%	2%	1%	
		d	その他	1	3	5%	12%	6%	12%
		計		1	7	10%	24%	11%	22%
D	14(FS-17のみ)	-	-	6	3	5%	12%	11%	22%
E	14(FS-18のみ)	-	-	0	0	1%	2%	1%	2%
F	Sb-16-18< Sb-20-21	-	-	0	0	1%	2%	1%	2%
合 計				10	33	41%	100%	51	100%

表 V-3 BD24-26区 広郷型細石刃核石群母岩別接合資料のSb分布状況

母岩	BD24-26区								BD27-26区					一括 遺物	点数 総計	母岩 大分類	分布 パターンの 細分類	
	Sb-15	Sb-16	Sb-17	Sb-18	Sb-19	Sb-20	Sb-21	Sb21	Sb-22	Sb-23	Sb-25	Sb-27						
23	2	41	154	114										0	212	C	b	
24		2	41	107											4	143	A	b
25		1	26	118											1	195	A	b
26		3	58	133											2	197	A	b
27			9	96											3	38	A	b
28			7	31											2	86	A	b
30			16	68												88	D	b
31		1	87												4	82	C	b
32			27	31											4	82	C	b
34		2	42	43											6	87	C	b
36			13	24											2	39	C	b
37			11	11												11	D	b
41		2	17	121											1	141	A	d
42		7	10	89												106	A	a
44		1	29	33			1			2				1	67	C	d	
45		12	134											1	147	B	b	
50		2	54	316											2	372	A	b
53			14	57												71	A	d
54			113													113	D	b
55			50	260												310	A	b
58		2	7	75										1	85	A	b	
59		2	1	6	60										2	71	A	b
60					8		56	20							5	89	F	a
61		1	5	96	128				1						2	212	C	d
63		2		30	83										2	115	A	b
64				10	77										2	89	A	b
65		1	1	5	98											105	A	b
66			2	19	317											338	A	b
67				8	56											64	A	d
68				25												25	D	b
72		2	1	24	82											89	C	d
75				1	72										1	74	A	b
80			5	30	7										4	46	B	b
81				3	3		1								8	C	d	
82				1	30						1				1	94	A	b
83			1	81											82	D	b	
84			1	38	20											59	C	d
90				10												10	E	c
106				4	14											18	A	d
198				14	3											17	B	c
199				19	10											29	C	c
209		1													9	19	B	b
210			1	5	1										1	8	B	b
211			1	19	7										19	46	B	b
212				9	1										3	13	B	b
213				8											1	9	D	b
214				11											12	23	D	b
215			1	9											2	12	B	b
216				6											1	7	D	b
217				1											1	3	C	d
218			1	7	1										7	15	B	b
総計		11	97	1413	2694	1	57	20	1	2	1	1	1	1	99	4396	-	-

■ 基底的分布
 ■ 主体的な分布 (他の層以上の分布)
 ■ 稀な母岩分布

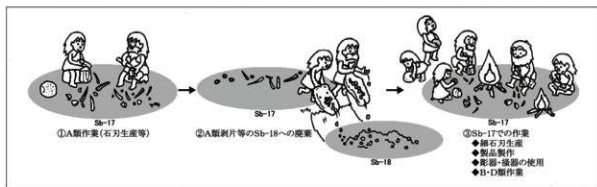


図V-21 BD24-26区 母岩別接合資料の分布パターン

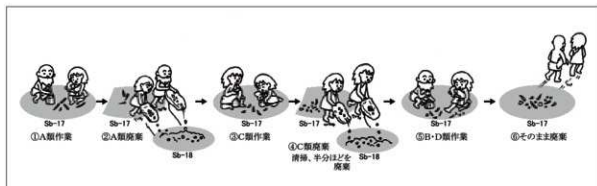
刃生産と細石刃の入れ替え作業、彫器・搔器の使用が炉周辺で行われたことが考えられる。上述した内容と共にまとめれば、①A類作業→②Sb-17の清掃とSb-18への廃棄→③Sb-17炉周辺での細石刃生産と彫器・搔器関連作業、の工程で推移したものと考えられる。B・D類(Sb-17に主体的に分布する)の個体も同様に、A類作業の後にSb-17で作業され、その場に広く遺されたと考えられることができる(図V-22)。またC類(Sb-17・18に等量分布)についてもA類作業・清掃の後に遺された可能性が高いと考えられる。C類には作業工程との脈絡がなくSb-17・18両ブロックに分布する母岩が多くみられ、Sb-17でのまとまった作業の後に不要な石器のおよそ半分ほどを一括してSb-18へ廃棄し、残り半分をその場に遺棄したことが推測できる。

清掃行為を伴うA・C類母岩が先行してSb-17で作業され、清掃後の範囲で再びB・D類の作業が行われてその場に不要石器が遺棄される。また、A類の廃棄が不要石器の大半に及ぶのに対し、C類はおよそ半数に留まる点からは、A類→C類への移行が推測され、全体としてA類→C類→B・D類の順で作業が進められたと考えられる(図V-23)。

A～D類個体のSb-17～18での垂直分布観察を行ったが、上記した新旧関係を示す分布状況を認め



図V-22 Sb-17・18の形成過程



図V-23 A～D類母岩の作業推移

ることはできなかった。但し、C類の分布は概ね平面・断面でまとまりをもって認められ、一括して廃棄された可能性があると考えられる。なお、A類のSb-18における分布を母岩単位で観察したところ、各々の個体がまとまった範囲を持って認められ、集中地点も各個体で少しずつ異なっている状況がみられた。Sb-18の分布が主に廃棄行為によって形成されたことを前提とすれば、個々の母岩は作業終了後に順次Sb-18へ廃棄されたことが考えられる。

(5) 年代

本石器群に伴伴が確実視された遺構にSb-17のCb-4・6とSb-23・27のCb-9がある。放射性炭

素年代値はCb-4が $17,170 \pm 80\text{yrBP}$ (20,830-20,586calBP)~ $17,380 \pm 80\text{yrBP}$ (21,102-20,835calBP)、Cb-6が $16,470 \pm 70\text{yrBP}$ (19,996-19,751calBP)~ $16,860 \pm 70\text{yrBP}$ (20,462-20,228calBP)、Cb-9が $17,600 \pm 70\text{yrBP}$ (21,414-21,128calBP)~ $17,910 \pm 80\text{yrBP}$ (21,833-21,581calBP)の結果が得られている。測定値でおよそ16,500~18,000yrBPの間と捉えられる。

現在提示されている主要な編年案では後期旧石器時代の終末期に位置付けられ、忍路子型細石刃核石器群や有舌尖頭石器群と同階梯とし(寺崎 2006)、11,000~13,500yrBPの年代を想定(山田 2006)している。今回の旧白滝3遺跡での結果はこれを3000~4000年遡る内容であり、近似した測定値は今金町美利河1遺跡A地区(17,500±200~18,200±230yrBP)や上川町日東遺跡(16,560±120~16,940±80yrBP)、千歳市アンカトロー7遺跡(17,760±80yrBP)にも認められる。

広郷型細石刃核石器群が有する製作技術は槍先型尖頭器製作と石刃技法であり、①主に大型石刃を素材とした剥片剥離技術(広郷技法・二次加工ある剥片C4類)が運用され、②楔形細石刃核が欠落する、などが大きな特徴としてあげられる。本石器群に後続すると考えられる札滑型・峠下型の石器群、忍路子型の石器群とは両面調整石器素材の楔形細石刃核の組成の点で技術構造が異なる。広郷型は楔形細石刃核が本格的に採用される以前の石刃を主に運用した石器群と考えることができるのではないだろうか。

また石刃の運用に関しては上記①に加え、細石刃核と彫器の技術形態の近似性や転用例など、石刃を臨機的に効率よく消費する内容も認めることができ、川西型石刃石器群の消費形態を想起させる。

5 服部台型石刃・峠下型細石刃核石器群

(1) 出土区域と出土状況

服部台型石刃石器群は遺跡全体で935点・22,883.4gが出土しており、石器群が判別された全石器(28,557点・523,912.6g)に対し点数比3.3%・重量比4.4%で認められる(表Ⅲ-30・31)。遺跡全体に占める割合は少数に留まる。

峠下型細石刃核石器群は遺跡全体で32点・1,104.2gが出土しており、石器群が判別された全石器(28,557点・523,912.6g)に対し、点数比0.1%・重量比0.2%で認められる(表Ⅲ-30・31)。遺跡全体の中では極少数に留まる。両石器群を合計すると967点(3.4%)、23,987.6g(4.6%)となる。

主な出土区域は服部台型石刃石器群がBD18-23区(Sb-3)、BC27-29区(Sb-22・23・25・27)、DH27-29区(Sb-33-35・40)に、峠下型細石刃核石器群がBH30-34区(Sb-41・44)に認められる(図V-1、表Ⅲ-32)。遺構との共伴が認められたのは、BC27-29区Sb-27のF-4で、近接してIIb類舟底形石器や剣菱形削器、母岩別資料115などが分布している(図V-2)。

服部台型石刃技法は服部台2遺跡(直江ほか 2007)やホロカ沢1遺跡(坂本 2011)で確認された靴加型細石刃核の石器群に組成される技術で、より包括的に石器群を捉えるために石刃剥離技術を示準として「服部台型石刃石器群」を設定している。これに伴う特徴的な石器として剣菱形削器がある。帯広市晩遺跡スポット3(北沢 1988)では靴加型細石刃核、剣菱形削器、峠下型細石刃核の出土が認められ、服部台型石刃石器群と峠下型細石刃核の共時性が高いことが考えられる。また、服部台型石刃を素材として峠下型細石刃核が製作され、白滝の遠隔地で消費されたとする論考もある(直江 2009)。よって本章では両石器群を共時的な連関石器群と捉え、まとめて記載することとした。

(2) 組成石器

服部台型石刃石器群で組成される器種には、尖頭器（4点）、舟底形石器（37点）、細石刃（5点）、彫器（2点）、搔器（1点）、削器（18点）、二次加工ある剥片（14点）、石刃（205点）、縦長剥片（8点）、石刃核（4点）、石核（2点）、剥片（635点）がある（図V-24、表Ⅲ-31）。舟底形石器、削器、石刃が多くみられ、削器には剣菱形削器（坂本 2011）が含まれる。また細石刃は掲載した図Ⅲ-159-154・155（BD24-26区）、図Ⅲ-548-44・45（DH27-29区）が該当する。

峠下型細石刃石器群で組成される器種には、細石刃核（3点）、細石刃（2点）、舟底形石器（2点）、彫器（1点）、搔器（1点）、削片（5点）、石刃（10点）、縦長剥片（1点）、石刃核（2点）、剥片（5点）がある（図V-25、表Ⅲ-31）。以下特徴的の石器に関して個別に記載する。

① 細石刃核

峠下型細石刃核でSb-44から出土している。いずれも石刃・縦長剥片を素材とし、素材長軸方向に打面を作出後、短軸方向に細石刃剥離を行う。打面は顕著に背面側に傾く。細石刃核の高さは2.5cm以下だが、打面と作業面の角度が30~40度と非常に鋭角であるため、作業面の長さ自体は3~4cmを測る。また、細石刃核の上下縁辺から腹面側には微細剥離及び平坦剥離が生じている。こうした諸特徴から峠下型細石刃核2類（寺崎 2006、山田 2006）と判断している。

② 舟底形石器

峠下型細石刃核石器群と服部台型石刃石器群の両者から出土している。

峠下型石器群のものはCH30-34区のSb-41とSb-44周辺で出土しており、大きさは大小あるが、平坦な甲板面の縁辺に細かな調整剥離が加えられ側面観が直線的に加工されたものが認められる。

服部台型石器群のものはBC27-29区Sb-22・25-27とDH27-29区Sb-34・40にまとまって分布し、大きさは大・中・小型がみられる。大型は幅2以上×高3cm以上、中型は幅1.4~2×高2~2.5cm、小型は幅1.3以下×高1~1.5cm程度で認められる。いずれも平坦な甲板面と細かな縁辺調整が特徴で、甲板面側面観は直線的である。また中・大型には下縁側面観が直線的なものも含まれる。BC27-29区では中型がまとまって出土していた。

③ 彫器

服部台型石刃石器群の彫器はBD18-23区とDH27-29区から2点出土している。幅3~4cmのやや大型の石刃を素材に幅広い斜刃彫り面を作出しており（図V-24-52・56）、右刃と左刃がみられる。類似した資料は北見市北上4遺跡BL1から鋭加型細石刃核石器群に伴いまとまって出土している。

④ 搔器

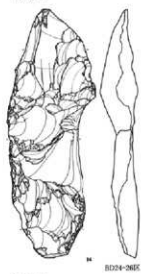
特徴的な形態のものとして、BH30-34区の表土ではあるが、母指状両面調整の頁岩製搔器が出土している（図V-25-22）。同様の石器は今金町ピリカ遺跡D地点、千歳市オリイカ2遺跡、厚真町上幌内モイ遺跡、帯広市晩遺跡などで札滑型や峠下型の細石刃核と共に伴って出土している。

⑤ 削器

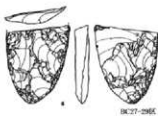
特徴的な形態のものとして、BC27-29区で剣菱形削器が出土している（図Ⅲ-440-27~29）。剣菱形削器の形態的特徴には、a.側縁を急角度調整し尖頭形に加工する、b.基部両面に平坦剥離が施される、c.基部平面は側縁が張り出す「剣菱形」を呈す、d.側面形が直線的である、e.横断面形は先端部が三角形・中央部が台形・基部が凸レンズ状を呈す、があげられ、ホロカ沢I遺跡のものとはほぼ同様の内容であった。

服部台

尖頭器

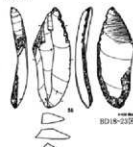


BD24-296E



BC27-296E

形器



BD18-232E



D127-296E

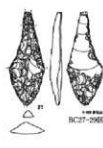
削器



BC27-296E



BD18-232E



BC27-296E

縮石刃



E127-296E



D127-296E

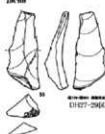


BD24-296E



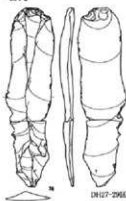
BD24-296E

接器



E127-296E

石刃



D127-296E



BD18-232E

舟底形石器Ⅱb類



BD24-296E



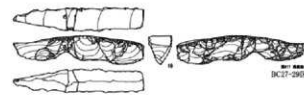
BC27-296E



BC27-296E



BC27-296E



BC27-296E



BC27-296E



BD24-296E



0 5 10 20 mm

図 V-24 服部台型石刃石器群の石器

5 服部台型石刃・舂下型細石刃核石器群

舂下

細石刃核



細石刃



剛片



舟底形石器



形器



核器



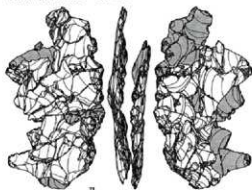
石核



服部台

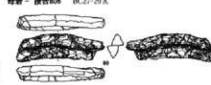
尖頭器・両面調整石器製作母岩

母岩127 種合129K DC27-29K



舟底形石器製作母岩

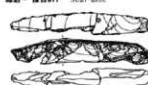
母岩 - 種合80K DC27-29K



種合100 種合4K DC27-29K



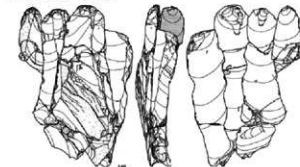
母岩 - 種合117 DC27-29K



非全°C10D10-54K 0 5=1/4 10cm

石刃生産母岩

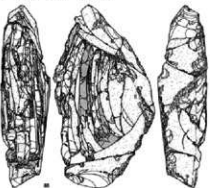
母岩118 種合40K DC27-29K



母岩10 種合10 RD18-21K



母岩111 種合200 DC27-29K



母岩115 種合200 DC27-29K



母岩A・母岩B・母岩C



舂下
石刃生産母岩

母岩222 種合130K



非全°C10D10-54K 0 5=1/6 10cm

図V-25 舂下型細石刃核石器群と服部台型石刃石器群の石核

(3) 石器製作技術

① 全体の様相

当該石器群で確認された母岩別資料は遺跡全体で15個体（服部台型13個体、峠下型2個体）あり、製作内容には、①尖頭器・両面調整石器製作（1A i類：2個体、1A ii類：1個体）、②細石刃生産（2A i類：1個体、母岩223）、③舟底形石器製作（3B i・3B iii類など：2個体）、④石刃生産（全体13個体、4A類：11個体、4C類：2個体、4F類：1個体）がみられる（図V-25）。石刃技法は平坦打面・頭部調整が大きな特徴となっている。全体として石刃生産が主体的な作業と認められ、分割礫・剥片を素材とする舟底形石器製作と少数の尖頭器製作が伴っている。なお、上記の類型別個体数は一つの母岩で2種類以上に該当する場合はそれぞれの類型で集計されており、その合計は実数よりも多く算出される。

② 尖頭器・両面調整石器製作

尖頭器・両面調整石器製作の母岩はBD18-23区（母岩15）、BC27-29区（母岩127）、DH27-29区（母岩172）の各区で1個体ずつが復元されている。素材は25cmを超える大型の角礫もしくは亜角礫で、搬入形態は両面調整体や粗割原石など様々である。製作尖頭器は大きさが復元できた2個体で、長18×幅9cm、長28.5以上×幅13.5cm以上であった。非常に大型の尖頭器の製作が含まれている。

③ 舟底形石器製作

舟底形石器の製作はBC27-29区とDH27-29区で復元されている（母岩89・166、ほか非母岩別接合資料が4個体）。主に礫を半割して素材を得るものと、石刃技法から産出する剥片・石刃を使用するものがみられ、前者が3個体と多くみられる。素材半割面は平滑で密なリングが生じており、もっぱら甲板面に設定される。但し搬入形態は製品（舟底形石器）で持ち込まれたものが5個体と多数を占め、大型→中型、中型→小型への加工が遺跡内で行われたと観察できる。

④ 石刃生産

石刃生産の個体は各区に認められるが、服部台型の石刃技法についてはBC27-29区（母岩109・111・115・125）とDH27-29区（母岩171・174・178）でまとめて復元されている。素材は角礫と転礫があり、原石形状が判別できた個体の中では前者が7割を占める。原石の大きさは20-30cm未満が主体で母型形成はほとんど行われず、角礫原石の形状を利用した立方体・直方体状の石刃核を形成している。但し母岩171は例外的で、粗い石核整形を加え剥離した大型剥片を石器素材に利用している。作業面は広い平坦面に設定するものと小口面に設定するものがみられ、前者は単設打面、後者には両設打面がみられる。打面は平坦打面で頭部調整が縁辺に連続的に加えられる。打面の再生は広い平坦面を作業面とする個体には認められなかった。生産石刃は長10-15×幅2.5-5×厚1-1.5cm程度のものが主体で、母岩178では長25×幅6cmを超える大型品が剥離されている。やや幅広のものが多く含まれる。石刃打面は幅1-2×厚0.3-0.5cmのやや小型のものが多くみられる。母岩115では作業面から剥離された石刃・剥片を素材として舟底形石器製作が行われている。

峠下型細石刃核石器群に伴って出土した石刃技法の母岩はBH30-34区の2個体（母岩222・223）のみである。母岩222は角柱状の原石を素材とした小型の石核で、平坦打面に入念な頭部調整を施して10cm未満の小石刃を剥離している。石核背部に若干の石核調整が施されるほか、頻繁な打面再生剥離が認められる。母岩223は断片的な復元状態で、石核形状や調整技術の詳細は不明である。長さ10-15×幅2.5cm程度の石刃を剥離して細石刃核の素材としている。

(4) 石材消費形態

使用される石材は、服部台型石刃石器群が全て黒曜石で占められ、この内黒曜石4が6割近くに及ぶ(表Ⅲ-30)。峠下型細石刃核石器群も黒曜石が大多数を占め、この内黒曜石1が9割程度に及ぶ。また黒曜石以外では頁岩が1点みられた。

消費形態については区域で様相が異なるため個別に状況を概観する。上述のようにBD18-23区・BC27-29区・DH27-29区が服部台型石刃技法の石器群、BH30-34区が峠下型細石刃核石器群に該当する。

【BD18-23区】

本区で復元された母岩別資料は2個体のみで尖頭器製作と石刃生産(母岩10)が行われている。前者は剥片を搬入して簡略に作業したとみられる。対して母岩10は20cm弱の垂角礫原石を粗制石核の状態で搬入して遺跡内で長15cm×幅3~4.5cm程度の石刃剥離を行っており、比較的多数の石刃の欠落が認められる。また、出土した彫器・削器・石刃などの製品は非接合資料が多く搬入品が主体と考えられる。産地分析では彫器(図Ⅲ-58-56)は所山産、削器(図Ⅲ-59-64)は十勝産の分析結果が得られており、遠隔地から運搬された石器が含まれることが判明している。小規模な生産と搬出、および単体石器の搬入と遺棄が行われた状況と把握できる。

【BC27-29区】

本区で復元された母岩別資料は5個体あり尖頭器製作1個体、石刃生産4個体がみられる。また、非母岩別接合資料で舟底形石器製作が2個体認められる。組成する各器種を補充するような一定量の製作作業が行われた状況と捉えられる。素材は角礫原石が多数を占め、大きさは復元されたもので20~30cmが主体となっている。尖頭器製作の母岩は30cm大の大型両面調整石器で搬入され、ほぼ同じ大きさで薄型化させた尖頭器を1個体搬出したと観察できる。舟底形石器製作の接合資料は舟底形石器を搬入して大型→中型への加工を行い、結果的に破損したため遺跡内に遺棄されている。なお、出土した舟底形石器は単体のものを含め全て破損品であった。石刃技法の母岩は粗制原石もしくは石核で搬入され、この内遺跡内で石刃剥離が開始されたものが3個体を占めている。各個体に多量の石刃の欠落がみられ、長10~15×幅2.5~3.5×厚1cm程度の石刃を目的的に生産し搬出したと観察できる。また、母岩115では作業面で剥離された剥片・石刃から舟底形石器を製作し搬出したとみられる。石刃核は全て遺跡内に遺棄されており、石材を消費し尽くしている。

【DH27-29区】

本区で復元された母岩別資料は5個体あり、尖頭器製作1個体、舟底形石器製作1個体、石刃生産3個体がみられる。また非母岩別接合資料でも舟底形石器製作が2個体認められる。BC27-29区同様、組成する各器種を補充するような一定量の製作作業が行われた状況と捉えられる。素材は角礫(3個体)と転礫(1個体)があり、大きさは25cmを超える大型が主体と観察される。尖頭器製作の母岩は30cm弱の粗制原石で搬入され、20cm弱の尖頭器を製作し搬出したとみられる。作業過程で石刃剥離が介在するがこれらの搬出については不明である。舟底形石器製作の資料は加工の進んだ舟底形石器で搬入されており、素材原石形状等は不明である。遺跡内で再加工を施して石器を小型化させている。出土品が全て破損品であることから、加工に成功した資料は搬出され、失敗したものが遺棄されたと考えられるが、調整剥片のみが接合し舟底形石器が欠落する接合資料は復元されていない。石刃生産の母岩は原石・粗制石核・石核で搬入され、遺跡内で本格的な石刃剥離作業が開始されている。石刃の搬出状況などは不明だが、いずれの個体も石刃核が欠落している。遺跡内で石刃剥離を開始して安定した作業面が形成された後、石核を搬出したものと推測される。

【BH30-34区】

本区で復元された母岩別資料は2個体あり、いずれも石刃生産の母岩である。また、非母岩別接合資料でも石刃生産の個体が2個体みられる。母岩別資料は角柱状の小型原石を搬入して小型石刃を剥離したもの（母岩222）と、石刃を搬入して細石刃剥離を行ったとみられるもの（母岩223）がある。非母岩の接合資料は石刃を少数剥離したもの（接合1308）と、剥片素材の石核から石刃剥離を行ったもの（接合1309）がみられる。全体として少量の石材を搬入し小規模な作業を行った状況と考えられ、細石刃や小型石刃を少量生産し搬出したと観察できる。

石器群全体では石刃生産がやや主体的に行われ、尖頭器製作と舟底形石器製作の作業は少量に留まる。後二者はいずれも半加工品を搬入して遺跡内で加工を継続し、搬出したとみられる。石刃技法は区域によって様相が異なり、遺跡内で石材を消費し尽し石刃を搬出するもの（BC27-29区）、小規模な石刃剥離作業の後石核を搬出するもの（DH27-29区）がみられた。また、細石刃剥離は細石刃核もしくは素材で搬入され、小規模な細石刃生産の後、消費が進んだ細石刃核を遺跡内に遺棄している。産地分析については服部台型の石器群で11点、峠下型の石器群で3点に対し行った。

服部台型石刃石器群では赤石山6点、幌加沢・あじさい滝2点、ケショマップ第2群・所山・十勝が各1点と判定されている。赤石山産の内4点はBC27-29区で出土した角礫を素材とする母岩別接合資料で、粗削原石や石核で遺跡内に搬入されていた。あじさい滝と判定された2点はいずれもBC27-29区の舟底形石器で、製品で遺跡内に搬入されている。所山産・十勝産の遠隔地石材と判定されたのはBD18-23区出土の彫器・削器で、単体石器のため搬入品と考えられる。まとめれば、石刃生産母岩は赤石山の角礫を選択し原石・石核で搬入、舟底形石器は幌加沢・あじさい滝を使用し舟底形石器に加工された状態で搬入して遺跡内で製作作業を行い、ツール類は遠隔地石材のものが製品で持ち込まれた、と理解できる。ケショマップ産についてはBH30-34区出土の石刃を分析したが、同区では「服部台型もしくは広郷型」の石器群とされた資料3点（内2点は母岩220・221）もケショマップ産と判定されている。両者は同一の石器群として捉えられるかもしれない。

峠下型細石刃核石器群では赤石山2点、幌加沢・あじさい滝1点と判定された。赤石山産は単体の細石刃核と石刃生産母岩、幌加沢・あじさい滝は石刃生産の接合資料である。本石器群の石刃生産は白滝産黒曜石に大きく依存した可能性がある。

（5）年 代

本石器群と共伴が確実視された遺構にBC27-29区Sb-27のF-4がある。放射性炭素年代値は $15,710 \pm 70\text{yrBP}$ （ $19,034 - 18,865 \text{ calBP}$ ） $\sim 15,770 \pm 70\text{yrBP}$ （ $19,098 - 18,915 \text{ calBP}$ ）の結果が得られている。層位的な出土状況では、広郷型細石刃核石器群とこれに伴うCb-9（ $17,600 \pm 70\text{yrBP}$ ～ $17,910 \pm 80\text{yrBP}$ ）の40cmほど上位に位置しており、広郷型細石刃核石器群よりも新しい石器群であると捉えられる。

6 有舌尖頭器石器群

（1）出土区域と出土状況

有舌尖頭器石器群は遺跡全体で14,745点・202,679.5gが出土しており、石器群が判別できた全石器（28,557点・523,912.6g）に対し、点数比51.6％・重量比38.7％で認められる。細かい遺物が多く出土したことが分かる。石材は黒曜石が14,731点で大多数を占め、この内黒曜石1が7,042点あり約5

割近くに及ぶ。その他に頁岩が若干見られ13点、190.3gが出土している。

出土区域はBD18-23区、EH22-25区、BD24-26区、BC27-29区、EH26区、DH27-29区とB地区のDF77-78区で認められ、CH35-39区では可能性のある母岩が出土している。この中には特にDF77-78区で大多数を占め、9,191点の多量の遺物がまとまって出土している。母岩別資料も主にこの区域で多く復元され、81母岩が認定されている。その他ではBD18-23区を除く各区域とも母岩別資料が認定されており、BD24-26区で32母岩、DH27-29区で26母岩、EH22-25区で13母岩、CH35-39区で6母岩、EH26区で4母岩となっている（可能性のある母岩も含む）。遺構との共存関係は、BD24-26区のSb-15とF-2が重複して検出され、DH27-29区のSb-37の緑辺部にF-1が検出されている。

(2) 組成石器

確認された器種には、尖頭器(108点)、両面調整器(97点)、細石刃(8点)、削片(6点)、搔器(29点)、彫器(10点)、削器(34点)、錐形石器(3点)、二次加工ある剥片(46点)、石刃(88点)、縦長剥片(114点)、剥片(14,046点)、石刃核(101点)、石核(55点)がみられる。以下、特徴的の石器に関して個別に記載する。

① 尖頭器

尖頭器Ⅰ類(舌部の無い尖頭器)と尖頭器Ⅲ類(有舌尖頭器)の2種類が確認されている。

尖頭器Ⅲ類は、可能性のある破片も含めて11点出土しており、BD24-26区に5点と最も多く、その他にDH27-29区から3点、BC15-17区、EH26区、DF77-78区から1点ずつみられた。黒曜石が主体を占め、舌部のみの破損品だがめう製のDH27-29区から1点出土している。黒曜石の内、産地分析を行った4点中2点が赤石山産で、残りの2点(図V-26-17・1)が置戸・所山産であった。

尖頭器Ⅲ類の形態は、BD24-26区では長さ8cm程で左上がりの斜平行剥離による精緻な加工が施された薄手のものの(図V-26-17)ほかに、カエシが不明瞭なもの(図Ⅲ-153-19)がみられる。その他に、裏面への加工がほとんどなされず、素材腹面が大きく残置するものが存在する(図Ⅲ-153-18)。これは、削器に分類した図V-26-289・290と同様の技術的特徴があり、両者は関連する可能性がある。DH27-29区では5cm程度の小型で舌部が細く緑辺の並行する形状のもの(図V-26-1)や身部が長三角形を呈するもの(図V-26-2)がある。DF77-78区では細身で両側縁が平行する形状のものがみられる(図V-26-1)。このように各区域とも全体的に多様な形態を呈している。

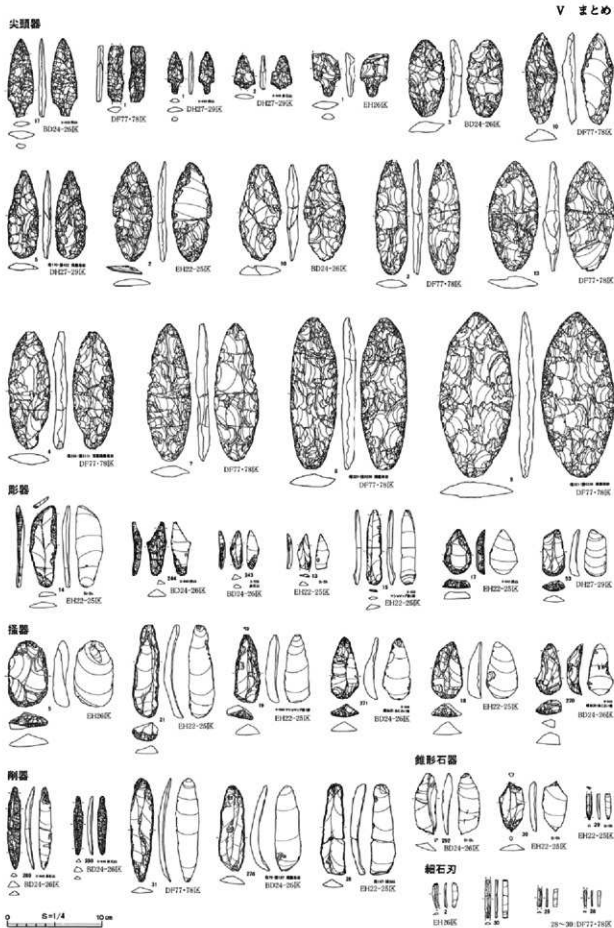
尖頭器Ⅰ類は、DF77-78区以外は完形品が少ないが、他の石器群と混在しているため抽出ができなかったものが多い。全体的な傾向として10cm前後の尖頭器は剥片素材とするものが多い。DF77-78区では、長さ10cm前後で柳葉形のもの为主体とし、20cm前後のものまでが確認されている。

② 彫 器

石刃素材で形態軸と彫刀面との交角が鋭角で、彫刀面傾斜角が90度から背面側に傾くものが目立つ(図V-26-13・243・244)。特にBD24-26区の243・244は忍路子型細石刃核石器群で出土するものと類似する形状である。また、図V-26-15も同様の交角であるが、細身の石刃を素材とし側縁調整もほとんど施されていない交叉型の彫刀面が作出されており、蘭越型や美利河型細石刃核石器群に伴うものと類似している。

③ 搔 器

石刃・縦長剥片素材で、基部形状が尖るものが多くの区域でみられる(図V-26-17・18・19・



図V-26 有舌尖頭器石器群の石器(1)

270・271)。側縁調整は厚手の素材の場合、加工度が強まり全周に施される傾向がある。刃部形状は、加工が左側に偏るものが確認されている（図V-26-19・21）。

④ 削 器

石刃・縦長剥片素材が主体である。側縁の加工は微細のもの、急角度で短いもの、平坦でやや長い加工がある。それらの他に背面全体を覆うような平坦加工が両側から施され、上端部付近にカエシのような挟入りの加工が施されるものが特徴的である（図V-26-289・290）。2点ともBD24-26区で出土している。289は主に片面加工で290は加工が両面に及んでおり、両者とも有舌尖頭器と類似する加工技術が用いられている。但し側面観が他の削器と同様に湾曲しているため、縄文時代のつまみ付きナイフとの関連性も含め今後検討すべきであろう。

⑤ 錐形石器

石刃・縦長剥片を素材とし、端部に刃部を作出する例が多い。両側縁への加工はほとんど施されていない。また、特徴的なものとしてEH22-25区から出土した小形の石刃を素材としたものがある（図V-26-29）。素材は幅6mmで細石刃の範疇に入る大きさだが、厚みがしっかりしており、背面のリングもやや大きい。

⑥ 細石刃

EH26区とDF77・78区で細石刃が僅かに出土している。区域ごとに形態が異なり、前者では器体ややねじれがあり、峠下型細石刃核から剥離されたものと類似する。後者の区域のものは両側縁が細く直線的で厚手のもので広型細石刃核から剥離されたものと類似する。いずれの区域でもその他に細石刃関連の遺物が出土していないため、石器群との関連性が積極的に認められるものではなく、可能性の指摘にとどめた。

(3) 石器製作技術

尖頭器製作技術、石刃剥離技術に関する特徴を述べる。

① 尖頭器製作技術

本石器群で尖頭器製作に関する母岩は、可能性のあるものも含めると135母岩が認定されている。最も多いのはDF77・78区の73母岩で、次いでDH27-29区の25母岩、BD24-26区の21母岩、EH22-25区の10母岩、CH35-39区の4母岩、EH26区の2母岩となっている。

まず搬入の状況について原石形状と大きさおよび搬入形態からまとめる。原石形状は、角礫48母岩、亜角礫17母岩、亜角礫(?)1母岩、転礫50母岩、不明19母岩で、この内大きさのおおよそ把握できた角礫素材の28母岩では30cm以上のものが15母岩で約半数を占め、25cm以上を加えると8割近くに達する。また最大で44.6cmの母岩が存在する（母岩312、図V-28-99）。対照的に大きさがおおよそ把握できた転礫素材の42母岩では、30cm以上に復元されたものはなく、25cm以上が3母岩、20-25cmが11母岩、15-20cmが19母岩、10-15cmが9母岩で、角礫素材のものより小型の原石が選択されている。搬入形態では角礫素材では両面調整石器ないし粗制両面調整器のものが8割以上を占め（図V-28）、対照的に転礫素材では原石ないし粗制原石で搬入されたものが半数を占めている（図V-27）。

製作内容を見ると石核素材の尖頭器を製作する1A i類が最も多く83母岩あり、1A iii類の36母岩も加えると全体の大半を占めている。また、剥片素材の尖頭器を製作する1A ii類も13母岩あり、1A iii類も加えると全体の35%程度となる。剥片素材の尖頭器を製作する母岩があり、なお且つ石核部分でも尖頭器が製作されているものが一定量存在することが本石器群の大きな特徴の一つと言える。1A iii類は特にDF77・78区（27母岩）で多く、BD24-26区（6母岩）、EH22-25区（2母岩）、

DH27-29区（1母岩）で見られた。特にDF77・78区では半数近い尖頭器関連の母岩で剥片素材の尖頭器が製作されていることが分かる。

尖頭器製作の大きな特徴として、粗削段階では打面が大きくバルブのやや発達する剥離により中軸を越えるような剥離がなされ厚みを除去し全体的な形状を粗く整える。その際、加工が横方向ではなく、器体長軸に近い斜方向からの連続的な加工がなされることもある。また剥片素材のものは平坦な素材腹面側への加工があり及ぶことはない。粗削段階後、打面が小型となる細かな加工により器面を平坦化していく。

また、尖頭器製作と石刃生産が複合する母岩が4個体存在する（図V-29）。DF77・78区で2母岩（母岩262・268）あるほか、EH26区で1母岩（母岩159）、DH27-29区で1母岩（母岩168）が確認されている。この内、石刃剥離の後、石刃核部分で尖頭器製作が開始されるEH26区の母岩159以外は、石刃核整形に伴う大型剥片を素材として尖頭器製作を行うものである。

② 石刃剥離技術

石刃剥離に関する母岩は21個体が復元されている。最も多いのはBD24-26区の8母岩（石刃製作母岩中38.1%）で、次いでDF77・78区、EH22-25区、EH26区の3母岩、DH27-29区、CH35-39区の2母岩（可能性のあるもの）となっている。

まず搬入の状況について原石形状と大きさおよび搬入形態からまとめる。原石形状は、角礫3母岩、重角礫2母岩、転礫15母岩、不明1母岩で、転礫が最も利用されている。この内大きさのおおよそ把握できた転礫素材の11母岩では15~20cmの母岩が6母岩で約半数を占め、最小の10.5cmから最大34.8cmまで存在する。同様に大きさがおおよそ把握できた角礫素材の3母岩では、10~25cmの間にまとまりなくみられた。搬入形態をみると、転礫素材では原石、原石（?）、粗削原石を合わせると10母岩あり、2/3を占めている。それ以外は石核ないし母型が4母岩、剥片が1母岩となっている。角礫素材ではまとまりがなく、原石1母岩、母型1母岩、石刃核1母岩で搬入されている。重角礫素材も角礫と同様にまとまりがなく、粗削原石と石刃核で搬入されている。

製作内容を見ると打面調整および頭部調整の施される4C類が最も多く14母岩あり、本石器群の大きな特徴と言える。その他に平坦打面で頭部調整のみ施される4A類が5母岩存在する。この内3母岩はBD24-26区に、2母岩は有舌尖頭器石器群の可能性のあるCH35-39区から出土したものである。母型の形状は裏面に背稜を形成するものが7母岩みられた。この内5母岩はBD24-26区にあり、前述の4A類も合わせるとBD24-26区の特異性が浮かび上がる。また、母型の裏面を平坦に整形するものは7母岩みられ、EH26区・DF77・78区に2母岩、BD24-26区・EH22-25区・CH35-39区に1母岩存在する。母型正面での後調整は、痕跡の残存するものが少なく、BD24-26区では母岩29・88、EH22-25区では母岩140、DF77・78区では母岩335で確認できた。いずれも打面調整の施される4C類の母岩である。平坦打面の母岩では母型形成自体がなされないことが多く、小型舟底形石器石器群の石刃技法と類似している。

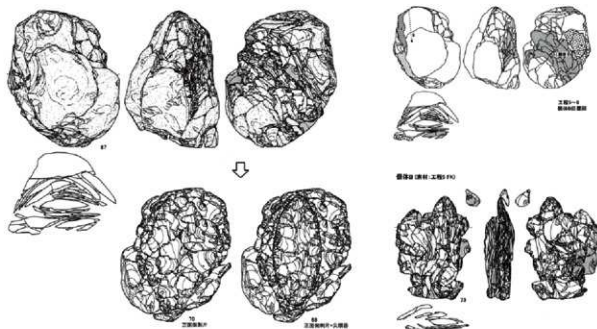
製作された石刃は10cm以内のものが大半で、側面観が若干湾曲する形状を呈している。石刃の打面部分は入念な頭部調整により潰れているものも含まれるが、大半は打面縁辺の潰れまで及んでいない。

(4) 石材消費形態

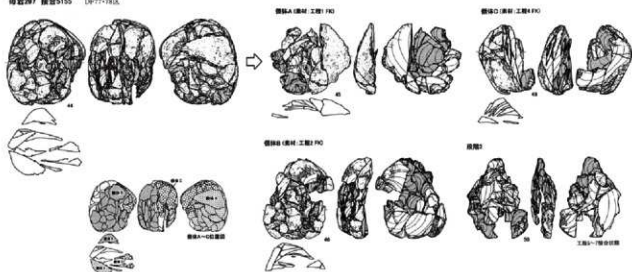
使用石材は黒曜石でほぼ占められ石器群全体の99.9%に及んでいる。黒曜石の中では黒曜石1が約半数を占め、主体的に利用されている。

ここでは石器群の混在がなく単一の石器群がまとめて出土しているDF77・78区の搬入形態と生

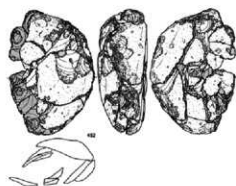
6 有舌尖頭器石群
 尖頭器製作母體(転讓素材)
 母體221 鎌倉5236 DF77-243C



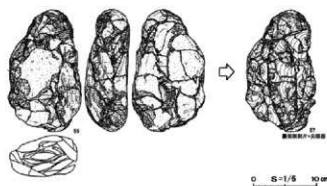
母體227 鎌倉5155 DF77-243C



母體40 鎌倉91 E028-262C



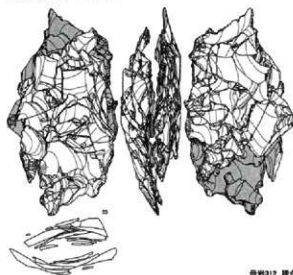
母體295 鎌倉5150 DF77-243C



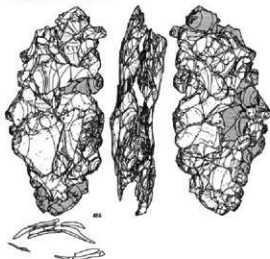
図V-27 有舌尖頭器石群の石器(2)

尖頭器製作母岩(角礫素材・両面調整石器産入)

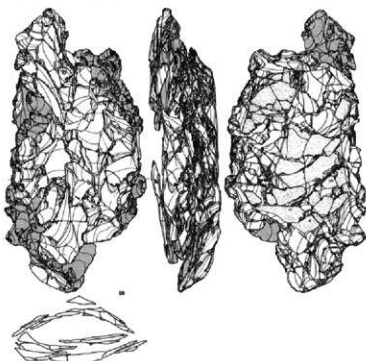
母岩126 鎌倉332 0902-050E



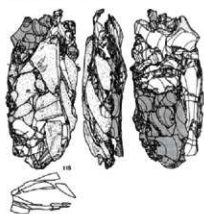
母岩33 鎌倉01 0904-060E



母岩312 鎌倉317 0977-260E

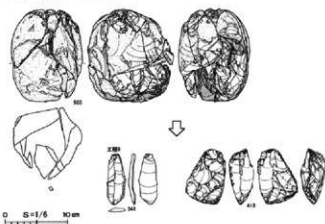


母岩170 鎌倉432 0907-290E

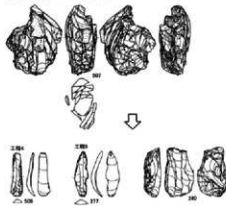


石刃生産母岩

母岩16 鎌倉42 0904-060E



母岩57 鎌倉135 0904-060E



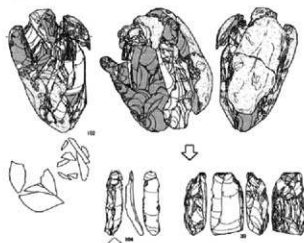
0 5=1/8 30mm

図V-28 有舌尖頭器石器群の石器(3)

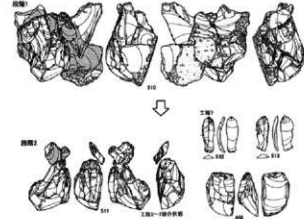
6 有舌尖頭器石群

石刃生産母岩

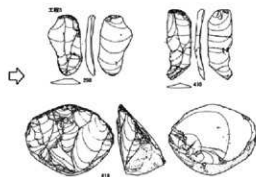
母岩205 複合2001 DPT77-755K



母岩18 複合216 B204-D55K

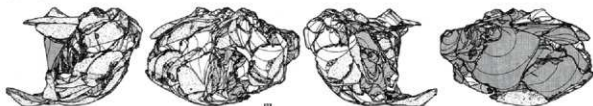


母岩30 複合172 B204-D55K

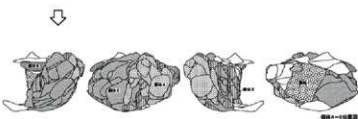


尖頭器製作と石刃生産の複合母岩

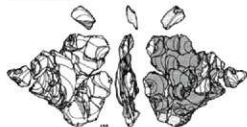
母岩160 複合444 D4127-295K



母岩A (原料 工型) F0



母岩B (原料 工型) F0



母岩C (原料 工型) F0



0 5 10 20 cm

図V-29 有舌尖頭器石群の石器(4)

産内容についてまとめる。

[DF77・78区]

当該区には81個体の母岩別資料がある。搬入形態と利用される原石形状は概ね以下の対応関係が認められる。角礫素材（20母岩）は両面調整石器ないし粗削両面調整石器で搬入するものが多く（16母岩、80%）、亜角礫素材（17母岩）は原石ないし粗削原石で搬入するものが多い（11母岩、64.7%）。また転礫素材（37母岩）では原石ないし粗削原石で搬入するものが主体となる（28母岩、75.7%）。特に角礫素材の母岩に大型のものが含まれ30cm前後の石材が持ち込まれている。最大の母岩は母岩別資料312で長さ44.6cmを越える大きさが想定されている（図V-28-99）。対照的に転礫素材のものは15-20cmの大きさが主体となっている。

遺跡内では主に尖頭器・両面調整石器が製作され（73母岩）、そのほかに3母岩が石刃製作、10母岩が剥片剥離に関連するものであった。なお、石刃製作関連母岩の2個体、剥片製作関連母岩の3個体の母岩に尖頭器製作が含まれている。

DF77・78区では4か所のブロックを設定しているが、単独ブロックのみに分布する母岩別資料のほかに、複数ブロック間にまたがる母岩別資料も存在する。以下に後者の分布パターンをまとめた。

① Sb-61・62に分布し、主体がSb-62でSb-61へ個体や石器が搬出され加工が行われるもの（転礫：母岩263・317）。② Sb-62・63に分布し、主体がSb-62でSb-63へ個体や石器が搬出され加工が行われるもの（転礫：母岩275・290、角礫：母岩269）。③ Sb-61・62・63に分布し、主体がSb-62で個体を主にSb-61・63で加工するもの（転礫：母岩321）。④ Sb-60・62に分布し、主体がSb-60で複数の剥片がSb-62から出土するもの（転礫：母岩300、角礫：母岩312）。⑤ Sb-61・62に分布し、主体がSb-61で複数の剥片がSb-62から出土するもの（転礫：母岩298）。⑥ Sb-62・63に分布し、主体がSb-63でSb-62へ個体や石器が搬出され加工が行われるもの（角礫：母岩322）。⑦ Sb-62・63に分布し、前半の剥離がSb-62、後半の剥離と個体の加工がSb-63で行われるもの（転礫：母岩291・338）。⑧ Sb-62・63に分布し、前半の剥離と個体の加工がSb-63、後半の剥離がSb-62で行われるもの（転礫：母岩292）。

これら①～⑧は以下の3つにグループ分けができる。①～③がSb-62を主体として、他のブロックへの個体の搬出が見られるもの。④～⑥がSb-62以外で主体的な剥離がなされ、複数の剥片をSb-62に搬入するもの。⑦・⑧が剥離工程の進行に伴いブロック間の移動が認められるものである。いずれも複数ブロックにまたがって分布する母岩別資料はSb-62と何らかの関連性があることが分かる。また、利用された原石形状ごとの分布傾向の片寄りは認められなかった。

遺跡外への搬出状況を利用された原石形状ごとにもと、角礫素材のものは石核部分（尖頭器を含む）の大半が遺跡外に搬出されている（15母岩、75%）。亜角礫・転礫素材ではその割合が下がり、前者で8母岩・50%、後者で22母岩・59.5%が搬出されている。それに伴い角礫素材では1母岩（5%）のみ遺跡内に石核部分の遺棄がなされるが、亜角礫（6母岩）・転礫（13母岩）素材では35-38%の母岩で遺跡内への遺棄がなされている。

これらの状況から、角礫素材と転礫・亜角礫素材の母岩に対する対照的な扱われ方が浮かび上がった。すなわち、角礫素材のものは大型で、両面調整石器など加工された状態で搬入され、そのほとんどが加工後さらに遺跡外へ搬出されている。

(5) 年代

本石器群と近接して検出された焼土が2基存在する。F-2はBD24-26区のSb-15の上位で出土

した本石器群と重複して検出され、 $10,140 \pm 50$ yrBP・ $11,957-11,645$ calBP (SHIRA-175・IAAA-82714)、 $10,080 \pm 50$ yrBP・ $11,797-11,409$ calBP (SHIRA-176・IAAA-82715)の放射性炭素年代値が得られている。F-1はDH27-29区Sb-37の縁辺部にあり、 $10,240 \pm 50$ yrBP・ $12,076-11,828$ calBP (SHIRA-164・IAAA-82703)、 $10,100 \pm 50$ yrBP・ $11,921-11,416$ calBP (SHIRA-165・IAAA-82704)の放射性炭素年代値が得られた。両者とも測定値で10,000yrBP前半にまともな値である。現在提示されている主要な編年案では後期旧石器時代の終末期に位置付けられ、広郷型細石刃核石器群や忍路字型細石刃核石器群と同時異相的に捉えられ(寺崎 2006)、 $11,000-13,500$ yrBPの年代が想定されている(山田 2006)。今回の旧白滝3遺跡の結果はこれより1,000-3,000年程度新しい内容である。BD24-26区の石器群中には平坦打面の石刃技法や、つまみ付きナイフと関連する可能性のある特異な削器も含まれており、今まで把握されている有舌尖頭器石器群の特徴と異なる部分もある。今後、本石器群の年代幅が広がる可能性も含め検討をしていきたい。

7 小型舟底形石器石器群

(1) 出土区域と出土状況

小型舟底形石器石器群は遺跡全体で2,420点・26,844.8gが出土しており、石器群が判別された全石器(28,557点・523,912.6g)に対し、点数比8.5%・重量比5.1%で認められる(表Ⅲ-30・31)。

主な出土区域はBD18-23区(Sb-5~7)、EH22-25区(Sb-8~10)、BD24-26区(Sb-15~17)、EH26区(Sb-28・29・30・31)、CH35-39区(Sb-48~51)、CH44・45区(Sb-57)で、特にまとまった出土はBD18-23区(752点・9,529.0g、点数比31.1%・重量比35.5%)、BD24-26区(1,118点・8,044.4g、点数比46.2%・重量比30.0%)、CH35-39区(280点・1,612.2g、点数比11.6%・重量比6.0%)で認められた(図V-1、表Ⅲ-32)。また、工事立会範囲であるC地区からもまとまった出土が確認できたほか、少量の出土がCH40-43区、CH46-48区でみられた。遺構との共伴は認められなかった。

区域間接合は母岩51においてBD18-23区Sb-6とBD24-26区Sb-17の間で確認されており、Sb-17で原石から石刃剥離と舟底形石器製作の作業が行われた後、小剥片1点がBD18-23区に移動したと観察される。またBD24-26区域内においてSb-17とSb-15の分離した分布間での接合が認められたが、Sb-17では広郷型細石刃核石器群とCb-4(17,170±80~17,380±80yrBP)の上位から、Sb-15では広郷型細石刃核石器群とCb-7(15,870±70~15,920±70yrBP)の下位からそれぞれ出し、広郷型細石刃核石器群を挟んだ層位的な上下関係に逆転が生じている(図Ⅲ-36~38)。周水河現象や小規模な地滑りなどの複雑な堆積要因によって古い石器群を包含する土層が新しい石器群の上位に移動したことが推測される。

(2) 組成石器

本石器群で組成される器種には、尖頭器(7点)、両面調整石器(1点)、舟底形石器(45点)、彫器(12点)、搔器(1点)、削器(6点)、二次加工ある剥片(6点)、微細石刃(1点)、石刃(90点)、縦長剥片(43点)、石刃核(15点)、石核(6点)、剥片(2,187点)がある(図V-30、表Ⅲ-31)。舟底形石器が多く出土するが、内31点(68.8%)が母岩剥離面接合資料であり、多くが遺跡内で製作されたものと理解できる。また微細石刃については調査時注意を払って掘削を行ったものの、微細遺物のため多くを拾い洩らした可能性が高い。掲載資料は遺構F-2の土壌をフローテーション作業に

かけた際に発見されている。

① 舟底形石器

舟底形石器はⅠa類とⅡa類で占められ、前者が5点（BD18-23区2点、CH35-39区3点）、後者が40点（BD18-23区4点、BD24-26区17点、CH35-39区9点、CH44・45区2点、C地区8点）認められる。石質は黒曜石4が37点あり、8割以上が赤茶色の黒曜石を選択している。大きさは、Ⅰa類が高0.8~1.3×幅0.5~0.7×長3~4cm、Ⅱa類が高0.6~3×幅1~2.5×長5~10cm程度で認められる。また母岩別資料から復元された大きさも、高2~3×幅1.5~2×長7~10cm程度が主体的で、Ⅱa類とはほぼ同様の数値が計測されている。Ⅱa類の全体的な傾向として、側面調整の剥離のほとんどが甲板面側から加えられる粗いもので、舟底形石器の形態も甲板面・下縁・上面観が湾曲するなど不整形なものが主体的である。対してⅠa類は上下縁からの薄い精緻な加工を受けて整形され、片端部もしくは両端部には竪状剥離が特徴的に観察できる。

② 彫 器

彫器はBD24-26区とCH40-43区で各1点、CH35-39区で2点、C地区で8点が出土しており、C地区を除く本調査区域では各区域に少数が遺された状況と捉えられる。技術形態の特徴では両側縁に連続的な縁辺調整が加えられ、右側縁調整剥離面もしくは右上端部に形成されたノッチ状の調整部を打面として横刃に近い彫刀面が作出されている。彫刀面は背面側に傾くもの2点と腹面側に傾くもの10点が認められ、C地区のものは全て後者で占められる。また彫刀面が腹面側に傾く資料の多くには、背面の中軸より右側へ彫刀面（もしくは彫刀面側）から連続的な小剥離調整が加えられている。彫刀面の傾きは、背面側傾斜が68~82度、腹面側傾斜が115~135度で計測され、微細剥離が観察されるものが含まれる。

③ 石刃核

石刃核はBD18-23区（2点）、BD24-26区（2点）、CH44・45区（4点）、CH46-48区（1点）、C地区（6点）で出土しており、内9点に剥離面接合が認められる。全て平坦打面に頭部調整が加えられたものであり、頭部調整は細かな剥離がほぼ全縁に連続し、縁辺を滑らかに整形している。石核背部の状況は、①自然面で覆われるもの（8点）、②上設からの作業面が周回するもの（4点）、③横・下方向から剥離された作業面が位置するもの（2点）、④石核調整剥離面が位置するもの（1点）がある。半数以上が4AⅣ類の剥離技術で背部に向かって一定方向に作業を進行したもの（①・②）と観察できるが、作業面や打面の転移が行われる個体（②・③）も4割程度認められる。

（3）石器製作技術

① 全体の様相

当該石器群で確認された母岩別資料は30個体あり、製作内容は、①尖頭器・両面調整石器製作（1Aⅰ類：3個体、1Aⅱ類：1個体）、②舟底形石器製作（3A類：10個体）③石刃生産（4AⅣ類：11個体、4AⅤ類：1個体）がある（図V-30・31）。また石刃生産母岩の内7個体、剥片生産の内3個体が舟底形石器が製作されており、全体で20母岩が舟底形石器製作に関わっている。母岩全体を通して黒曜石4（22個体）で角・亜角礫原石（18個体）が多く使用されており、本石器群における石材選択の大きな特徴となっている。

② 尖頭器・両面調整石器製作

尖頭器・両面調整石器製作の母岩はBD18-23区で3個体、CH35-39区で1個体が復元されている。石質は黒曜石3・4で赤茶の黒曜石が主体を占める。素材は角礫が主体で1個体亜角礫が含まれる。

7 小型舟底形石器器群

尖頭器



柄器

削器

石刃

石刃核

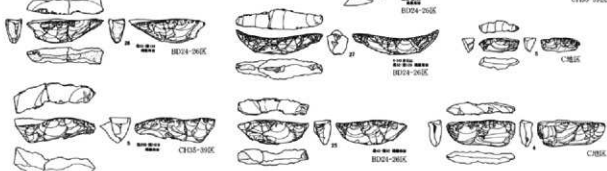


舟底形石器 I a 類

微細石刃

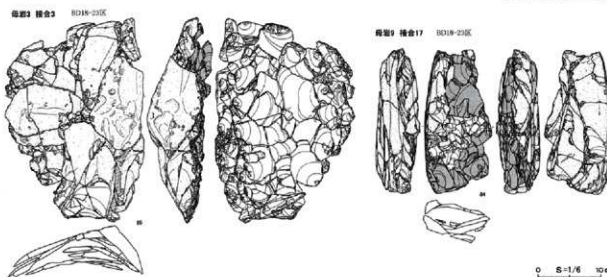


舟底形石器 II a 類



尖頭器・両面調整石器製作母岩

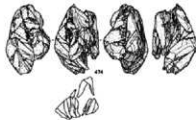
0 1/4 10mm



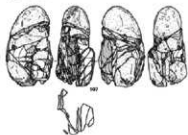
図V-30 小型舟底形石器器群の石器(1)

舟底形石器製作母岩

母岩40 鎌倉124+1657 BD14-26IX



母岩2 鎌倉2 BD18-23IX



母岩43 鎌倉92 BD14-26IX



母岩A (母材 工型) FG



母岩B (母材 工型) FG

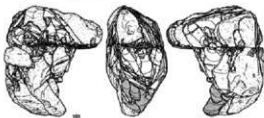


母岩C (母材 工型) FG



石刃生産母岩で舟底形石器を製作するもの

母岩4 鎌倉4 BD18-23IX



母岩D (母材 工型) FG



母岩E (母材)



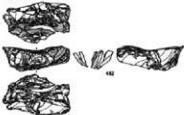
母岩51 鎌倉128 BD21-26IX



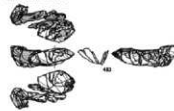
母岩A (母材 工型) FG



母岩C (母材 工型) FG



母岩D (母材 工型) FG



母岩E



工型7-1(鎌倉群) 10cm

図V-31 小型舟底形石器石器群の石器(2)

原石の大きさは22~32cm以上で、中~大型の板状原石が選択されている。搬入形態は大型剥片や粗削両面調整石器などで、BD18-23区では原石面を広く残置した状態で持ち込まれている。製作された尖頭器類は全て欠落し、搬出されたことが考えられる。尖頭器の大きさは長20~27×幅9~17×厚2cm前後に復元できる。

③ 舟底形石器製作

舟底形石器製作に関連する母岩は20個体あり、BD18-23区で6個体、BD24-26区で10個体、EH22-25区・EH26区・CH35-39区・CH44・45区で各1個体が復元されている。石質は黒曜石1・3が各1個体、黒曜石5が2個体、黒曜石4が16個体と大多数を赤茶色の黒曜石が占める。素材は転礫が6個体、亜角礫が3個体、角礫が7個体で後二者は全て黒曜石4であった。原石形状と出土区域の関係では転礫がBD18-23区から、角礫がBD24-26区からまとまって出土している。原石の大きさは15cm前後が主体である。搬入形態は原石・粗削原石が17個体で8割以上に及び、石核や剥片で持ち込まれたものが少数みられる。

技術的には、① 原石を分割・粗削して得られた剥片を舟底形石器の素材とするもの（12個体：母岩2・7・11・13・43・48・49・77・78・103・151・158）、② 石刃技法の過程で産出される剥片を舟底形石器の素材とするもの（7個体：母岩4・40・51・52・62・240・251）、の大きく二つに区分できる。①の内原石を分割するものは大きさ15cm以下の扁平な原石を縦割りして、上記したII a類舟底形石器の大きさに程近い素材を得ている。また原石を粗削りするものは剥片と石核が舟底形石器の素材となり、6~8個体の多数の舟底形石器を製作した母岩も認められる。②はA.石刃技法に先行して原石を粗削し舟底形石器の素材を得るもの（4個体：母岩46・51・52・62）と、B.石刃技法の過程で剥離された剥片を素材に使用するもの（2個体：母岩4・251）に区分が可能で、CH35-39区の母岩240はA・B両方の要素が認められる。AはBD24-26区でまとまって復元されており、長さ16cmを超えるやや大型の角礫を選択し、粗削は先行剥離面を打面に次の剥離が進められるため広く多面に及ぶ。またAは粗削後の石核が正面長方形・側面逆台形を呈する石刃核に適した形状となるよう剥離が行われており、石刃剥離段階に移行した後は舟底形石器の素材は生産していない。Bは打面作出剥片や作業面で大型に剥離された厚手の縦長剥片が素材に利用されている。

舟底形石器の素材剥片は長7~15×幅4~7×厚2.5~5cmほどで認められ、長10cm前後×厚3cm以上が主体的に選択されている。もっぱら素材腹面を甲板面に設定し、素材剥離長軸を石器長軸に設定するものと、素材剥離軸に対し斜方向に石器軸を設定するものがみられる。後者は素材の打撃部などを避けたことが考えられる。さらに素材剥片形状では直線状の背面構成を有するものや横断面が半円・三角形・逆台形を呈するものが主に選択されている。また、石核を素材とする場合は広い剥離作業面を甲板面に設定している。

舟底形石器の加工はもっぱら甲板面側から加えられ、① 打痕の発達するやや厚手剥離の段階から、② 打痕の発達の弱いやや薄型剥離の段階へと移行する過程が認められる。主に①では器体幅の除去、②では側面の整形と高さの除去が行われている。また②の加工が下縁を取り込むように施されることによって直線的な下縁が形成され、次段階として下縁側からの薄い調整剥離が加えられると観察される。大きさは長7~10×幅1.5~2×高さ2~3cm程度に主に加工されている。

④ 石刃生産

石刃生産の母岩は12個体があり、BD18-23区・EH22-25区・CH35-39区で各1個体、BD24-26区で4個体、CH44・45区で5個体が復元されている。石質は黒曜石1・3が1個体、黒曜石5が2個体、黒曜石4が8個体と、多数を赤茶の黒曜石が占める。素材原石形状は転礫4個体、亜角礫1個

体、角礫7個体がみられる。石質と原石形状の関係では黒曜石4で角・亜角礫のものが7個体と半数以上に及び、BD24-26区・CH44・45区でまとまって認められる。原石の大きさは13~20cm程度にまとまっている。搬入形態は原石・粗割原石が10個体で8割以上に及び、石核で持ち込まれたものが少数みられる。

作業過程は、①母型形成を行わずに打面を作成して石刃剥離を開始するもの(5個体:母岩4・139・249・251・252)、②素材原石に粗割を加えた後の石核で石刃剥離を開始するもの(7個体:母岩46・51・52・62・240・250・253)に区分できる。後者②には舟底形石器製作で認められた②のA「石刃技法に先行して原石を粗割し舟底形石器の素材を得るもの」が含まれ、舟底形石器の素材生産と石刃生産の工程が計画的に複合された技術と捉えられる。粗割後の石核形状は正面長方形・側面逆台形となるが、石刃剥離作業段階の作業面確保や剥離角度(打面と作業面のなす角度)などを意識して粗割が行われたと観察される。石刃剥離ではA.打面と作業面を固定して背部に向かって一定方向に作業を進捗するもの(10個体:4・46・51・52・139・249・253)と、B.打面・作業面の転移が行われるもの(2個体:母岩62・240)があり、前者が主体を占める。

石刃剥離技術では平坦打面・頭部調整が普遍的に用いられ、頭部調整は細かく入念なものが作業面全縁に連続的に加えられる。打面と作業面の角度は、残核で計測すると50度程度と鋭角に認められた。石刃は長さ5~10×幅2~3×厚0.5cm前後の小型でやや薄型のものが主に生産されている。

(4) 石材消費形態

使用石材は黒曜石が石器群全体の99.9%を占め、黒曜石の中では黒曜石4が8割程度に及ぶ(表Ⅲ-30)。

上述のように母岩別資料は30個体が復元されている。尖頭器製作母岩(3個体)に使用される素材は大きさ22~32cmを超える板状の角礫が主体で、剥片や粗割両面調整石器などの人為的作業を経た状態で搬入される。石質は黒曜石3・4の茶色のものが占められる。製作された20~27cmの尖頭器は全て搬出されている。

舟底形石器製作・石刃生産母岩は25個体あり、この内20個体が舟底形石器製作に、12個体が石刃生産に関与している。舟底形石器・石刃生産の母岩には大きさ13~17cm程度の角・亜角・転礫が使用され、原石・粗割原石などほとんど無加工の状態で搬入されている。角・亜角礫が半数以上を占め、石質は黒曜石4が18個体あり7割以上に及び、舟底形石器は52個体以上が遺跡内で製作され、内36個体程度が搬出されたと考えられる。接合状況からは長さ7~10×幅1.5~2×高さ2~3cm程度のⅡa類の状態を持ち出されたと観察できる。遺跡内に遺された舟底形石器は全て破損品であり、舟底形石器は全て搬出を目的として生産されたことが推測できるだろう。また、石刃生産後の石刃核・石核は10個体・8割以上が遺跡内に遺棄されており、多くが遺跡内で石材を消費し尽している。石核の欠落がみられた個体は母岩46・51で石核は6~10cm程まで小型化している。両母岩とも石刃剥離以前の粗割剥片で舟底形石器を製作する個体に該当し、石核も舟底形石器の素材に利用された可能性がある。

石器群全体では黒曜石4(22個体)で角・亜角礫原石(18個体)が多く使用されており、本石器群における石材選択の大きな特徴となっている。

産地分析については、黒曜石4の亜角礫母岩1件について行い赤石山産の結果を得ている。他の赤茶色の黒曜石を石材とする角礫母岩についても赤石山山頂部から採取したことが推測される。

(5) 年代

本石器群に明確に共存する焼土・炭化木片ブロックなどの遺構は検出されておらず、直接石器群の年代を測定する試料は得られていない。但し垂直分布で認められる層位的な上下関係をみると、① BD24-26区Sb-17で広郷型細石刃核石器器群およびCb-4 (17,170±80~17,380±80 yrBP)の上位、② 同区城Sb-15で広郷型細石刃核石器器群およびCb-7 (15,870±70~15,920±70 yrBP)の低位とCb-18 (20,330±100~20,390±100 yrBP)の上位に認めることができる。広郷型細石刃核石器群との相対的な関係は①と②で逆転が生じているが、遺構との位置関係ではCb-7 (約15,900年)~Cb-4 (約17,200年)の間に位置し特に矛盾はみられない。調査所見ではCb-4は密な炭化木片が面的に安定して検出され、Cb-7は整った明瞭な掘り込みと厚い炭化物層の堆積が確認されており、遺構に関わる土層の擾乱・攪乱状況は認められない。こうした検出状況を解釈する土層堆積のメカニズムとして、IV章6節の図IV-32に提示されたような二次堆積の可能性が考えられる。まず本石器群の位置関係として、Sb-17における広郷型細石刃核石器器群およびCb-4の上位(新しい)、Sb-15におけるCb-7の低位(古い)、の二つの状況はプライマリーな堆積として認めることができる。しかし、Sb-17C26区における広郷石器群の低位に本石器群が位置する状況は、広郷石器群の分布が平面・垂直ともに疎らな分布であるため、これを二次堆積として捉え、逆転現象が起きた原因として考えれば、遺構の年代測定値に矛盾のない合理的な解釈が成り立つと思われる。よって本石器群の年代は15,870±70~17,380±80 yrBPの間と考えることが可能であろう。これまで提示されている編年案では、後期旧石器時代終末から縄文時代草創期初頭に位置付ける論考が多くみられるが(寺崎 2006、山田 2006、吉川・直江 2013)、上記の場合それよりも2000~3000年以上遡ることとなる。

但し、上記とは整合しない状況も若干みられ、形態的に当該石器群のものと同判断した微細石刃1点(遺構F-2 (10,080±50~10,140±50yrBP)中から出土している。また、遺跡全体の堆積過程についても明確な解明には及んでいない。これらの取り扱いには慎重を要すると付け加えておきたい。

8 その他の石器群について

(1) 石器群と概要

旧白滝3遺跡では前述の石器群の他に川西型石刃石器器群およびホロカ型彫器石器群が確認できた。両者とも石器群を判別できる特徴的な石器を中心として抽出したため、石器組成など全体的部分は不明な点が多い。数量的に少なく、遺跡内での活動が活発ではなかったことが伺われる。そのため石器組成などは石器群の全体像を示すものではない。前者がBD18-23区・EH22-25区、後者がC4-14区・DH27-29区から出土している。

川西型石刃石器群は、白滝遺跡群で3例目の出土例となる(表1-3)。いずれも旧白滝地区で確認されており、他の旧白滝5・旧白滝15遺跡のまとまった母岩を持ち込んで石器製作作業を行っている状況とは対照的である。

ホロカ型彫器石器群は、白滝遺跡群でこれまでも上白滝8・ホロカ沢I遺跡など部分的な出土状況であった遺跡が大半で、本遺跡の出土状況もこれらと合致する。

(2) 川西型石刃石器群

組成石器 石刃20点、縦長剥片1点、剥片1点の合計22点を確認した。石刃は打面部が幅広く、やや粗い打面調整が施されるものが主体的で、剥離開始部の形状はリップとバルブの発達した特徴的な

のを含む。

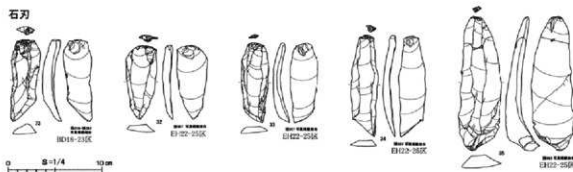
石器製作技術 石器製作技術の部分的な検討が可能な母岩別資料が1個体(母岩219)と母岩として認定していない接合資料が2個体(接合982・987)存在する。いずれも、母型形成の痕跡はなく、粗い打面調整を施した後、石刃剥離をするものであった。接合987では大幅な打面調整により打面の傾きが変化し、その後の石刃剥離軸が傾いているものも存在する(図版97・2)。

製作された石刃は長さ6~10cmで、打面幅が大きいものが主体的であった。剥離開始部はバルブとリップが発達するものが含まれている。

石材消費形態 BD18-23区・EH22-25区とも石核の状態で搬入され、遺跡内で僅かな石刃製作を行い、石刃核を遺跡外に搬出したと推測される。

分布 BD18-23区ではSb-4の南東側にあるE21区から他の石器群のまとまりとは離れて出土している。EH22-25区ではSb-9・11から出土している。

年代 石器群と対応する炭化木片ブロックの検出がなく、石器群の絶対年代を直接的に測る試料は得られていない。帯広市川西C遺跡では恵庭a火山灰層の下位から出土し、共存する焼土から約21,500yrBP前後の年代値が得られている。寺崎康史(寺崎 2006)の編年によれば、2a群石器群として捉えられ、後期旧石器時代前半期の後半にあたる第3期に位置付けられている。



図V-32 川西型石刃石器群の石器

(3) ホロカ型影器石器群

組成石器 削器7点、舟底形石器(I b類)2点、石刃2点、細石刃4点の合計15点を確認した。削器はいずれも大型石刃製で、部分的な両面への平坦加工により尖頭形を呈するもの(図V-33-58)、背面側が平坦加工により全面的に覆われるもの(図V-33-59)がある。舟底形石器はいずれもI b類で、甲板面からの加工を主体として側面調整が施され、片側の端部に縞状剥離が施されている。また、II b類の舟底形石器はDH27-29区からまとまって出土しているが、同区域からは服部台型石刃石器群も確認されている。両石器群とも同様の舟底形石器II b類が含まれていることから正確な分離が不可能であり、組成石器の中に舟底形石器II b類は含めていない。また小型舟底形石器の縞状剥離に対応する形状のものを細石刃として抽出した(図V-33-40~43)。長さ1cm前後で中央部に最大幅部があり、全体的にややねじれた形状となっている。石刃はいずれも長さ20cm以上が推定可能なもので、背面側の長軸方向に線状痕が確認できる(図V-33-68・69)。

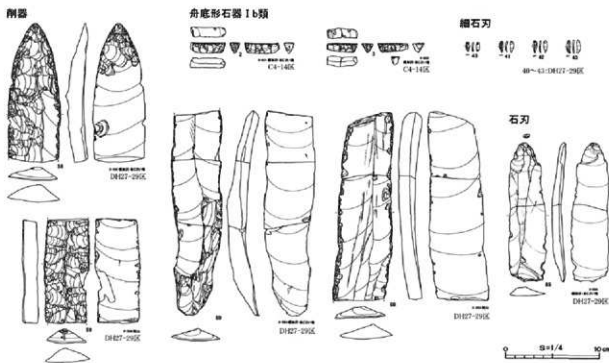
石器製作技術 石器製作技術の検討が可能な母岩別資料は得られていない。石刃・石刃素材石器から判断できる内容を述べれば、背面の剥離面構成と石刃の大きさから、石刃剥離は母型形成を施した大型石刃核から行われたと考えられる。また入念な打面調整・頭部調整により打面頂部の光沢を消失し、

石刃背面（石刃核作業面）に線状痕を付けて剥離する技術が特徴的に認められる。

石材消費形態 母岩別接合資料に乏しく、製品・素材の搬入が主体であったと考えられる。石器製作はわずかで石器の消費・遺棄が主な作業であったと推測される。また、黒曜石の産地分析を行ったところ、幌加沢・あじさい滝産と置戸・所山産の判定結果が得られた。後者は削器59と石刃68の2点である。白滝の他の遺跡で生産された石器が旧白滝3遺跡において遺棄された状況と捉えられる。

分布 C4-14区・DH27-29区に分布し、舟底形石器1b類はC4-14区、削器・石刃・細石刃はDH27-29区のSb-38を中心として出土している。

年代 石器群と対応する炭化木片ブロックの検出がなく、石器群の絶対年代を直接的に測る試料は得られていない。山田哲（山田 2006）の編年によれば、本石器群は広郷型細石刃核を伴う石器群（D群）、幌加型細石刃核を伴う石器群（G1群）と同時期と考えられ、放射性炭素年代測定値から14,000～12,500yrBPの年代が想定されている。



図V-33 ホロカ型彫形石器群の石器

9 土層堆積と石器群の重層的出土状況

旧白滝3遺跡では白滝遺跡群の他の大規模遺跡と同様、複数の石器群が確認されている。これまで他遺跡の調査ではそれらが混在した状態で出土することが一般的であった。しかし、本遺跡では部分的ではあるが、一部の石器群において焼土や炭化木片ブロックを伴いつつ上下関係をもって出土したことを確認した。この点が非常に重要な成果として挙げられる。遺構を伴い尚且つ上下関係のある石器群の出土例は北海道の旧石器時代遺跡において貴重であるため、本節では石器群の重層的な出土状況と遺構との関連性を自然科学的分析における遺跡形成過程の検討から得られた層序コンテキストの情報と共にまとめる。

旧白滝3遺跡で石器群が上下関係をもって出土し、接合作業等によってそれぞれの石器群が特定できた地点は3か所存在する(図Ⅲ-44)。

1か所目は層厚が最も厚く確認されたB25・26区の東西方向の範囲である。最大約2.2mの土層中に3つの異なる遺物包含層が確認されており(口絵2-1、図I-16・17)、上位から小型舟底形石器石器群、中位から広郷型細石刃核石器群、下位から白滝I群が出土した。この地点は自然形成過程を検討しており(IV章5・6)、以下のような見解を得ている。遺物包含層に限定すれば、下位の白滝I群は離水期の水成堆積層から、中位の広郷型細石刃核石器群はDs-Ohの再堆積を含むソリフラクション等の影響を受けた層から、上位の小型舟底形石器石器群は比較的安定した風成堆積層から出土している。各石器群の出土位置はそれぞれ異なる層序コンテクストにあるため、石器群の型式学的な分離が出土層位からも支持される結果となった。石器群の年代は広郷型細石刃核石器群に伴うCb-4・6に17,000yrBP前後の¹⁴C年代測定値が得られている。現在考えられている石器群の年代よりも古い値であるが、Cb-4・6が広郷型細石刃核石器群のブロックと同一レベルで検出され分離できない点、被熱遺物が炭化木片ブロックの周辺に一定量分布している点を考慮すれば、十分検討に値する年代値と言えよう。また白滝I群の年代として、ブロックに近接し、同一レベルから検出されたCb-17の26,870±140yrBPが確度の高い値と思われる。

2か所目はC27区の中央部で上述範囲の南東側に位置する。上位から服部台型石刃石器群、下位から広郷型細石刃核石器群が出土した。なお、下位の広郷型細石刃核石器群は上述範囲のB25・26区と接合関係が確認できており、窪地状の地形に製作石器類を廃棄した遺跡形成過程が復元されている(IV章4(4)④)。石器群の年代は広郷型細石刃核石器群に伴うCb-9に17,000yrBP後半、服部台型石刃石器群に伴うF-4に15,700yrBP前後の¹⁴C年代測定値が得られている。Cb-9は前述の広郷型細石刃核石器群に伴うCb-4・6と近い年代値で、F-4との年代関係も矛盾がない。いずれも確度の高い年代値と考えられる。

3か所目はCD25区に及ぶ南北方向に延びる範囲である。上位から有舌尖頭石器群、概ね中位から広郷型細石刃核石器群、下位から小型舟底形石器石器群が出土した。上位の有舌尖頭石器群はB25・26区(1か所目)で説明した小型舟底形石器石器群とはほぼ同一層序から出土しており、層序コンテクストも同様に安定した風成堆積層から確認された。年代として近接して検出されたF-2に約10,100yrBP前後の¹⁴C年代測定値が得られている。中位の広郷型細石刃核石器群はB25・26区のままの縁辺部にあたり、散在した出土状況で垂直分布のばらつきが大きく、一部は上位の有舌尖頭石器群と同一レベルで確認されている。下位の小型舟底形石器石器群はB25・26区の同石器群との接合関係が複数確認されており、同一集団の所産であることが判明している。したがって本地点とB25・26区の小型舟底形石器石器群は広郷型細石刃核石器群を挟んで上下位置の逆転現象が起っている。この問題について近接する遺構も含め以下でさらに検討する。

調査所見から信頼性が高いと判断できる事例として次の2つが挙げられる。①CD25区の小型舟底形石器群がCb-18(約20,300yrBP)と掘り込みのあるCb-7(約15,900yrBP)に上下を挟まれてまともに検出された。②B25・26区の上位の小型舟底形石器群と下位の広郷型細石刃核石器群が層序コンテクストも含め分離可能な状態であった。これらの出土状況はいずれも上下関係に対して動かしがたいと考えられ、この2つが本遺跡での石器群・遺構の新旧関係を示す基本的な枠組みとして捉えることができる。さらに広郷型細石刃核石器群は前述のとおり、Cb-4・6・9(約16,500~18,000yrBP)との関連性が非常に高いことから、Cb-7の測定年代値との関係性も矛盾しない。対して広郷型細石刃核石器群が上位、小型舟底形石器群が下位として捉えられたCD25区

の出土状況については、広郷型細石刃核石器群にまともなく上下にばらけた状態が認められたため、この地点の広郷型細石刃核石器群にソリフラクション等の二次堆積が起こっていると解釈することが最も合理的と考えられる。つまり小型舟底形石器石器群は、広郷型細石刃核石器群（約16,500～18,000yrBP）の上位にあり、下限はCb-7測定値の約15,900yrBPとすることができる（図V-34）。この場合、地点間の小型舟底形石器石器群に出土レベルの高低差があることから、B25・26区とCD25区に間に地形的な段差の存在が想定され、C27区で述べた窪地状地形がCD25区近辺まで広がっていた可能性を指摘できる。

以上、旧白滝3遺跡における石器群の重層的な出土状況を層序コンテキストや近接遺構の年代と共に確度の高いものに限って整理した。図V-34は3地点それぞれの層位の上下関係と得られた測定値を基に地点間の年代的関係を示したものである。特に小型舟底形石器石器群・広郷型細石刃核石器群に関して従来の学説より大幅に古い年代的な位置付けとなった。この結果はあくまで本遺跡の出土状況を合理的に解釈した結果導き出された仮説的なものである。今後は他遺跡との比較および資料の蓄積を行いさらに検討を重ねていくことが重要と思われる。

層位の上下関係	地点			14C年代値(補正あり)
	CD25区	B25・26区	C27区	
↑ 上位	有古土源器、F-2 ■■■■■		扇形台型石刃、F-4 ■■■■■	F-2 10,080 ± 50yrBP (IAAA-82715) 10,140 ± 50yrBP (IAAA-82714)
				F-4 15,710 ± 70yrBP (IAAA-82707) 15,770 ± 70yrBP (IAAA-82706)
	Cb-7 ■■■■■			Cb-7 15,870 ± 70yrBP (IAAA-82698) 15,900 ± 70yrBP (IAAA-81787) 15,930 ± 70yrBP (IAAA-91789)
	小型舟底形石器 ■■■■■	小型舟底形石器 ■■■■■		Cb-6 16,470 ± 70yrBP (IAAA-82711) 16,860 ± 70yrBP (IAAA-82710)
		広郷型細石刃核、Cb-4・6 ■■■■■	広郷型細石刃核、Cb-9 ■■■■■	Cb-4 17,170 ± 80yrBP (IAAA-82708) 17,380 ± 80yrBP (IAAA-82709)
				Cb-9 17,600 ± 70yrBP (IAAA-91782) 17,910 ± 80yrBP (IAAA-82699)
	Cb-18 ■■■■■			Cb-18 20,330 ± 100yrBP (IAAA-82701) 20,390 ± 100yrBP (IAAA-82702)
↓ 下位		白滝群、Cb-17 ■■■■■		Cb-17 28,870 ± 140yrBP (IAAA-81786)

※破線は整合関係、層位の上下関係は地点内のみ有効

図V-34 石器群・遺構の層位的位置と年代値

引用・参考文献

- 乾 哲也・小野哲也・奈良智法 2006 『厚真町 上幌内モイ遺跡(1)』 厚真町教育委員会
- 井上 巖 2007 『赤石山黒曜石と遺物分布について』 『東北日本の原産地黒曜石 第四紀地質研究所 大場利夫・近堂祐弘・柳原哲司・宮 宏明 1984 『広那丸山遺跡発掘調査報告』 『北見郷土博物館紀要』 第15集 北見市立北見郷土博物館
- 加藤晋平・桑原 護 1969 『北海道先石器遺跡の発掘報告』 『中本遺跡』 永立出版
- 加藤晋平・鶴丸俊明・水村孝行 1971 『多面体形器の問題—北海道東部間村・吉村両遺跡の調査から—』 『考古学ジャーナル』 57 ニューサイエンス社
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1973 『大昔のくねっぶー1—』 北海道常呂郡訓子府町教育委員会
- 北沢 実 1988 『帯広・晩遺跡3』 帯広市埋蔵文化財調査報告第7冊 帯広市教育委員会
- 北沢 実・山原敏朗 1998 『帯広・川西C遺跡』 帯広市埋蔵文化財調査報告第16冊 帯広市教育委員会
- 北沢 実・笹島香織 2000 『帯広・川西C遺跡2』 帯広市埋蔵文化財調査報告第18冊 帯広市教育委員会
- 君 彦彦 1958 『常呂郡置戸町出土のGRAVER—置戸形GRAVER—』 『考古学研究会連絡紙』 第16号 北海道学芸大学
- 木村英明 2003 『白滝観加沢遺跡遠間地点と黒曜石原産地 [第九次調査概報]』 札幌大学埋蔵文化財展示室
- 木村英明・斉藤謙一・山田和史・藤田 祐・徳本通子・小谷直樹・吉崎光男・平山不都・加藤勝子 2005 『白滝観加沢遺跡遠間地点発掘調査の最新の成果概況』 『第19回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 東北日本の旧石器文化を語る会
- 久保勝範・太田敏量・菅野友世 1981 『北見市広郷・開成遺跡発掘調査報告書』 北見市
- 熊谷仁志・谷島由貴 2011 『北見市 北上4遺跡』 北埋調報275 ⑧北海道埋蔵文化財センター
- 桑原 護 1977 『K地点の石器群』 『札幌遺跡』 紋別郡西興部村教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』 日本色研事業株式会社
- 斉藤謙一・山田和史・熊谷 誠・藤田 祐・徳本通子 2005 『北海道紋別郡白滝村観加沢遺跡遠間地点における考古学的調査—第10・11次調査概報—』 『aruck』 1 札幌大学埋蔵文化財展示室
- 坂本高史 2011 『白滝遺跡群Ⅰ』 北埋調報273 ⑧北海道埋蔵文化財センター
- 坂本高史・長沼 孝・直江康雄・鈴木宏行 2000 『白滝遺跡群Ⅰ』 北埋調報140 ⑧北海道埋蔵文化財センター
- 坂本高史・直江康雄 2013 『白滝遺跡群Ⅱ』 北埋調報302 (公財)北海道埋蔵文化財センター
- 佐川俊一・阿部明義ほか 2003 『千歳市 オルイカ2遺跡』 北埋調報189 ⑧北海道埋蔵文化財センター
- 佐久間光平 2007 『東北日本の「ホロカ技法」 細石刃石器群の実相』 『考古学談義』 東北大学大学院文学研究科考古学研究室
- 札幌大学木村英明ゼミナール 1988 『白滝村観加沢遺跡遠間地点における考古学的調査』 『札幌大学教養ゼミナール論集』 14
- 札幌大学木村英明ゼミナール 1989 『白滝村観加沢遺跡遠間地点における考古学的調査』 『札幌大学教養ゼミナール論集』 15
- 札幌大学木村英明ゼミナール 1990 『白滝村観加沢遺跡遠間地点における考古学的調査』 『札幌大学教養ゼミナール論集』 16
- 札幌大学木村英明ゼミナール 1996 『白滝村観加沢遺跡遠間地点における考古学的調査』 『札幌大学教養ゼミナール論集』 22
- 佐藤忠雄・野田武夫 1961 『射的山』 北海道上川郡永山町射的山遺跡発掘調査報告 永山町
- 白滝団体研究会 1963 『白滝遺跡の研究』
- 杉本荘介・戸沢光則 1975 『北海道白滝服部における細石器文化』 明治大学文学部研究報告考古学5 明治大学
- 鈴木宏行 2007 『原産地遺跡における遺跡間変異研究—北海道遠軽町白滝遺跡群出土の小型舟底形石器群を対象として—』 『考古学談義』 東北大学大学院文学研究科考古学研究室須藤隆先生退任記念論文集刊行会
- 鈴木宏行・直江康雄・長沼 孝 2001 『白滝遺跡群Ⅱ』 北埋調報154 ⑧北海道埋蔵文化財センター
- 鈴木宏行・直江康雄・長沼 孝 2004 『白滝遺跡群Ⅳ』 北埋調報195 ⑧北海道埋蔵文化財センター
- 鈴木宏行・直江康雄 2006 『白滝遺跡群Ⅴ』 北埋調報223 ⑧北海道埋蔵文化財センター
- 鈴木宏行・直江康雄 2007 『白滝遺跡群Ⅵ』 北埋調報250 ⑧北海道埋蔵文化財センター
- 鈴木宏行・坂本高史・直江康雄 2011 『白滝遺跡群の石刃技法』 北海道旧石器研究会資料

- 高倉 純 2004 「掻器の形態的変異とその形成過程」『旧石器考古学』 65 旧石器文化談話会
- 高倉 純 2009 「美幌町元町2遺跡出土の石器群」北海道旧石器研究会資料
- 竹岡俊樹 1989 「石器研究法」言文社
- 千葉とよ子・斎藤靖二 1996 『かわらの小石の図鑑』東海大学出版会
- 鶴丸俊明 1979 「北海道地方の細石刃文化」『畿台史学』 47号 畿台史学会
- 鶴丸俊明 1981 「広都型細石刃核」論—その形質と意味—『論集日本原史』吉川弘文館
- 鶴丸俊明 1989 「東アジアにおける細石刃製作技術」『季刊 考古学』 第29号 雄山閣
- 鶴丸俊明 2008 「北海道東・北部の細石刃文化の研究」平成17年度～平成19年度文部科学省研究補助金(基盤研究C)研究成果報告書 札幌学院大学人文学部
- 鶴丸俊明 2009 「のみ形石器/Chisel shaped tool—器種と形式の設定—」『物質文化史学論叢』加藤晋平先生喜寿記念論文集 北海道出版企画センター
- 寺崎康史 2006 「北海道の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』同成社
- 豊原照司・松村論文・坂井通子 2003 「湧別川上流域・白滝村出土の土器」『北方探求』5 北方懇話会
- 直江康雄 2008 「白滝遺跡群Ⅰ」北理調報261 北海道埋蔵文化財センター
- 直江康雄 2009 「白滝遺跡群Ⅱ」北理調報263 北海道埋蔵文化財センター
- 直江康雄 2009 「北海道東部における黒曜石利用」『黒曜石が開く人類社会の交流』公開シンポジウム予稿集 日本学術振興会科学研究費補助金基金盤研究(A)
- 直江康雄 2012 「白滝遺跡群Ⅲ」北理調報286 北海道埋蔵文化財センター
- 直江康雄 2014 「北海道における旧石器時代から縄文草創期に相当する石器群の年代と編年」『旧石器研究』10号 日本旧石器学会
- 直江康雄・鈴木宏行・長沼 孝 2002 「白滝遺跡群Ⅲ」北理調報169 北海道埋蔵文化財センター
- 直江康雄・高橋和樹・立田 理・鈴木宏行 2004 「白滝遺跡群Ⅳ」北理調報210 北海道埋蔵文化財センター
- 直江康雄・鈴木宏行 2007 「白滝遺跡群Ⅴ」北理調報236 北海道埋蔵文化財センター
- 長沼 孝・西田 茂・花岡正光・畑 宏明 1985 「美利河1遺跡」北理調報23 北海道埋蔵文化財センター
- 長沼 孝・越田雅司・佐藤 剛 2000 「上川町 日東遺跡」北理調報141 北海道埋蔵文化財センター
- 中村有吾 2007 「Ⅳ草3 白滝地域の段丘面区分」『白滝遺跡群Ⅴ』北理調報250 北海道埋蔵文化財センター
- 中村有吾 2008 「Ⅳ草3 旧白滝地域のテフラ層と地形環境」『白滝遺跡群Ⅴ』北理調報 261 北海道埋蔵文化財センター
- 中村有吾・平川一臣 1998 「北海道・白滝遺跡周辺のテフラ層序と地形環境」『日本地理学会発表要旨集』54 日本地理学会
- 中村有吾・平川一臣・長沼 孝 1999 「白滝遺跡と周辺地域のテフラ」『地学雑誌』108-5 東京地学協会
- 中村有吾・平川一臣 2000 「大雪御鉢平テフラの岩石記載学的特徴」『火山』45-5 日本火山学会
- 畑 宏明・千葉英一 1982 「服部台2遺跡・近藤台1遺跡」白滝村教育委員会
- 畑 宏明ほか 1985 「湯の里遺跡群」北理調報18 北海道埋蔵文化財センター
- 平川一臣・中村有吾・石川 守 2000 「Ⅳ-3 北海道白滝遺跡と周辺地域のテフラ層序と地形環境」『白滝遺跡群Ⅰ』北理調報140 北海道埋蔵文化財センター
- 福井淳一・越田賢一郎 1999 「柏台1遺跡」北理調報138 北海道埋蔵文化財センター
- 藤本 強 1982 「常呂川流域の細石刃」『北海道考古学』 第18輯 北海道考古学会
- 北大調査団 1960 「白滝遺跡出土の遺物」『北方文化研究報告』15 北海道大学
- 松村論文 1995 「白滝第4地点・第30地点遺跡」白滝村教育委員会
- 松村論文・瀬下直人 2002 「白滝第4地点」白滝村教育委員会
- 松村論文・瀬下直人 2003 「白滝第30地点」白滝村教育委員会
- 松谷純一 1987a 「白滝第4地点遺跡」白滝村教育委員会
- 松谷純一 1987b 「白滝村の遺跡」白滝村教育委員会
- 三浦正人・広田良成ほか 2005 「千歳市 オルイカ2遺跡(2)」北理調報221 北海道埋蔵文化財センター
- 三浦正人・広田良成ほか 2010 「アンカリトー7・アンカリトー9遺跡」北理調報268 北海道埋蔵文化財センター
- 宗像公司 1999 「白滝村赤石山採集の石器について」『北海道旧石器文化研究』 第4号 北海道旧石器文化研究会
- 山田 哲 2006 「北海道における細石刃石器群の研究」六一書房

- 山田秀三 1977 「黒曜石のアイヌ地名を尋ねて」『北海道の文化』 38 北海道文化財保護協会
- 山原敏朗 1998 「北海道の旧石器時代終末期についての覚書」『北海道考古学』 第34輯 北海道考古学会
- 山原敏朗 2001 「丸瀬布町太平2遺跡の細石刃石器群資料」『北海道旧石器文化研究』 第6号 北海道旧石器文化研究会
- 吉川耕太郎・直江康雄 2013 「旧石器時代の年代と広域編年対比-北海道・東北-」『旧石器時代の年代と広域編年対比』 日本旧石器学会第11回講演・研究発表シンポジウム予稿集 日本旧石器学会
- 吉崎昌一 1959 「北海道白滝村Loc.30の石器群」『考古学手帖』 6
- 吉崎昌一 1961 「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族学研究』 26-1 民族学研究会
- 吉崎昌一 1973 「タチカルシュナイ遺跡1972」 遠軽町教育委員会
- 米村哲英 1975 「白滝遺跡」『日本の旧石器文化』 2 雄山閣
- 米村哲英 1977 「白滝遺跡-幌加川遺跡・逸間地点」 白滝村教育委員会
- 和田恵治・佐野恭平 2011 「白滝黒曜石の化学組成と微細組織-原産地推定のための地質・岩石資料-」『旧石器研究第7号』 日本旧石器学会

報告書抄録

ふりがな	しらたきいせきでんじゅうえん
書名	白滝遺跡群Ⅻ
副書名	旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査業務報告書
巻次	
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第311集
編著者名	坂本尚史・直江康雄
編集機関	(公財)北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832 江別市西野幌685番地1
発行年月日	2015年2月27日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
旧白滝3遺跡	紋別郡遠軽町旧白滝325	01555	I-17-148	43°54'39"	143°13'9"	20080507～ 20080813	3,300㎡	道路建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
旧白滝3遺跡	散布地	旧石器時代	焼土 5か所 炭化木片ブロック 19か所 石器ブロック 65か所	尖頭器、舟底形石器、細石刃、細石刃核、彫器、掻器、削器、錐形石器、一次加工ある剥片、石刃、石刃核、赤色顔料原材料、石皿 (総点数 1,470,708点 総重量 1,074,600.8g)		白滝Ⅰ群 川西型石刃石器群 細石刃石器群 (蘭越型・美利河型・広郷型・峠下型) 服部台型石刃石器群 有舌尖頭器石器群 ホロカ型彫器石器群 小型舟底形石器群		
要約	<p>遠軽町白滝地域(旧白滝村)は国内有数の黒曜石産地で、地域内には旧石器時代の遺跡が90か所ほど存在している。旧白滝3遺跡は湧別川左岸段丘上に立地し、赤石山から流れ出る鏡川湧別川と湧別川の合流点から1.4kmほど下流に位置している。</p> <p>旧白滝3遺跡では石器ブロック65か所を調査し、大きく14の区域に分けて整理を行った。確認した石器群には白滝Ⅰ群、川西型石刃石器群、細石刃核石器群(蘭越型・美利河型・広郷型・峠下型2類)、服部台型石刃石器群、有舌尖頭器石器群、ホロカ型彫器石器群、小型舟底形石器群などがある。</p> <p>本遺跡では多数の遺構(焼土・炭化木片ブロック)が、まとまった共存石器を伴って重層的に検出された。石器群は下位から上位へ白滝Ⅰ群→広郷型→服部台型・有舌尖頭器石器群の順で認められる。特に良好に母岩別資料が復元できたのは広郷型細石刃核石器群と有舌尖頭器石器群である。前者はBD24-26区に小～大型母型を多数搬入し、石刃剥離から細石刃剥離までの作業と、彫器・掻器などの製作・使用の作業を併周辺で集中的に行っていた。また広郷型細石刃核石器群は離れた三つの区域間で接合関係が認められ、同一集団が遺跡内空間を広範囲に利用したことが推測される。</p>							

(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第311集

白滝遺跡群 XIV

遠軽町 旧白滝3遺跡

旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査業務報告書

平成27年2月27日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL 011(386)3231 FAX 011(386)3238

印刷 中西印刷株式会社
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
TEL 011(781)7501 FAX 011(781)7516
